財団法人　市原市文化財センター調査報告書 第51集

市原市姉崎東原遺跡B地点

（あねさきひがしはら）

1993

大和建設株式会社

財団法人　市原市文化財センター

序　　文

「王賜」銘鉄剣を出土した稲荷台１号墳や、東国最古の古墳といわれる神門５号墳に代表されるように、市原市には多くの古墳があります。本市を南北に貫流する養老川の流域に展開している多くの古墳群の実態については、まだまだ解明しなければならない課題も多く、地道な調査・研究を続けていくことが求められています。

一方、首都圏のベッドタウンとして、本市では様々な開発が進行しています。いわゆるバブル経済の破綻によって、ややその勢いは緩やかになった感はありますが、文化財の保護と開発との調和の問題はつねにつきまとっています。さらに、地球規模での環境問題が議論される昨今においては、地域における環境保護と文化財の保護および開発事業の三者の調和を考えて行かなければならない状況に至っていると言えましょう。

さて、養老川下流左岸には、千葉県指定文化財である姉崎天神山古墳・二子塚古墳、市原市指定文化財である鶴窪古墳などに代表される姉崎古墳群が展開しています。かつての上海上国の国造の奥津城と目されるこの一帯には、県内最大級の古墳が点在し、往時の勢力を物語っているようです。しかしながら、それら古墳の築造の序列や実態については、まだ不明な点も多く、諸説が入り乱れている感もあります。二子塚古墳の石枕や山王山古墳の銀装の大刀は広く知られるところですが、古墳群全体の動向や、古墳を築いた人々の集落との関係などについては、今後の資料の蓄積に期待せざるを得ない部分も多々あります。

今回報告する姉崎東原遺跡Ｂ地点は、天神山古墳の隣接地の宅地造成に先立って、記録保存を目的として、発掘調査を実施したものです。調査の結果、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落の一部と、古墳時代前期の前方後方墳などが検出されました。なかでもこの前方後方墳は、周溝が全周せず、低墳丘のものと推測されますが、これまで同種の古墳が、天神山古墳のような前期古墳に隣接して検出されたことはほとんどなく、前期古墳を築造できない地域のみに見出される形態の古墳と考えられてきたものです。今回のこの例は、本文中でも報告者がふれているように、これまでのそういった理解に対する変更を要請するものであり、姉崎古墳群さらには県内の古墳研究のうえでも貴重な成果と位置づけることができましょう。

本報告が研究者のみならず広く市民の方々の活用に供されることを願ってやみません。さらに今後とも文化財保護に対する理解を深めてくださることを期待するものです。

最後に、調査にあたり、ご指導、ご協力を賜りました千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課、大和建設株式会社をはじめ、関係諸機関、地元の方々にお礼申し上げるとともに、調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成５年８月31日

財団法人　市原市文化財センター
理事長　植　草　久　善

例　　言

1．本書は、千葉県市原市姉崎字東原2715番地所在の姉崎東原遺跡Ｂ地点の調査報告書である。

2．調査は、宅地造成に先行して実施されたものであり、大和建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが行った。

3．調査対象面積は、2,100㎡であり、対象面積全域に対して本調査を実施した。

4．発掘調査、整理作業は、下記のとおり行った。

本 調 査　平成４年４月１日～平成４年７月20日　　調査担当者　高橋康男

整理作業　平成４年７月21日～平成５年９月30日　　整理担当者　高橋康男

5．本書の執筆、作成は高橋康男が担当した。なお、第３章「東原遺跡の火山灰層と地割れ」については、神奈川県立旭高校教諭上本進二氏の玉稿を賜った。

6．財団法人市原市文化財センター調査コードは、セ－１４９である。

目　　次

本 文 目 次

序　　文
例　　言
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
遺跡の位置 …… 1
周辺の歴史的環境 …… 1
隣接地の状況 …… 4
第２章　調査した遺構と遺物 …… 6
１）住居跡 …… 6
１号 …… 6
２号 …… 7
３号 …… 7
４号 …… 8
５号 …… 8
６号 …… 8
７号 …… 10
８号 …… 11
９号 …… 12
10号 …… 14
11号 …… 14
12号 …… 15
13号 …… 16
14号 …… 19
15号 …… 19
16号 …… 20
17号 …… 21
18・19号 …… 23
20・21号 …… 24
22号 …… 25
23号 …… 25
24号 …… 25
25号 …… 28
26号 …… 31
27号 …… 31
２）墳墓 …… 33
28号 …… 33
29号 …… 34
30号 …… 43
３）土坑 …… 44
31号 …… 44
32号 …… 44
33号 …… 45
34号 …… 45
35号 …… 46
36号 …… 46
４）溝・道 …… 46
37号 …… 46
38号 …… 47
39号 …… 49
40号 …… 49
41号 …… 50
42号 …… 50
第３章　東原遺跡の火山灰と地割れ …… 59
１）遺跡の火山灰層について …… 59
２）地割れについて …… 60
第４章　まとめ …… 61

挿図目次

第１図　姉崎東原遺跡Ｂ地点と周辺の主要遺跡 …… 2
第２図　姉崎天神山古墳と姉崎東原遺跡 …… 3
第３図　姉崎東原遺跡Ｂ地点遺構配置図 …… 5
第４図　１号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 6
第５図　２号（住居）実測図 …… 7
第６図　３号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 7
第７図　４号・６号（住居）実測図 …… 8
第８図　５号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 9
第９図　７号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 10
第10図　８号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 11
第11図　８号出土ガラス玉 …… 12
第12図　９号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 12
第13図　10号（住居）実測図および出土遺物実測図（１） …… 13
第14図　10号出土遺物実測図（２） …… 14
第15図　11号（住居）実測図 …… 15
第16図　12号（住居？）出土遺物実測図 …… 16
第17図　13号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 17
第18図　14号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 18
第19図　15号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 19
第20図　16号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 20
第21図　16号出土土製品 …… 21
第22図　17号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 21
第23図　17号出土鉄製品 …… 21
第24図　18号・19号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 22
第25図　18号出土管状土錘 …… 23
第26図　20号・21号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 23
第27図　22号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 24
第28図　23号（住居）実測図 …… 25
第29図　24号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 26
第30図　25号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 27
第31図　26号（住居）実測図および出土遺物実測図 …… 28
第32図　27号（住居）実測図および出土遺物実測図（１） …… 29
第33図　27号（住居）出土遺物実測図（２） …… 30
第34図　27号出土鉄製品 …… 31
第35図　28号（墓）実測図および出土遺物実測図 …… 33
第36図　29号（前方後方墳）実測図 …… 35～36
第37図　29号（墓）出土遺物実測図（１） …… 37
第38図　29号（墓）出土遺物実測図（２） …… 38
第39図　29号（墓）出土遺物実測図（３） …… 39
第40図　29号（墓）土層断面実測図 …… 40
第41図　29号出土石製品 …… 40
第42図　30号（墓）実測図および出土遺物実測図 …… 43
第43図　30号出土管状土錘 …… 44
第44図　31号・34号（土坑）実測図 …… 44
第45図　32号（土坑）実測図 …… 45
第46図　33号（土坑）実測図および出土遺物実測図 …… 45
第47図　35号（土坑）実測図 …… 46
第48図　36号（土坑）実測図 …… 46
第49図　37号（溝）実測図 …… 47

第50図　37号出土石製品 …… 47
第51図　38号（溝）実測図および出土遺物実測図 …… 48
第52図　39号（溝）実測図 …… 49
第53図　40号（溝）実測図 …… 49
第54図　41号（溝）実測図 …… 50
第55図　42号（台地整形）実測図および出土遺物実測図 …… 50
第56図　42号（台地整形部）実測図 …… 51
第57図　Ｄ－３区出土遺物実測図 …… 52
第58図　Ｄ－３区出土石製品 …… 53
第59図　弥生土器拓影図（１） …… 54
第60図　弥生土器拓影図（２） …… 55
第61図　弥生土器拓影図（３） …… 56
第62図　縄文土器拓影図 …… 57
第63図　姉崎東原遺跡全体図 …… 58
第64図　トレンチ東壁土層断面実測図 …… 58

表　目　次

第１表　１号（住居）出土土器観察表 …… 6
第２表　３号（住居）出土土器観察表 …… 7
第３表　５号（住居）出土土器観察表 …… 9
第４表　７号（住居）出土土器観察表 …… 11
第５表　８号（住居）出土土器観察表 …… 12
第６表　９号（住居）出土土器観察表 …… 13
第７表　10号（住居）出土土器観察表 …… 14
第８表　12号（住居）出土土器観察表 …… 16
第９表　13号（住居）出土土器観察表 …… 17
第10表　14号（住居）出土土器観察表 …… 19
第11表　15号（住居）出土土器観察表 …… 20
第12表　16号（住居）出土土器観察表 …… 21
第13表　18・19号（住居）出土土器観察表 …… 23
第14表　20・21号（住居）出土土器観察表 …… 24
第15表　22号（住居）出土土器観察表 …… 25
第16表　24号（住居）出土土器観察表 …… 27
第17表　25号（住居）出土土器観察表 …… 27
第18表　26号（住居）出土土器観察表 …… 31
第19表　27号（住居）出土土器観察表 …… 32
第20表　28号（住居）出土土器観察表 …… 33
第21表　29号（墓）出土土器観察表 …… 41～42
第22表　30号（墓）出土土器観察表 …… 43
第23表　33号（土坑）出土土器観察表 …… 45
第24表　38号（溝）出土土器観察表 …… 48
第25表　42号（台地整形）出土土器観察表 …… 50
第26表　Ｄ－３区出土土器観察表 …… 53

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡の位置

今回調査した姉崎東原遺跡Ｂ地点は、養老川下流左岸の標高約36ｍの台地上に位置する。北側は養老川本流の沖積低地に接し、南側は支谷が東西方向に延びており、東西方向に長い舌状台地の上に本遺跡はある。いわゆる袖ヶ浦台地の北縁にあたる部分であるが、南方の台地は青葉台団地の造成により、大きく姿をかえており、かつての景観を想起するのは若干困難な状況にある。

本遺跡は、その名の示すとおり、昭和62年度に調査を実施した姉崎東原遺跡に隣接するものである。その際には、弥生時代中期宮ノ台式期の住居跡や、円墳の周溝の一部などが検出されている。後世の削平により、各遺構の遺存状態は必ずしも良好ではない。ハードロームが一部で露出するほどの削平であるため、住居跡の掘り込みは20㎝前後に留まっているものが多く、良好な遺物の出土も、前述の宮ノ台式の一括資料を除いては、ほとんど認められなかった。このような状況に至った原因としては、天神山古墳の周溝の埋め戻しに際して、周辺から大量の土の移動を行った可能性を指摘しうる。なお、その場合、周溝を埋め戻す必要性がいかなる事情によって発生したかは、現段階では定かではない。耕作上の必要からか、あるいは、本論で触れるような台地整形に伴なう土木事業の一環のなかで捉えるべきか、いずれにせよ確証は欠く。

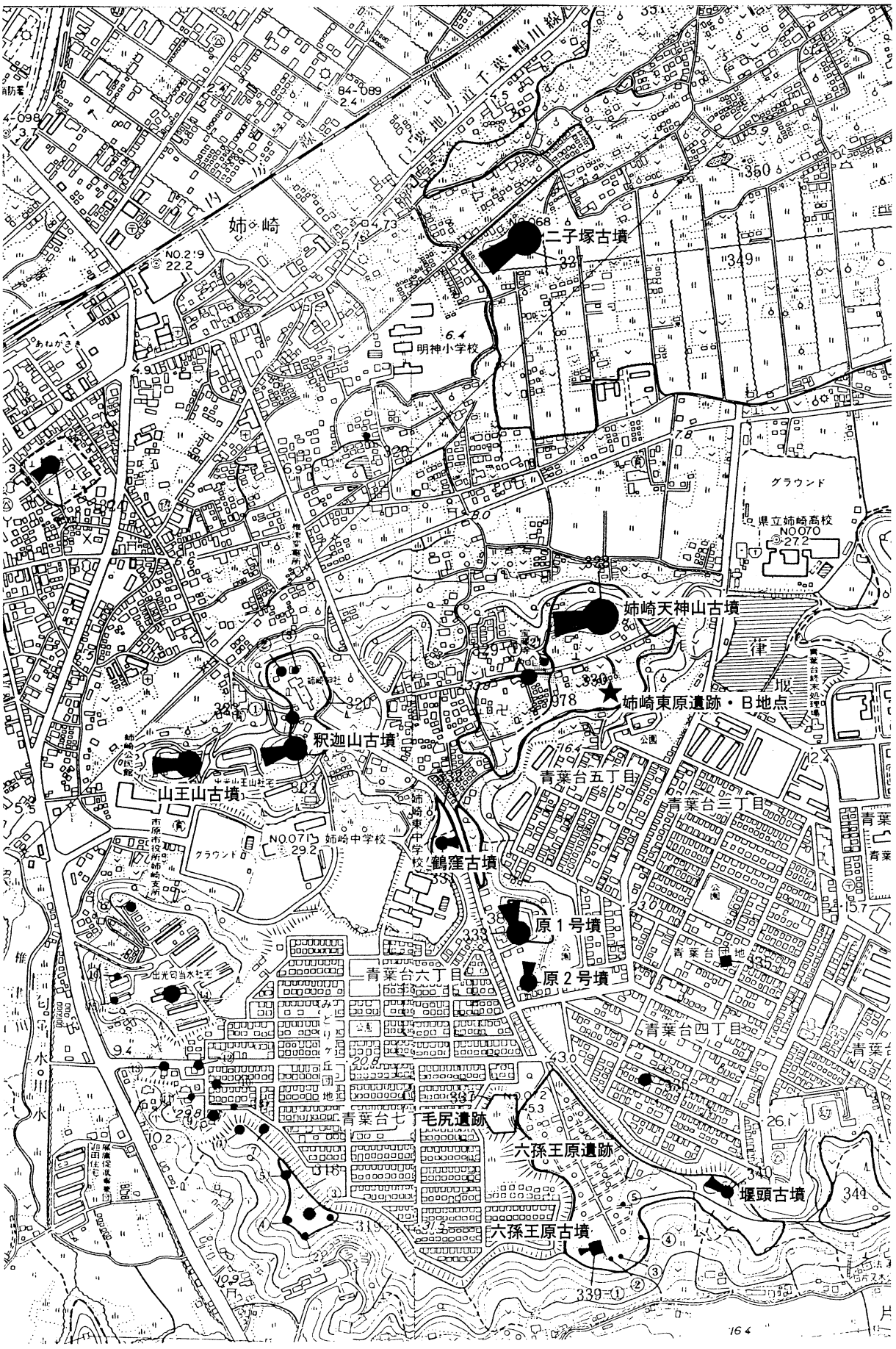
なお、本遺跡は、姉崎台遺跡として遺跡分布図等で広く括られている遺跡の一部にあたり、前回の調査から小字名を使用し「東原」遺跡としているものであり、本来「台遺跡」として包括されるべきものと理解してさしつかえなかろう。

周辺の歴史的環境

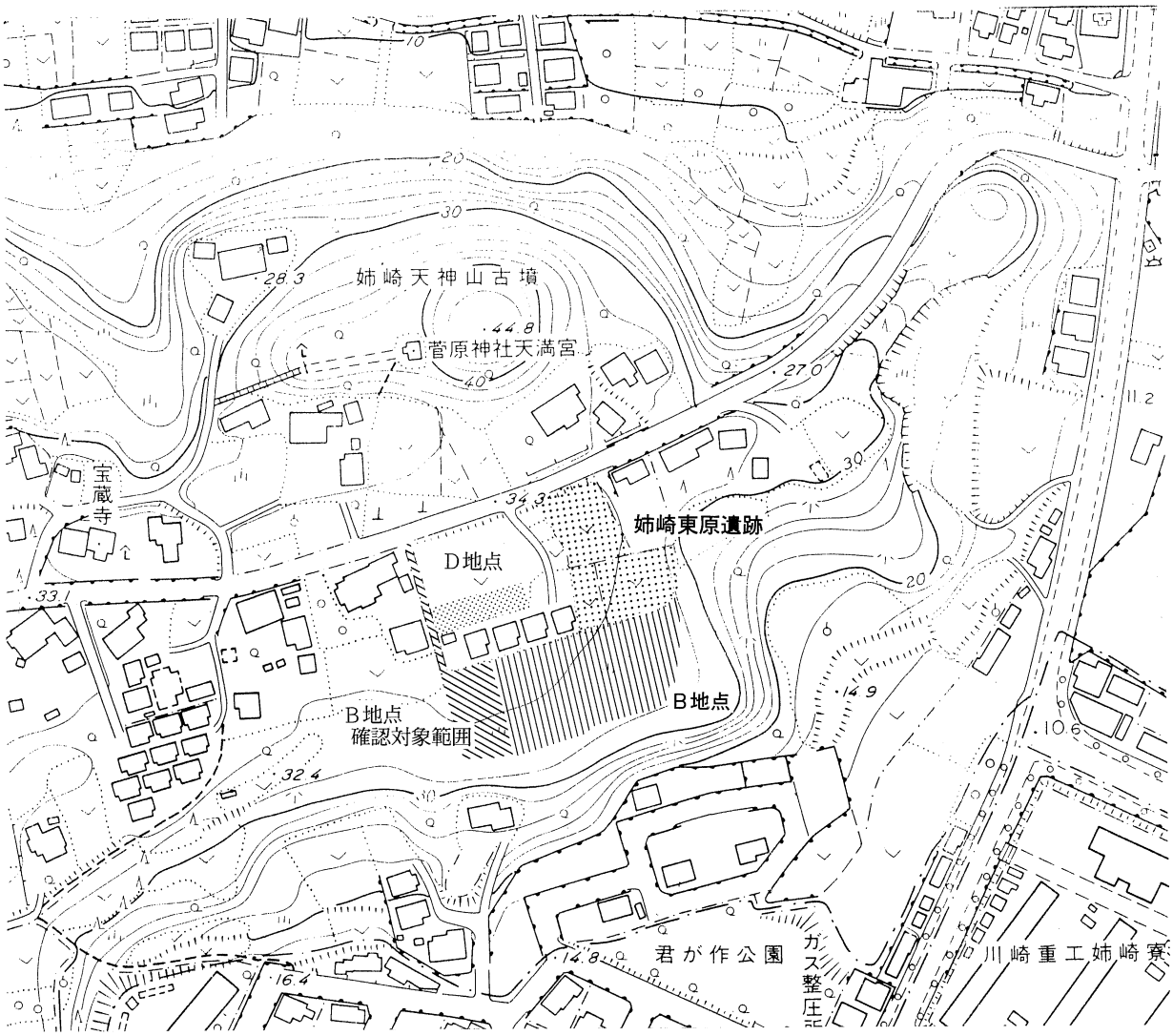
本遺跡のすぐ北側には、千葉県指定文化財である姉崎天神山古墳が存在する。本遺跡の歴史的環境を記述することは、姉崎古墳群について触れることと等しい。したがって、ここでは、若干長くなるが、姉崎古墳群の概略についてみていくこととする。

姉崎古墳群一帯は、上海上国の国造の本拠地と目されている地域である。図に示したように、台地の北側に比較的集中して大規模な前方後円墳が分布していることがみてとれる。狭義には、姉崎古墳群と言った場合、天神山古墳を東限とした見方もあるが、むしろもう少し広い範囲で捉える傾向が強く、平成３年度に確認調査が実施された、今富塚山古墳までを取り込んだうえで、検討する場合が多くなっている。

周辺一帯の調査については、対岸の国分寺台ほどには大規模に行なわれていないのが現状である。特に集落の調査については、毛尻遺跡、六孫王原遺跡で面的な調査が実施された以外にはまとまった成果はないと言えよう。一方、古墳の調査に関しては、学術調査、緊急調査が数カ所の古墳において実施され貴重な遺物を出土した例もみうけられる。たとえば、低地上に位置する県指定文化財である二子塚古墳からは、直弧文をほどこした石枕や立花、銀製の耳飾りが出土し、社宅新築に先行して調査が実施された山王山古墳からは、銀装の大刀、胡籙などが出土している。ただし、これら成果がある一方で、姉埼神社境内に存在する釈迦山古墳は、墳形から前期に属するものと推測されるに留まっており、また天神山古墳についてもかつて測量調査が実施されたものの具体的様相は一切明らかになっていない。さらに、先年確認調査が実施された今富塚山古墳においては、周溝から焼成前底部穿孔土器が出土し、その年代観については４世紀前半とされている。木炭槨の存在から時期的に古相



第1図　姉崎東原遺跡B地点（星印）と周辺の主要遺跡（1／10000）



第2図　姉崎天神山古墳と姉崎東原遺跡（1／2500）

を示すものと理解されてきたものではあるが、その調査により、具体的年代観が与えられるところとなった。しかし、天神山古墳、釈迦山古墳、塚山古墳の三者の関係については明確にはなっていないという状況は、依然として残っている。各研究者の間でもこれら三基の前期古墳の序列について見解が一致してこないのは、いずれも決定的な根拠を欠いているからにほかならず、それは取りも直さず、多少なりとも実態を明らかにしようとする手立てを講じてこなかったところに問題があるのではなかろうか。

今回の調査成果との関連については、最後に触れることになろうが、県内有数の古墳群であるにもかかわらず、不明な点が多い事を再度指摘し、将来的な課題として計画的な調査を実施していく必要性を痛感するところである。

これまでのおもな研究史を以下に掲げておく。個別の文献についてそれぞれコメントするだけの力量は持ち合わせないが、甘粕健氏の総括的論考は大いに参考にさせていただいた。家父長制論等、現在では再検討を要する部分も含まれているが、一つの到達点と評価すべき点は多い。また、これまでの調査が台地上で多く実施されていることについても留意する必要があろう。二子塚古墳が低地に築造されているところからみても、低地への進出が活発であった時期の有ることを考慮する必要がある。

その一つの証拠として上野合遺跡の調査例がある。時代は下るが、姉埼神社との関連が指摘されている島穴神社も低地上に位置することも併せて考えると、低地の状況をもう少し詳らかにする必要もあろう。調査技術上の問題等簡単にはいかない部分も多々あるとはいえ、台地での成果に寄りかかっているだけでは、実際の歴史像には迫り得ないのではないかと考えられる。

隣接地の状況

姉崎東原遺跡Ｂ地点（以下「Ｂ地点」とする。他地点も同様）の隣接地における調査概要を以下に触れておきたい。

すでに「姉崎東原遺跡」として報告されている、Ｂ地点北側の部分（「Ａ地点」と仮称しておく。）においては、すでに上で触れたように、宮ノ台式後半の一括資料が出土している。ほかには、円墳の周溝の一部、数条の溝状遺構（これらのうち、いくつかは方墳あるいは方形周溝墓を本来構成しているものと推測される。）などが検出されている。さらに、数軒の住居跡が検出されている。住居跡に関しては、ほとんどが弥生時代後期に帰属すると考えられるが、良好な遺物の出土が見られず、不確定な部分も多い。円墳についても時期を比定しうるに足る遺物の出土もなく、時期は不明である。この周溝の北半は現道下に潜っており、天神山古墳の周溝の南端と近接あるいは一部重複する可能性もある。

Ｄ地点は、Ａ地点の西側に位置する。Ｂ地点と同じく、平成４年度に調査が実施された。宮ノ台式期の住居跡１軒、方形周溝墓１基（北東隅部分のみの検出）が調査された。

なお、Ｃ地点はＢ地点の北東部の平坦面およびその南側の斜面部（Ｂ地点の南側まで含む）にあたる。平坦面では、これまで調査された集落の一部が及んでいることが考えられ、斜面部においては現状で数段の台地整形が認められるところから、城郭の一部である可能性が指摘されている。当初は平成４年度に調査予定であったが、現段階では未着手である。

以上のように、本遺跡周辺の状況から、弥生時代中期から集落の営みが活発になり、後期までその状況は連続し、古墳の造営の開始により、集落が途絶える過程がおぼろげながらうかがえよう。

第３図　姉崎東原遺跡Ｂ地点遺構配置図

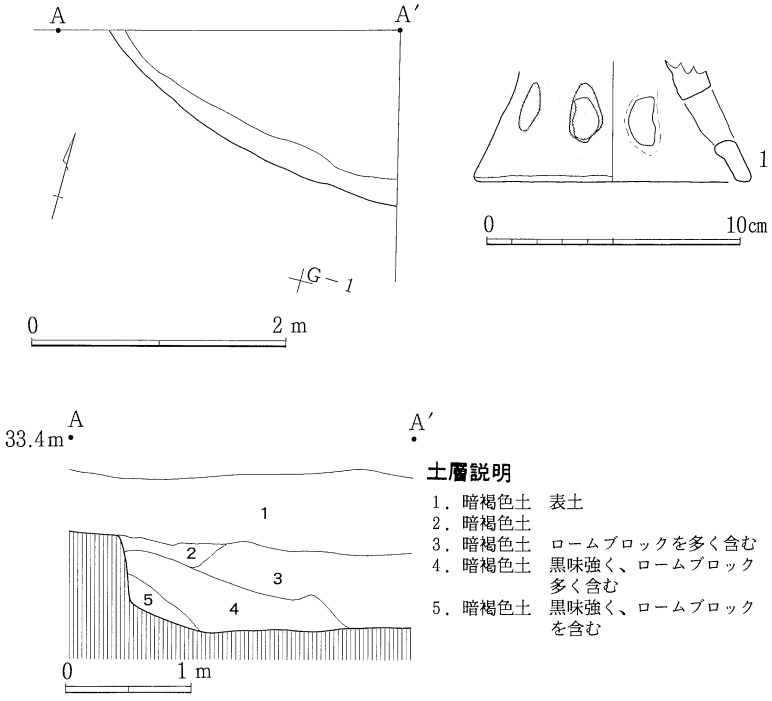
第２章　調査した遺構と遺物

今回の調査の結果判明した遺構の配置状況は図示した通りである。その主要な構成要素は、弥生時代中期から開始される集落とその廃絶後の墳墓といえる。それより遡る時期の様相あるいは、その後の状況については、若干の遺物の出土や少数の遺構があるに留まる。以下では、この主要な時期の住居跡についてまず報告し、その後に墳墓、さらにそのあと土坑、溝等について見ていくこととしたい。また、遺構に伴う物ではないが、多くの破片資料が覆土中から出土しており、これらについては後段で提示することとしたい。

調査の方法については、公共座標を基準として、10ｍピッチでグリッドを設定した。遺構に伴わない遺物に関しては、このグリッド内で通し番号を付して取上げ、小グリッドの細分は行わなかった。なお、遺構番号については、調査時点では着手順に付したが、以下報告順に番号を付すこととする新旧の対応関係は表に示した通りである。

１）住居跡

前章ですでに触れたように、後世の削平により、遺構の残存状況は必ずしも良好ではなく、わずかに床面のみしか捉えられないものも存在する。遺物の出土も多いと言える状況にはない。したがって本来なら、ある程度の時期に区切ってその時期毎の様相を提示するべきであるが、以上のような状況から、調査区東側から西へと順に報告することとする。なお、個別の遺構および出土遺物の基本的属性については、表に記載した通りである。



第４図　１号（住居）実測図および出土遺物実測図

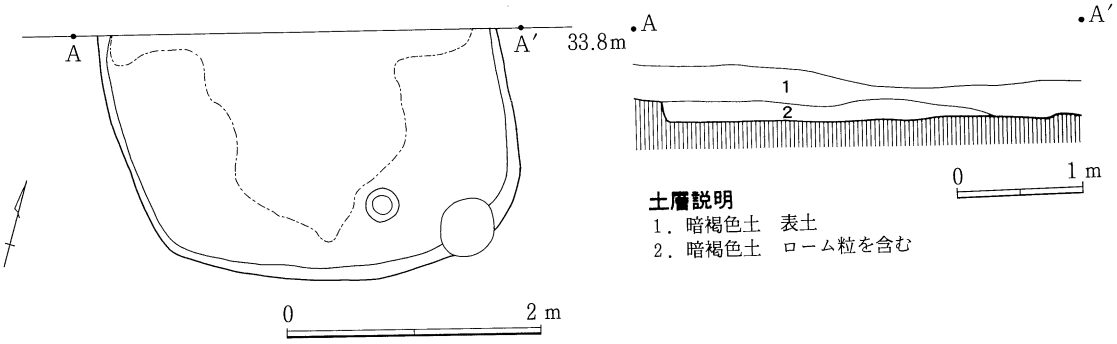
１号（住居）

調査区の北東端で検出されたものである。他の住居後に比較して掘り込みが深い感がある。全体の形状については不明であるが、壁面は全体に弧状を呈しており、小判型あるいは胴張りの方形であるかもしれない。床は特に硬化している状況は認められなかった。

遺物については、床面からの出土はなく、図示したものは、覆土上層からの出土である。この遺物については、類例が乏しく、全体の形状は現段階では想起し難い。やや装飾性の強い台付土器の脚台部と考えている。弥生時代後期の所産であろうか。

第１表　１号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	不明	脚		ナデ	縦位のミガキ 横位のナデ	白色骨針含む 全体にやや砂質	良好	内面　橙 外面　赤彩		

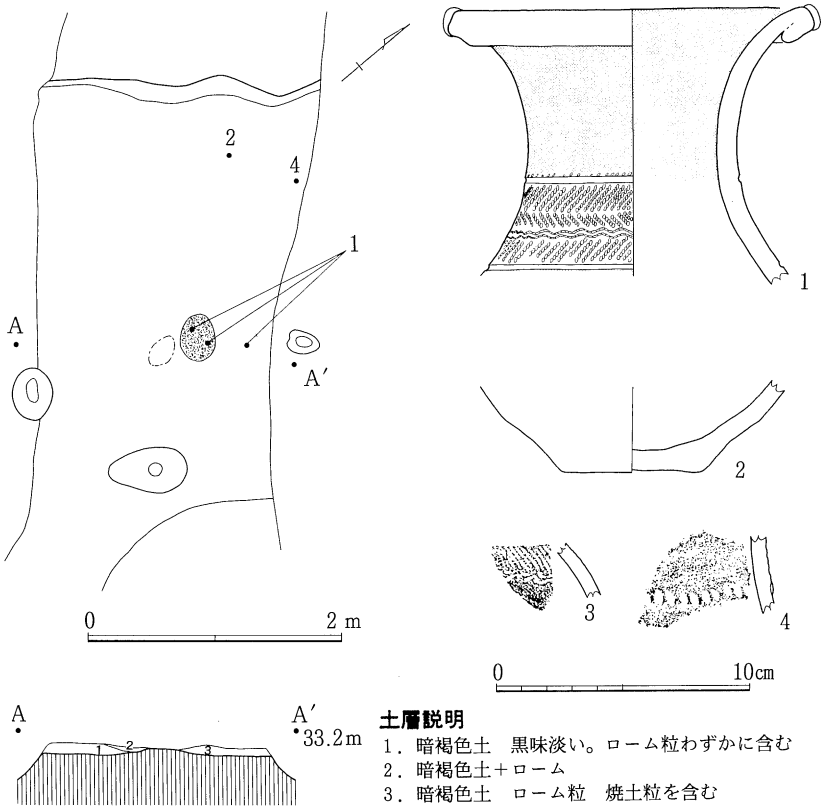


第５図　２号（住居）実測図

２号（住居）

１号の東側に位置する。南半のみの検出で、北半は調査区域外に延びている。遺構の残存状況は悪く、わずかな壁の立ち上がりと、床の硬化面の広がりが辛うじて捉えられたに留まる。柱穴等についても、明瞭には捉えられなかった。本来の平面形は、小判型を呈するものと考えられる。

本遺構からは、図示しうる遺物の出土はなかった。



第６図　３号（住居）実測図および出土遺物実測図

３号（住居）

後述する、29・30両遺構の周溝にはさまれた部分で検出されたものである。地山が南に傾斜していることや、削平の影響により、わずかに北壁の立ち上がりが捉えられたにすぎず、南半は欠落している床の硬化面がわずかにとらえられ、また炉の残骸とでもいいうる焼土および赤化したロームが検出された。

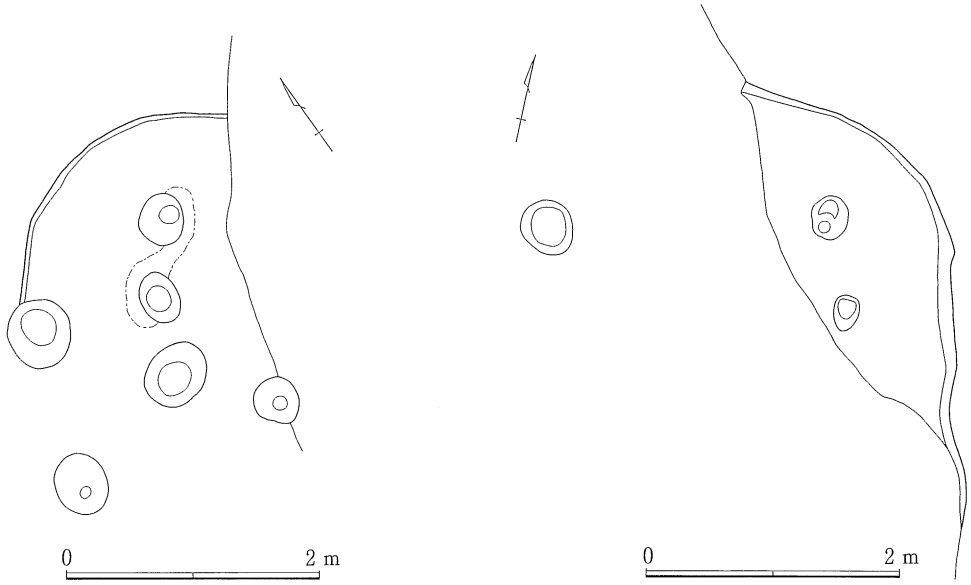
柱穴については明瞭には捉えられなかった。

出土した遺物は図示の通りである。弥生時代後期の所産と考えられる壺の口縁部のほ

第２表　３号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壷	口縁	口径13.9	横位のナデ		褐色粒子含む	やや甘い	赤彩 明褐色		
2	壷	底	底径 5.6	やや荒いナデ	ミガキ?	白色粒子やや目立つ 小礫含む	良好	暗赤褐～暗褐		

か底部、および破片資料が出土した。このうち、1は折り返し口縁の下半に弱い刻みを施し、頸部から胴部にかけては羽状縄文を一条の沈線により区画し、この羽条縄文上に結節文を施している。4は、僅かに輪積み痕をのこす甕の頸部であり、ヘラ状工具による押捺が加えられている。



第7図　4号・6号（住居）実測図

4号（住居）

3号の南側に位置し、残存状況は3号よりも悪い。わずかに床の硬化面が認められたのみであり、北側の壁の立ち上がりが辛うじて捉えられた。

柱穴については数箇所でピットが検出されているのは、図示の通りであるが、本住居に伴うものを抽出することは困難であった。

本遺構からは、良好な遺物の出土は認められなかった。

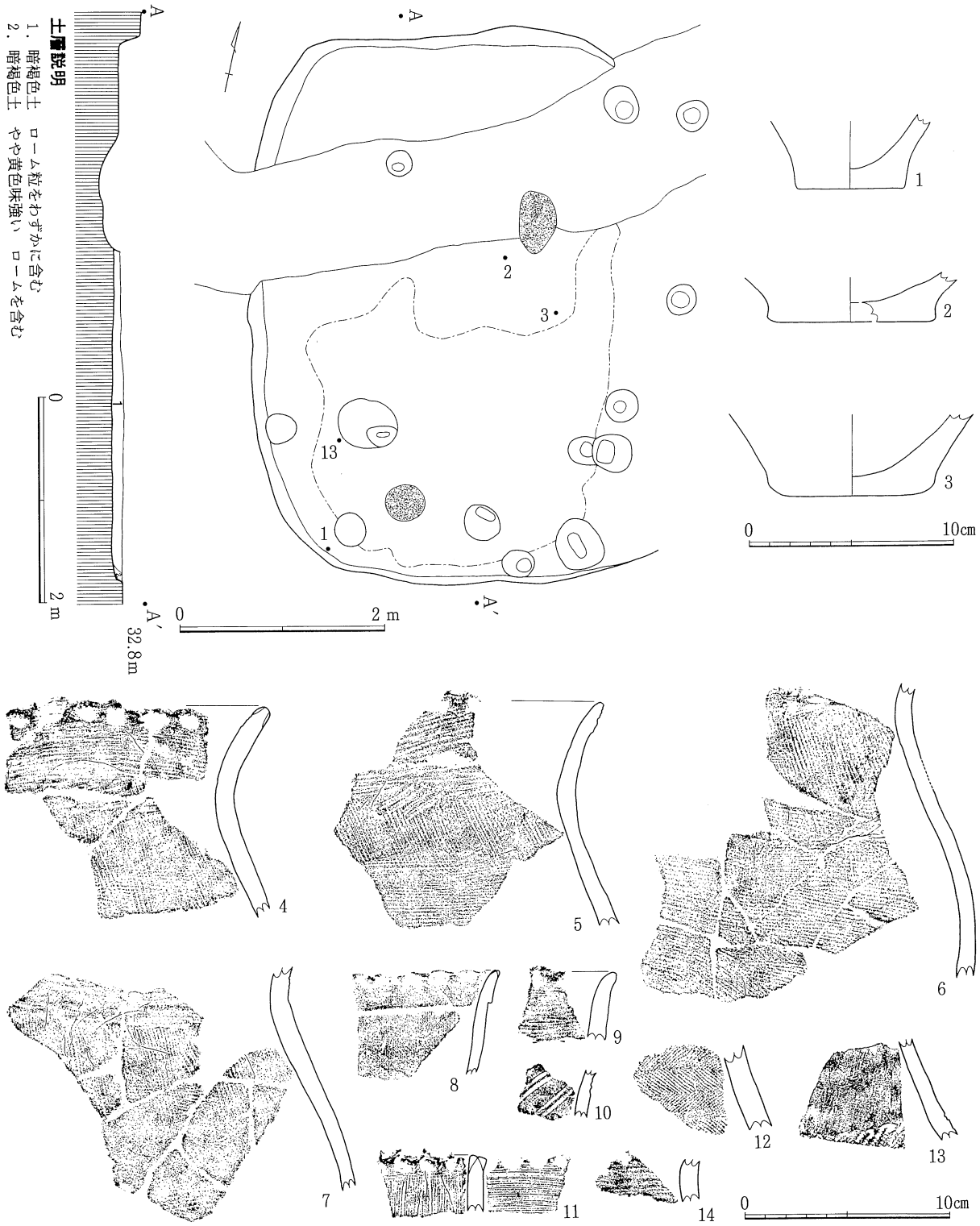
5号（住居）

1号の南側のやや東に傾斜した部分で検出された。中央やや北よりの部分は30号（円墳）の周溝が横断する形で切られている。東縁部分は流出したものと考えられ、不完全な状態での検出であったが全体的には小判型を呈するものと考えられる。床の硬化面は図示したように、やや南に偏った状況で捉えられた。柱穴については、いくつかのピットが検出されたが、本来帰属する柱穴の特定は、特に南側に関して難しい状況にある。

遺物は図示した通りであり、復元実測可能な個体は3点の底部に限られたが、破片資料について比較的まとまった出土が認められた。覆土中からの出土がほとんどであるが、弥生時代中期宮ノ台式の範疇で捉えられる深鉢が主体的である。全体的に砂を多く含む資料が多く、また焼成もやや甘い感がある。口縁部には指頭による押圧が加えられており、外面の調整は刷毛によるもので占められる。比較的大型の破片4・5等についてみれば、口縁部直下から頸部までは、ほぼ水平方向の刷毛目が認められ、それより下方については、垂直方向の刷毛目が認められる。「く」の字状の沈線文様をもつ破片は10で認められるのみである。15は壺の頸部であり、縄文のみによる施文が見られる。

6号（住居）

5号の南西側で検出された。大半の部分を29号の周溝により、切られており、わずかに北東隅部分のみが残存してしたものである。この部分で柱穴が1つ検出され、29号周溝内において北西の柱穴が検出された。南側の柱穴については、検出し得なかった。この北側2つの柱穴間の距離は約2.0 mである。床の残存は一部で認められたにすぎない。全体の形状は推定し難い。



第８図　５号（住居）実測図および出土遺物実測図

第３表　５号（住居）出土土器観察表

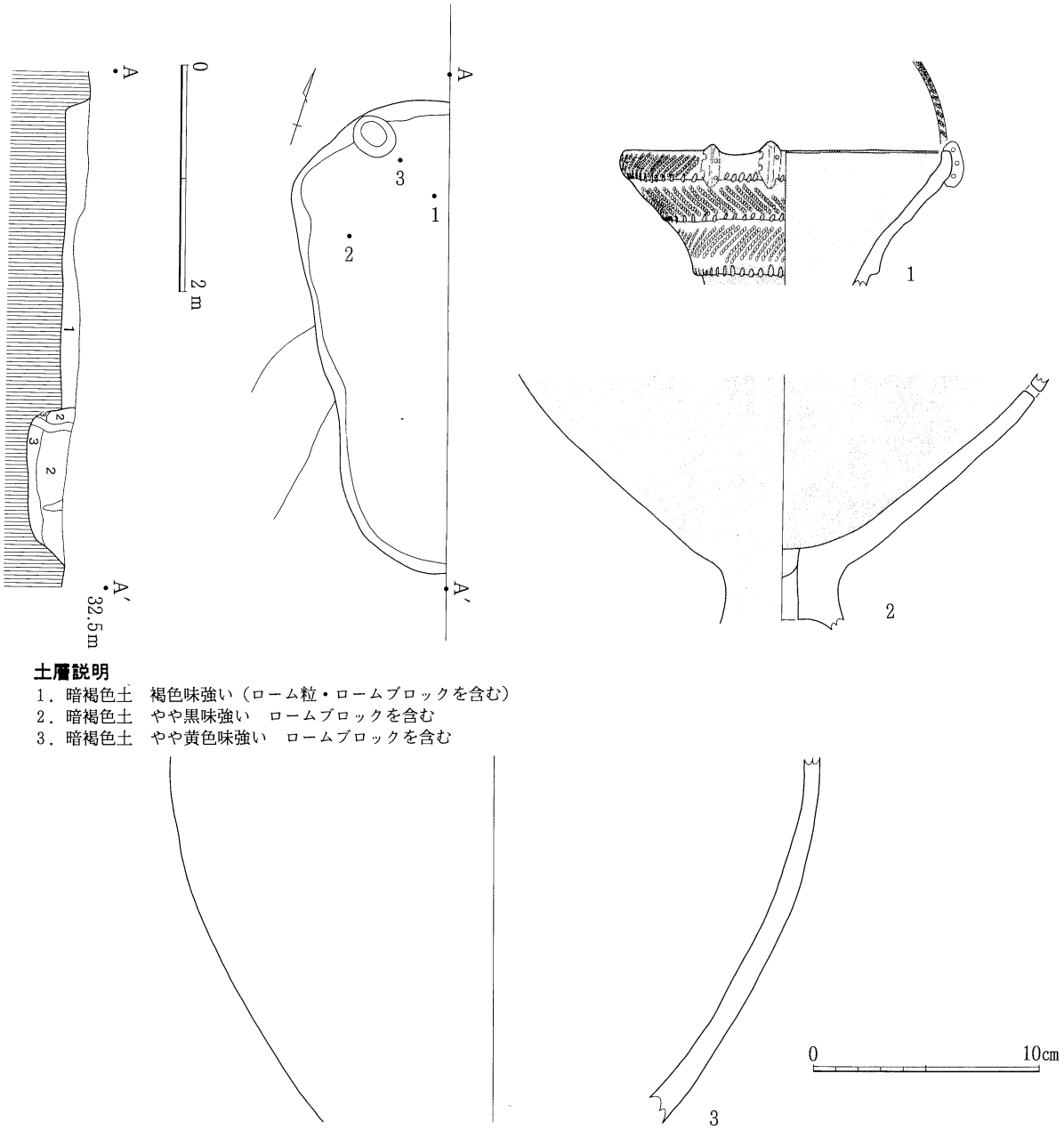
No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壷	底	底径 5.1	ナデ(?)	横位のナデ 横位のケズリ?	白色粒子やや目立つ 全体にやや砂質	良好	内面　暗褐～黒褐 外面　橙～暗褐		
2	壷（?）	底		横位のナデ	縦位のハケ（条痕?）	比較的精良	普通	内面　暗灰 外面　橙～暗褐		
3	壷（?）	底	底径 6.0	整形不明瞭	縦位のミガキ	小礫砂粒やや多い	普通	内面　灰褐 外面　暗褐～黒褐		

本遺構からは、図示するに足る遺物の出土は認められなかった。

7号（住居）

調査区の南東隅に近い、現在の西の斜面に近い部分で検出された。床面レベルで見ると、やや低い位置となる。東半部分は、調査区外にのび、西半の約1/2のみの調査となった。床は特に硬化した状況は確認されず、また位置の低さに起因してか全体に湿気を帯びた感があり、若干粘性を帯びたようであった。形態的には、歪んだ小判型を呈するものと判断される。柱穴、炉は検出し得なかった。

床に接する状態で、図示したような遺物が出土しており、いずれも本住居に伴うものと考えている宮ノ台式の範疇で捉えられよう。1は壺の口縁から頸にかけての部分で折り返し口縁の、折り返し部の下端および頸部の2つの段構成のそれぞれの段の下端に刻みが巡らされる。口縁側面には、2個一対の棒状付文がみられる。縄文は、口唇、口縁側面および頸部に施され、頸部のそれは段を境に施文方向が異なり、羽状となっている。2は大型の台付鉢とでもいうべきものである。鉢部と台部を接合



第9図　7号（住居）実測図および出土遺物実測図

第４表　７号（住居）出土土器観察表

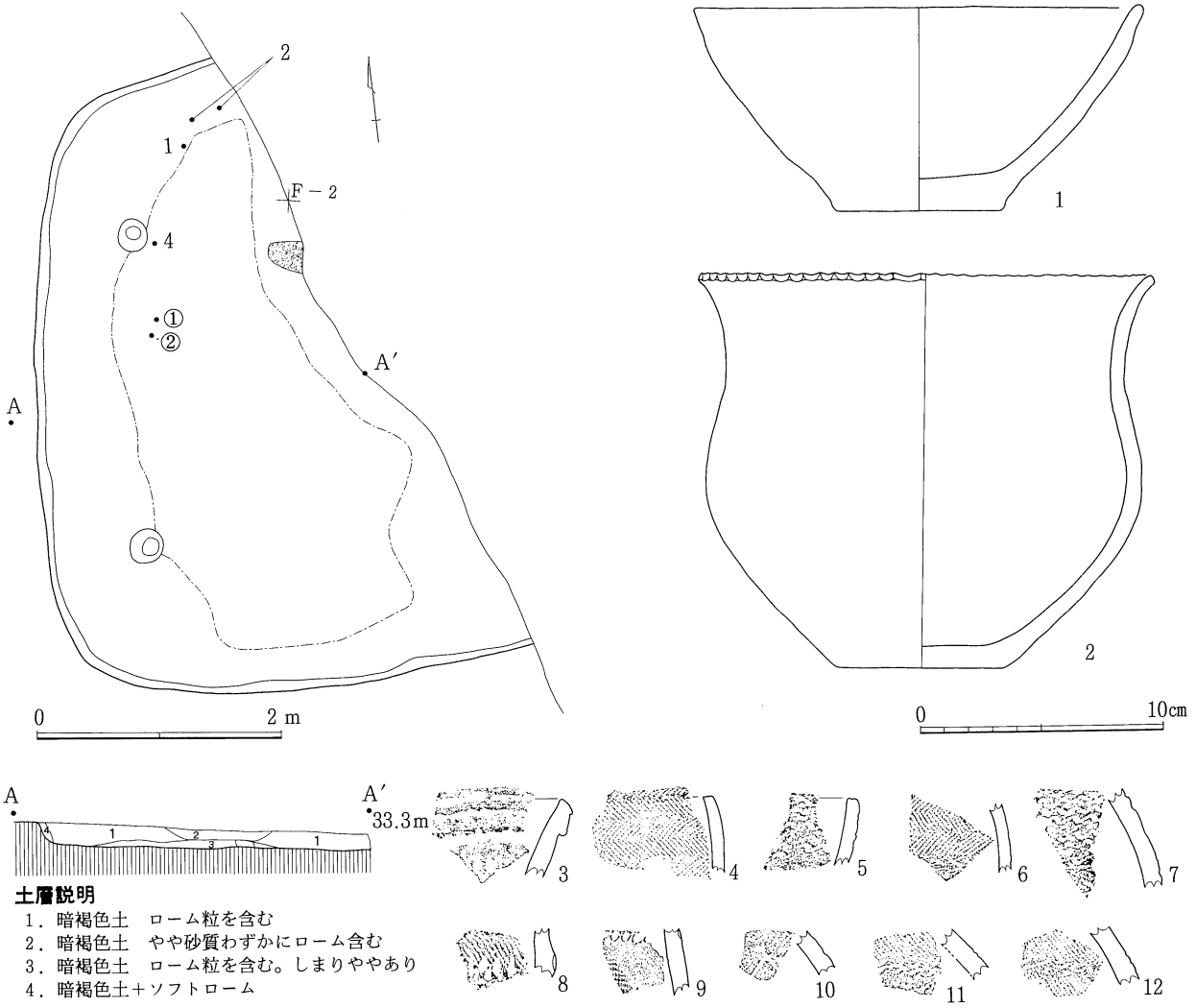
No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壷	口縁	口径14.6		ヘラ状工具による刺突	白色微量含む	やや甘い			
2	高杯(?)	坏部		ミガキ	横位のミガキ 右下りの工具痕 縦位のミガキ	比較的精良 やや砂っぽい	やや甘い	赤彩 淡褐		
3	壷	胴		横位のナデ	横位のミガキ 縦位のミガキ	砂やや多い 白色骨針状含む	やや甘い	内面　灰褐 外面　黒褐～暗褐		

する際に用いられたのか、中心部分に「栓」があり、これは接合が不十分なことにより、剥落し易い状態となっている。３は大型の壺の胴部である。

８号（住居）

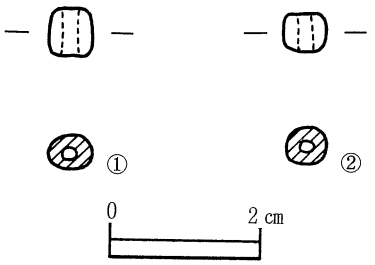
29号の後方部の東辺のほぼ中央部に位置する。東半は同周溝により切られている。形態的には胴張りの、ほぼ正方形を呈していたものと推測される。柱穴は、西側の２か所について検出され、炉は中央よりやや北に寄った部分で検出された。床の残存状況も比較的良好であった。

炉の周辺から、図示したような鉢や甕が出土している。１の鉢については無文で粗い整形が施されるのみである。２の甕については、口縁部に刻みがほどこされ、輪積み痕は粗い整形により消されて



第10図　８号（住居）実測図および出土遺物実測図

いる。いずれも弥生時代後期の所産であろう。そのほか破片資料については、いずれも覆土中からの出土である。このうち、壺の口縁部である3は、外面口唇部直下の整形がやや雑と言え、おそらく口唇部をナデ整形したときに「はみ出した」部分をそのまま放置したことによるであろう、小さい段が見出せる。このような例については今回の得られた資料の中に、数点認められている。



第11図　8号出土ガラス玉

また、本住居からは床直上から2点のガラス小玉が出土したこと

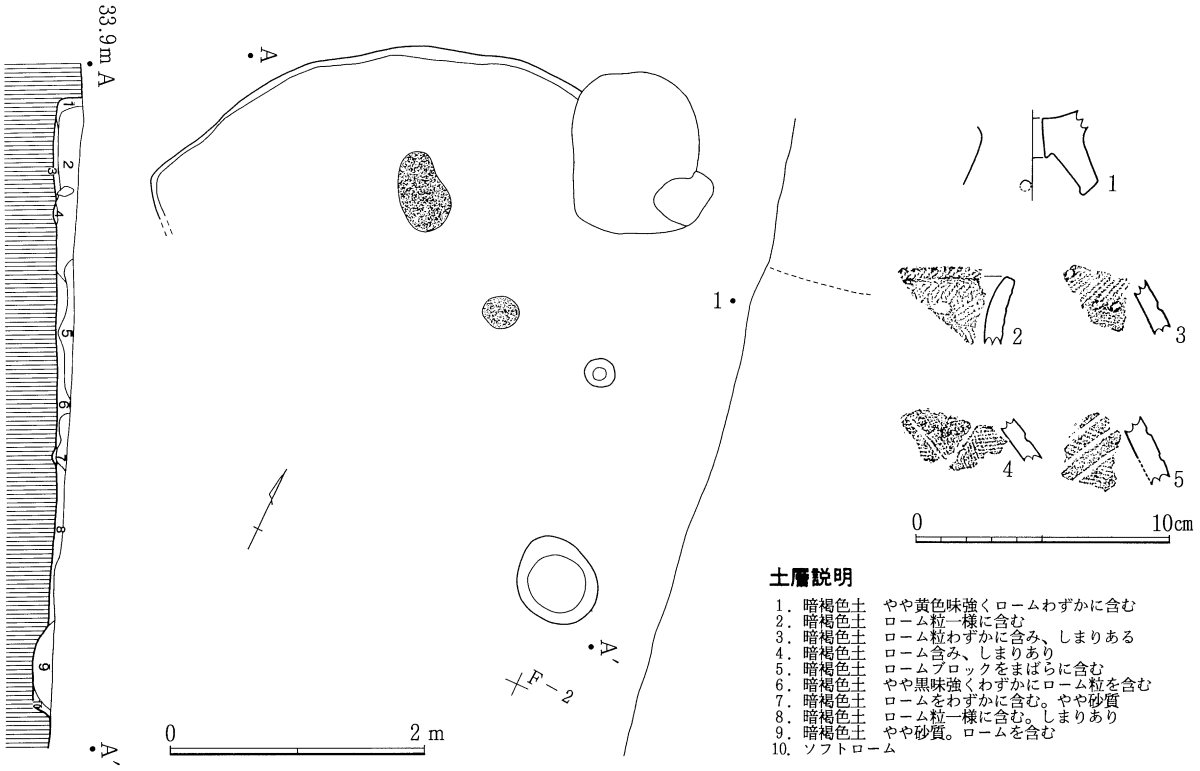
第5表　8号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	鉢		底径 6.8	横位のミガキ	横位のミガキ	赤色粒子わずかに含む	やや甘い	橙～褐～暗褐	925	ほぼ完形
2	甕		底径 6.9 頸径16.4	横位のミガキ 横位のナデ	左下りのケズリ 縦位のケズリ 横位のケズリ 左傾したミガキ	白色粒子わずかに含む	やや甘い	内面　暗褐～暗褐 外面　暗褐～黒褐	2,590	ほぼ完形

が特筆されよう。図示した①は長さ6.2㎜、幅4.8～5.9㎜、重さ0.234ｇ。②は同じく、4.7㎜、5.5㎜、0.18ｇであり、いずれも濃い青色を呈している。（なお、重量の測定には、島津製作所製電子天秤 AEL-200を使用し、少数点以下四位で四捨五入した。）

9号（住居）

29号のくびれ部にあたる部分で検出されたものである。わずかに、北壁の立ち上がりを捉えられたが、そこ以外の壁、柱穴などは捉えられなかった。床に関しては、わずかに硬化した部分も認められたが、明瞭な広がりは捉えられなかった。炉についても残存状況は良好ではなく、図示した部分にわ



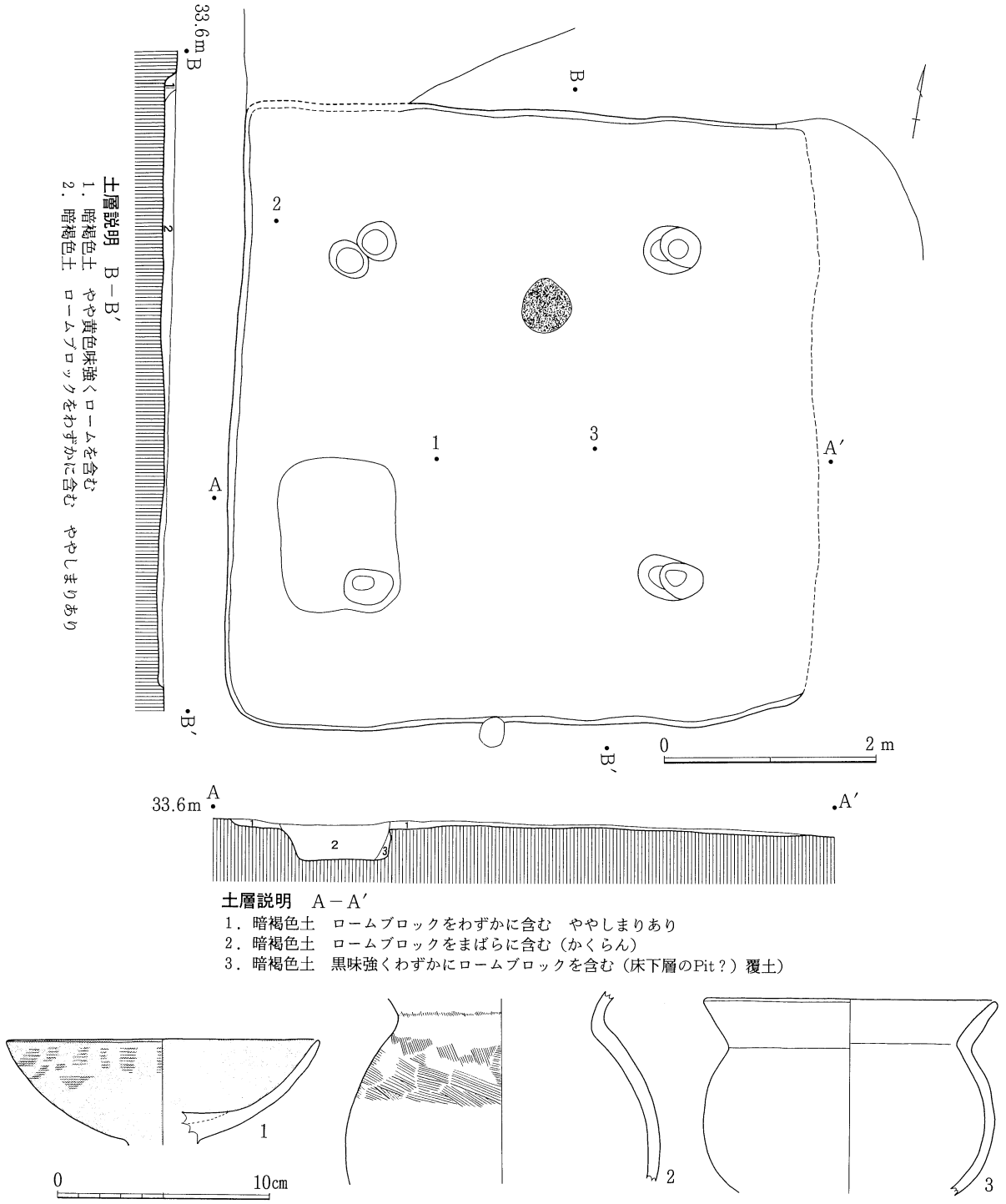
第12図　9号（住居）実測図および出土遺物実測図

第６表　９号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法		胎土	焼成	色調	容量	備考
				内面	外面					
1	器台	脚		円方向のミガキ 粗いナデ	縦位のミガキ	白色粒子やや目立つ	良好	暗褐色～暗褐		

ずかに痕跡を留める程度である。

遺物に関しては、図示したものなどが覆土中（とはいっても非常に浅い堆積ではあるが）から出土している。本住居にに伴うとは言い難い面も多いが、この場で掲載しておく。



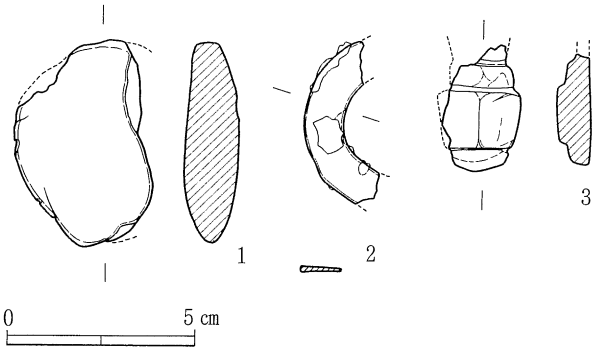
第13図　10号（住居）実測図および出土遺物実測図（１）

なお、この住居の床面下層には、後章でふれる断層・地割れが走っており、これらをもたらしたであろう地震の時期の下限を示すものと位置づけられる。

なお、住居の年代については、判然とし得ない部分が多いが、集落全体の傾向等を勘案して弥生時代後期に位置づけておきたい。

10号（住居）

29号の後方部北東コーナーに位置する。一辺ほぼ4.4mのやや歪んだ正方形を呈する。比較的硬化した床面が捉えられた。全体に南東に傾斜している地勢により、東壁は残存していなかったが、張り床の範囲の把握により、ほぼ全体を捉えることができた。炉の残存状況は良好ではない。柱穴については、主柱穴4か所を確認することができた。柱穴には重複しているものがあり、建て替えの可能性もあるが、規模の拡大等の痕跡は見出せなかった。



第14図　10号出土遺物実測図（1）

第7表　10号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	高坏	坏部	口径14.8	横位のナデ 縦位のミガキ	横位のハケ ナデ	白色粒子をわずかに含む	良好	灰褐＋赤彩	373	
2	甕	胴上半	頸径 9.9	横位のハケ（一部残存） のちナデ 横位のケズリ のちナデ	横位のナデ やや左傾したハケ 右下りのハケ 横位のケズリ	白色粒子目立つ	良好	暗褐		
3	甕	口縁～胴下半	口径13.7 頸径11.6	横位のナデ 横位のケズリ	横位のナデ 縦位のケズリ ハケ 左下がりのケズリ	白色粒子やや目立つ	良好	暗赤褐	991	

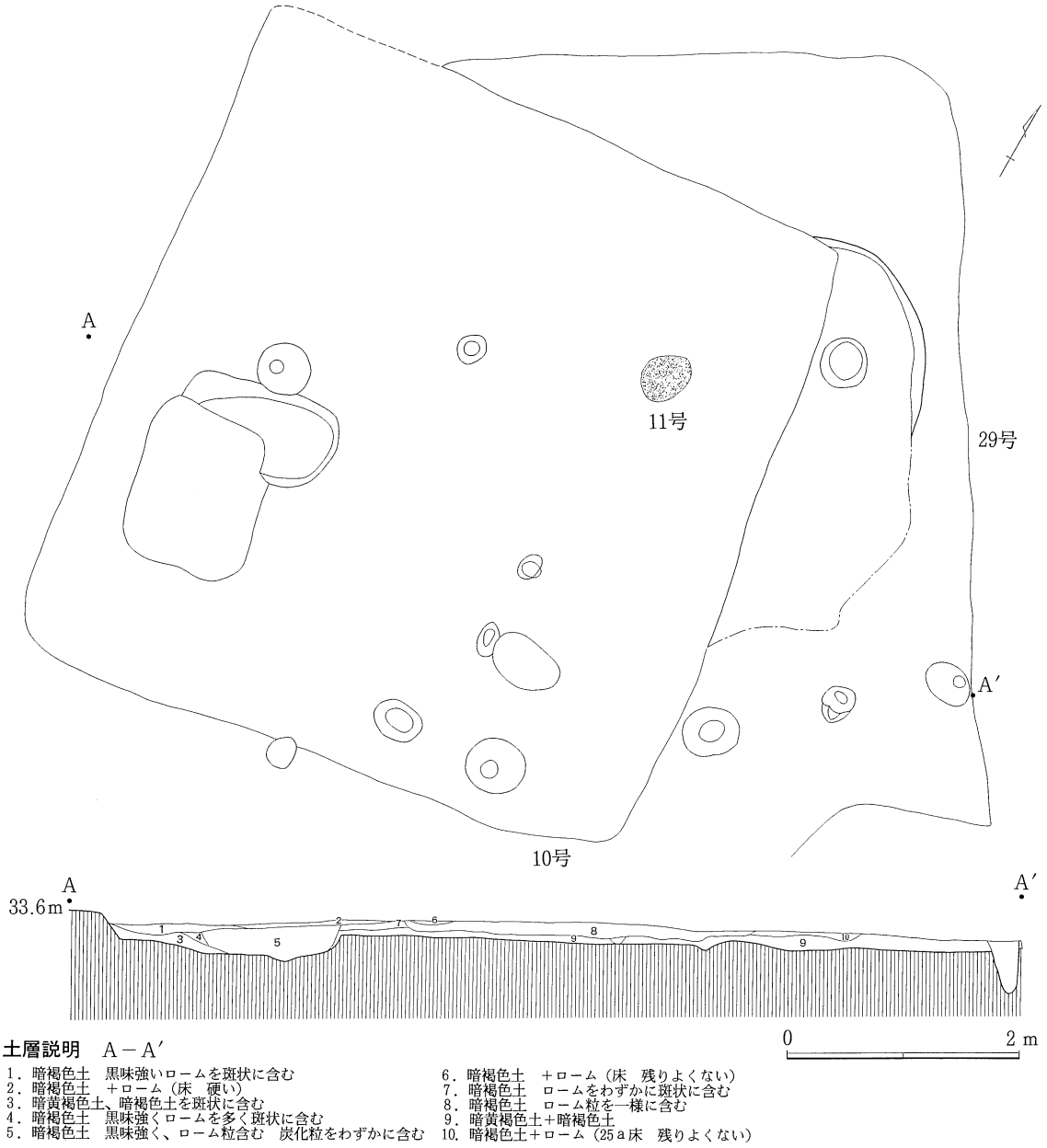
遺物は図示したようなものが、床面から出土している。1は高坏の坏部で体部はわずかに内湾している。2は小型の甕で、胴部上半に刷毛目を残している。3はやや小型の甕で、頸部は「く」の字状に屈曲している。

一般論として、29号（前方後方墳）の後方部で検出された住居は、同古墳築造に先行して営まれたものと考えられよう。この住居は同古墳築造に先行する住居のなかでは、住居形態からは最も新しい時期に属すると考えられ、遺物の様相からは古墳時代前期前半に位置づけ可能と考えられる。したがって、29号（前方後方墳）については、この時期を遡ることはないと言える。

11号（住居）

10号により、西側の大半を切られる形で検出された。北東隅で僅かに壁の立ち上がりが検出され、張り床の範囲がある程度おさえられたものである。10号の張り床下層から柱穴および焼土が検出されたことにより、その復元が可能となった。平面形態については確証を欠くが、僅かな残存部分から推測するに、胴張りの方形であったかもしれない。なお、図中には、10号張り床下層から検出された他のピット等も含んでいるが、それらの有機的関係については不明である。

なお、本住居からは、良好な遺物の出土は認められなかった。

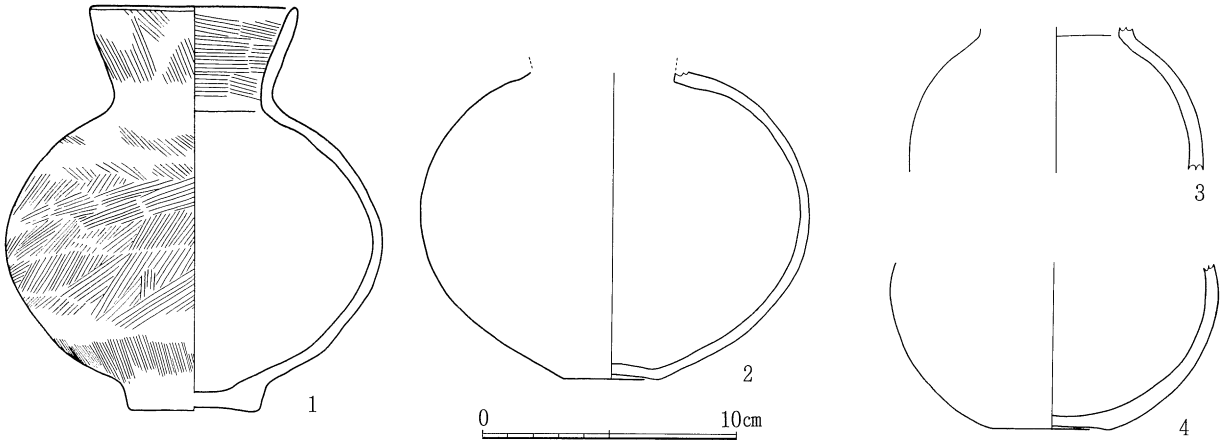


第15図　11号（住居）実測図

12号（住居）

10号の南に位置する。床面と考えられる硬化面と、炉と思われる焼土の堆積があり、一軒の住居跡と判断したものである。これら以外の、柱穴・壁の立ち上がり等は一切不明である。炉と判断した部分には、土器が埋設されており、調査時点では、1個体の土器と判断していたが、整理の過程で、図示したように複数個体が「入れ子」の状態であったことが判明した。

上に述べたような状態で検出された遺物は、図示したとおりである。同時廃棄の一括資料として位置づけられるものと判断される。ただし、このうち、1については、出土地点北東の土坑出土の資料との接合関係が認められ、かかる状況にいたった過程を想定する必要が生じているが、本報告ではその過程を復元しえなかった。単純に、後世の開墾等による土の移動が繰り返されたことによると言う解釈が可能かもしれないが、それ以前の問題として、どのような埋設状況であったかを想起する必要



第16図　12号（住居？）出土遺物実測図

第８表　12号（住居）出土土器観察表

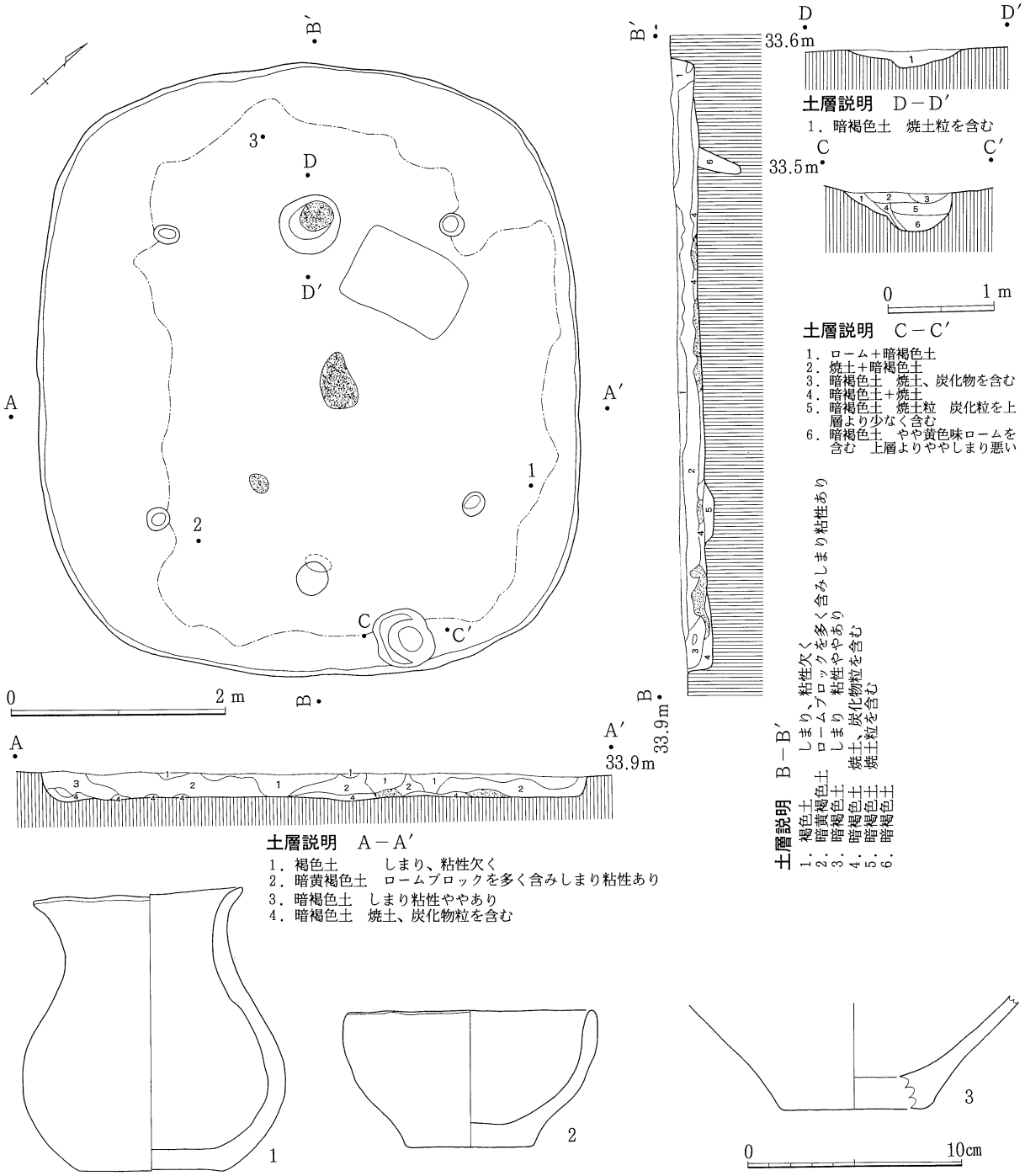
No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壷		口径 7.8 底径 4.8 器高15.9 頸径 6.3	ナデ	ハケのちナデ 黒斑あり	赤褐色粒微砂粒含む	良好	内面　赤褐色 外面　褐～黒褐	1,168	ほぼ完形
2	壷	胴部ほぼ完存	底径 3.8	ナデ ケズリ 一部にハケ残存	垂直方向のミガキ	灰褐色粒子含む	良好	灰褐～暗褐	1,338	全体に作りは丁寧
3	壷	胴上半	頸径 6.2	横位のミガキ 横位のナデ 縦位のナデ	縦位のミガキ	比較的精良	良好	褐～黒褐		
4	壷	胴下半	底径4.7	横位の整形（ハケ？） 横位のナデ 工具痕あり（方向不定）	右傾したミガキ	赤褐色粒子を含む	良好	内面　黒褐 外面　暗赤褐～黒褐		

がある。というのは、接合した結果図１となった遺物の破片の数点は、図２の中に入っていたものであるが、接合した状態では、この２の中に収めることは、物理的に不可能である。２の頸部を１の胴部が通過するすることは有り得ない。どちらかが、分割されていなければ、このような現象は生じえない。かかる意味において、その廃棄から出土にいたる過程を復元するのは容易なことではないと言える。一括資料としての位置づけの妥当性そのものについても疑義の生じる可能性はあるが、本報告では、その点については問題としないこととしたい。

上図が12号から出土した遺物である。１の壺は、肩部に比較的太い刷毛目を残すのが特徴的である。２は丸底壺の胴部であり、頸部以上はまったく欠いている。底は上げ底となり、器壁も比較的薄く仕上げられており、全体に丁寧な作りといえる。他に３・４のようなやはり小型の壺の破片が出土している。

13号（住居）

11・12号の西方、29号の後方部北西コーナーに近い部分で検出された。いわゆる焼失住居で、本報告では図示しなかったが、覆土中に大量の焼土を含み、建築部材が炭化した状態で、数箇所で検出されている。今回検出した住居のなかでは、切り合い関係もなく、また全形の把握が比較的容易な遺構であった。北に長軸をもつ、胴張りの方形を呈している。床の残存状況も良好であり，主柱穴４か所が検出された。炉は、北側の２つの柱穴間のほぼ中央で検出されている。南側２本の柱穴間のほぼ中



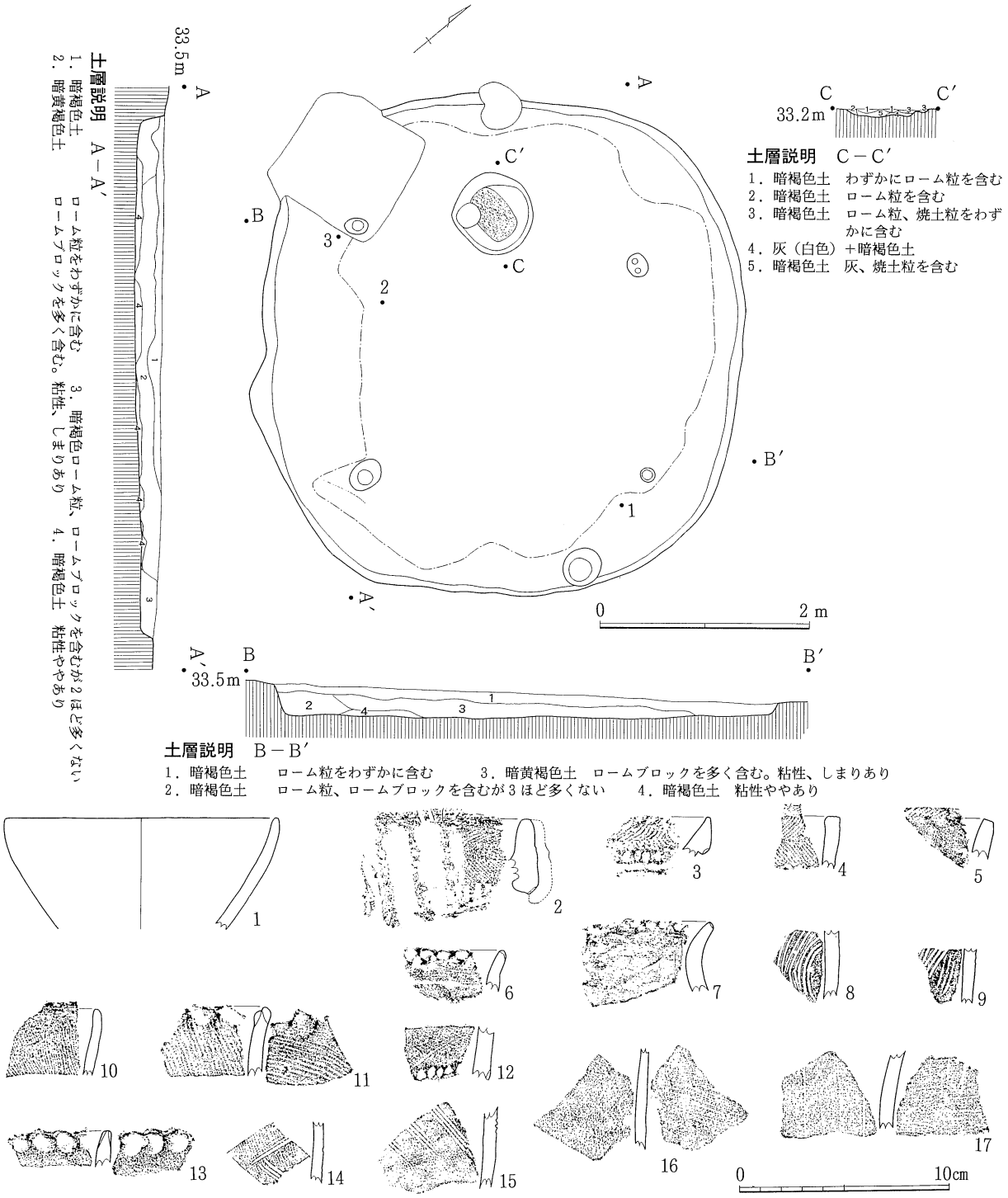
第17図　13号（住居）実測図および出土遺物実測図

第９表　13号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壷		口径 9.8 底径 6.9 器高13.0 頸径 7.8	横位のミガキ 横位のケズリ	横位のケズリのち横位のミガキ	赤色粒子をわずかに含む	やや甘い	褐	681	整形全体に不明瞭 ほぼ完形
2	鉢		口径11.5 底径 5.65 器高 6.4	横位のミガキ 荒れて整形不明	横位のミガキ 横位のケズリ	赤色粒子 白色微粒わずかに含む	やや甘い	暗褐	325	ほぼ完形
3	壷（？）	底	底径 6.7	ナデ	縦位のナデ（ミガキに近い） 横位のナデ 整形不明瞭（荒れている）	微砂粒多い 白色骨針含む	やや甘い	内面　明褐（やや白い） 外面　明褐		

央で検出された柱穴は、南に傾斜して穿たれており、いわゆる入口ピットと考えられる。なお、床の硬化面の範囲は図示した通りであるが、東側に偏って硬化しているのが見られた。

出土した遺物には図示したようなものがある。概して遺物の出土量は少ないと言える。1は小型のの壺で完形品である。全体に砂を多く含み、施文は認められない。焼成の甘さに起因することもあろうが、磨耗により、外面の整形は全体に不明瞭である。2は鉢、3は壺の底部。いずれも弥生時代後期の所産と考えられる。



第18図　14号（住居）実測図および出土遺物実測図

14号（住居）

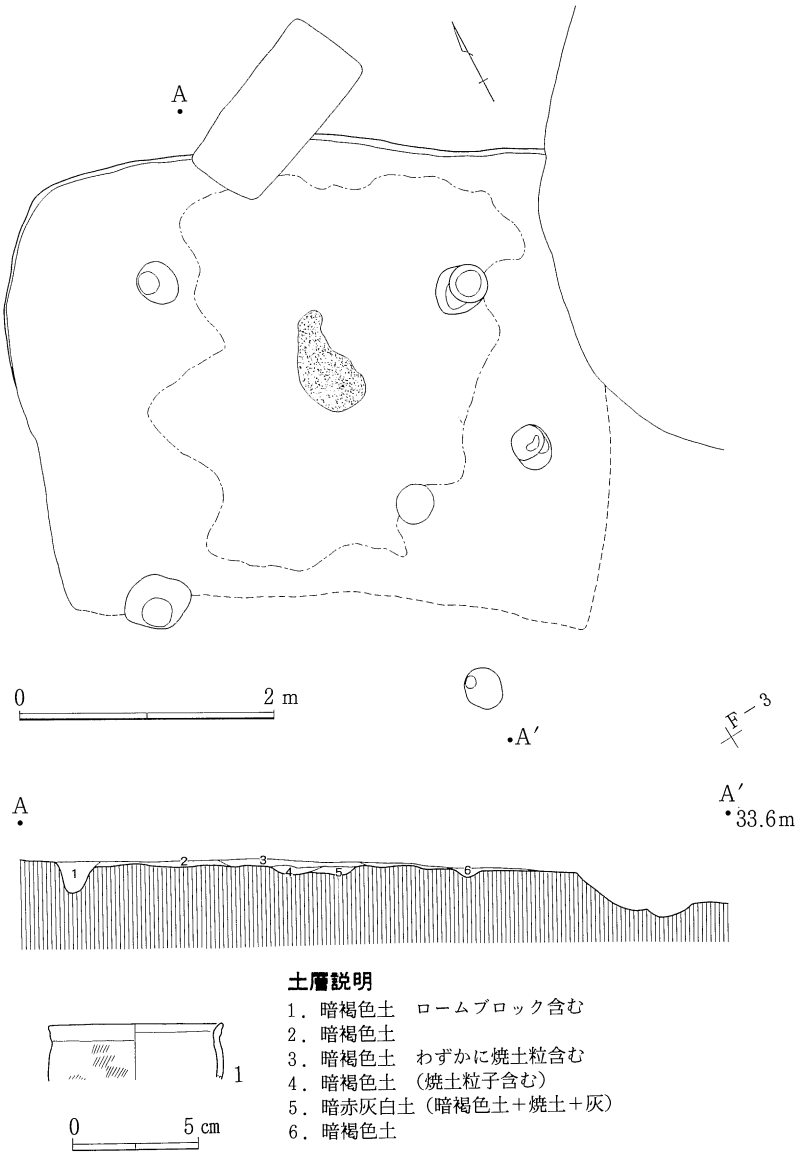
12号の南方に位置する。形態的には13号に類似し、胴張りの方形を呈している。長軸方向のそれに近い。主柱穴４箇所捉えられたが、北東のそれはやや南に寄った位置で検出されている。炉は、北側柱間のほぼ中央で検出されている。床の残存状況は比較的良好であり、上にのべた13号同様に、床の

第10表　14号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法		胎土	焼成	色調	容量	備考
				内面	外面					
1	鉢（?）	上半	口径12.8	横位のナデ 横位のミガキ	横位のナデ （不明瞭） 横位のナデ （条線あり）	微砂粒多く含む	普通	暗褐		

硬化面は、東に偏って認められた。

遺物は図示したようなものが、出土している。本住居の時期を確定するには、不十分であり、また年代幅があるようである。１～３は床直上の出土、４以降はいずれも覆土中からの出土である。１は、高坏の坏部であろうか、直線的に開き、口縁部でわずかに内湾する。２以降には、壺の口縁部、鉢の口縁部、甕の口縁部を集めてある。鉢はいずれも口唇部が平坦で、縄文を施している。甕の口縁部は、何れも頸部がゆるい曲線を描きながら外反し、口唇部に刻みが施される点で共通する。これらについてはいずれも弥生時代後半の所産と考えられよう。11および15～17は宮の台式の範疇で捉えられる破片を集めたものである。口縁部の指頭による押圧あるいは、おそらく羽状なるであろう、沈線文の一部が見られる。10については、縦方向の刷毛目を残す口縁部であり、古墳時代の所産と思われる。



第19図　15号（住居）実測図および出土遺物実測図

15号（住居）

14号の南西に位置する。北東方向に主軸をもつ、隅丸方形を呈する住居である。地勢の影響および14号との一部重複により、北東壁および南東壁はほとんど残存していなかった。

第11表　15号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	鉢	上半	口径 6.8	横位のナデ	横位のナデ 縦位のハケ	白色粒子わずかに含む	良好	内面　褐 外面　暗褐		

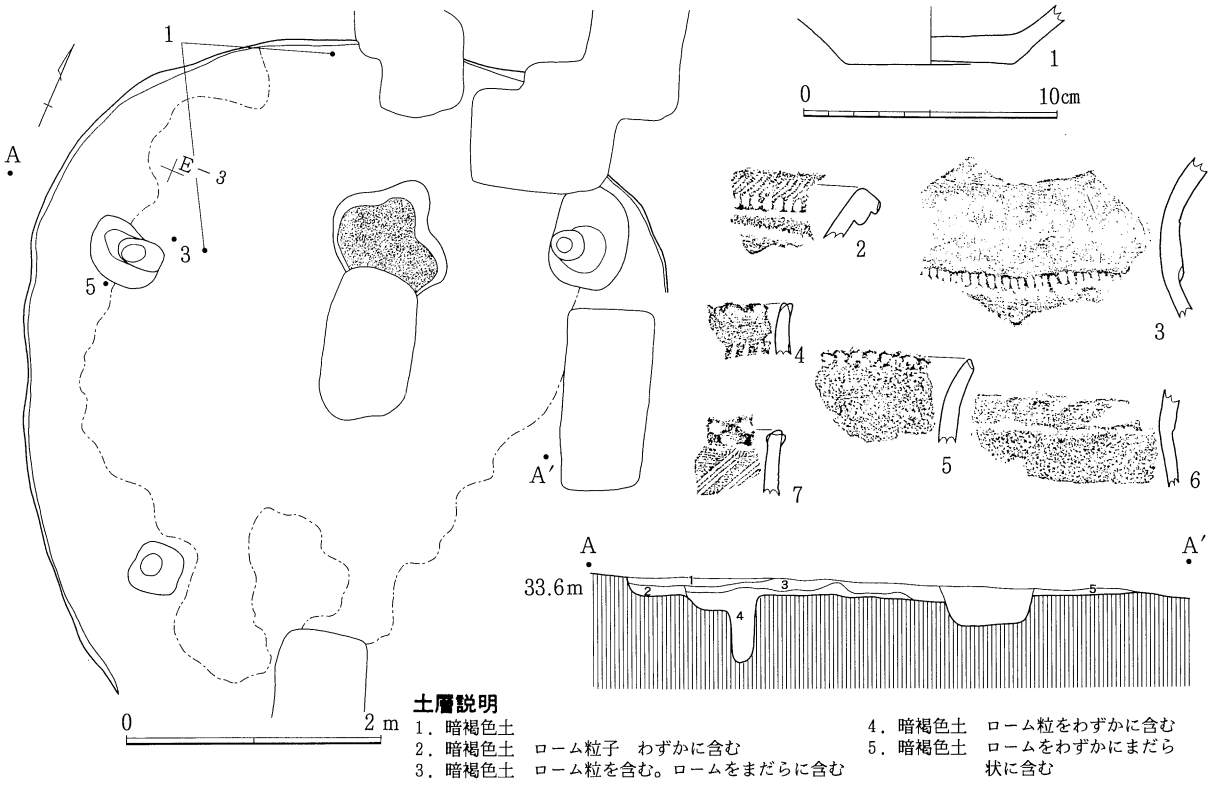
床については、上述の理由により、欠如した部分以外では、残存状況は良好であった。柱穴ついては、東西南北で検出されたが、やや歪んだ配置となる。炉は、北および西の柱間のほぼ中間で検出されている。覆土の堆積が薄いこともあって、遺物の出土はすくなかった。

図示し得る遺物は、右に示した一点のみである。小型の鉢とでも言うべき形態であり、器壁は非常に薄く仕上げられている。ほぼ垂直に立ち上がる、折り返し風の口縁とわずかに曲線を描く胴部が特徴的である。胴部には、わずかに刷毛目が認められる。古墳時代前期の所産であろうか。

16号（住居）

15号の北西に位置する。東および南側の壁は、残存していない。平面形態は、残存部の状況から、やや歪んだ小判型を呈するものと考えられる。柱穴に関しては、3箇所を検出したが、南東の柱穴に関しては、検出されなかった。ただし、その想定される位置は、前述15号の西柱穴の位置あたりであり、そこにおいては、柱穴の重複等の痕跡は認められず、本報告では15号に帰属するものとして扱った。したがって、本16号に帰属する柱穴については、不明として扱う。炉は中央やや北寄りの、北側2本の柱穴間で検出された。床の残存状況は比較的良好であった。硬化面の範囲については、先に幾つかの住居で見られたような、東側への偏りはなかった。

遺物については、図示した通りであり、1の底部資料のほかに、幾つかの破片資料を提示しうるのみである。2は二重口縁の壺の口縁部であるが、側面はいわば二段構成とでも言うべき形状を呈し、

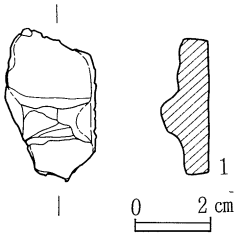


第20図　16号（住居）実測図および出土遺物実測図

第12表　16号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壷（?）	底	底径 6.5	ナデ ミガキ（光沢あり）	横位のナデ（不明瞭） 粗いナデ	赤褐色土含む	普通	内面　暗褐～黒褐 外面　褐		内面　亀裂多い

上段部分に縄文が施され、その下部には刻みが巡らされ、下段は無文となっている。3は甕の口縁から胴部にかけてであり、頸の接合部に刻みがめぐる。頸部は緩い曲線を描き、口縁部には刻みが施されている。4・7は宮ノ台式の範疇で捉えられる、甕の口縁部であろう。7は羽状の沈線文の一部が認められる。なお、右図に示したのは、本住居の覆土中から出土した鉄製品である。本来の形状等不明である。本住居に本来伴うものではないと思われる。大きさに比べて重量感がある製品である。



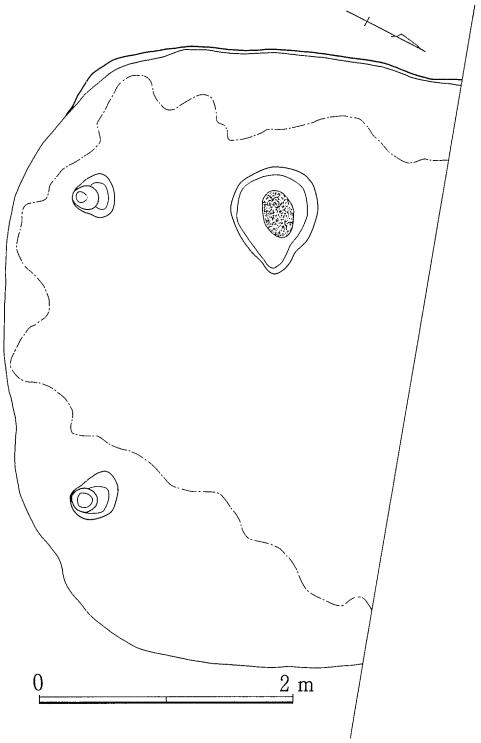
第21図　16号出土鉄製品

17号（住居）

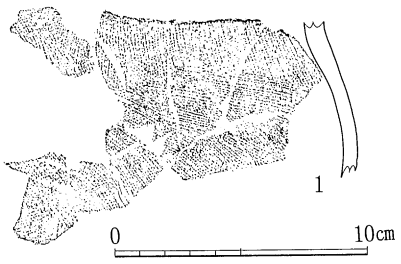
調査区の北辺ほぼ中央で検出された。南半のみの検出で、北半は調査区外である。覆土の堆積は薄く、最も厚かった西端部分でもわずか数cmという状況であった。壁は西半で僅かに検出され、東半は残存していなかったが、床の残存範囲等の検討から、小判型を呈するものと俳壇される。柱穴については南側の2本のみの検出であった。炉は西の柱穴の北側で検出され、おそらく調査区外の北西の柱穴と一直線上に位置するものと推測される。今回の調査で検出した住居の多くが北寄りに炉をもつのが、ほとんどであることから見ると、本住居は西に炉をもつことで、やや例外的な存在と言えよう。

遺物は上にふれたような状況もあって、図示したものを提示するにとどまる。1は、甕の破片である。頸部分と思われ、垂直方向の刷毛目を施した部分と斜め方向のそれとがみてとれ、同様な特徴をもつ甕の破片が先に触れた5号でも出土しており、宮ノ台式の範疇で捉えられよう。

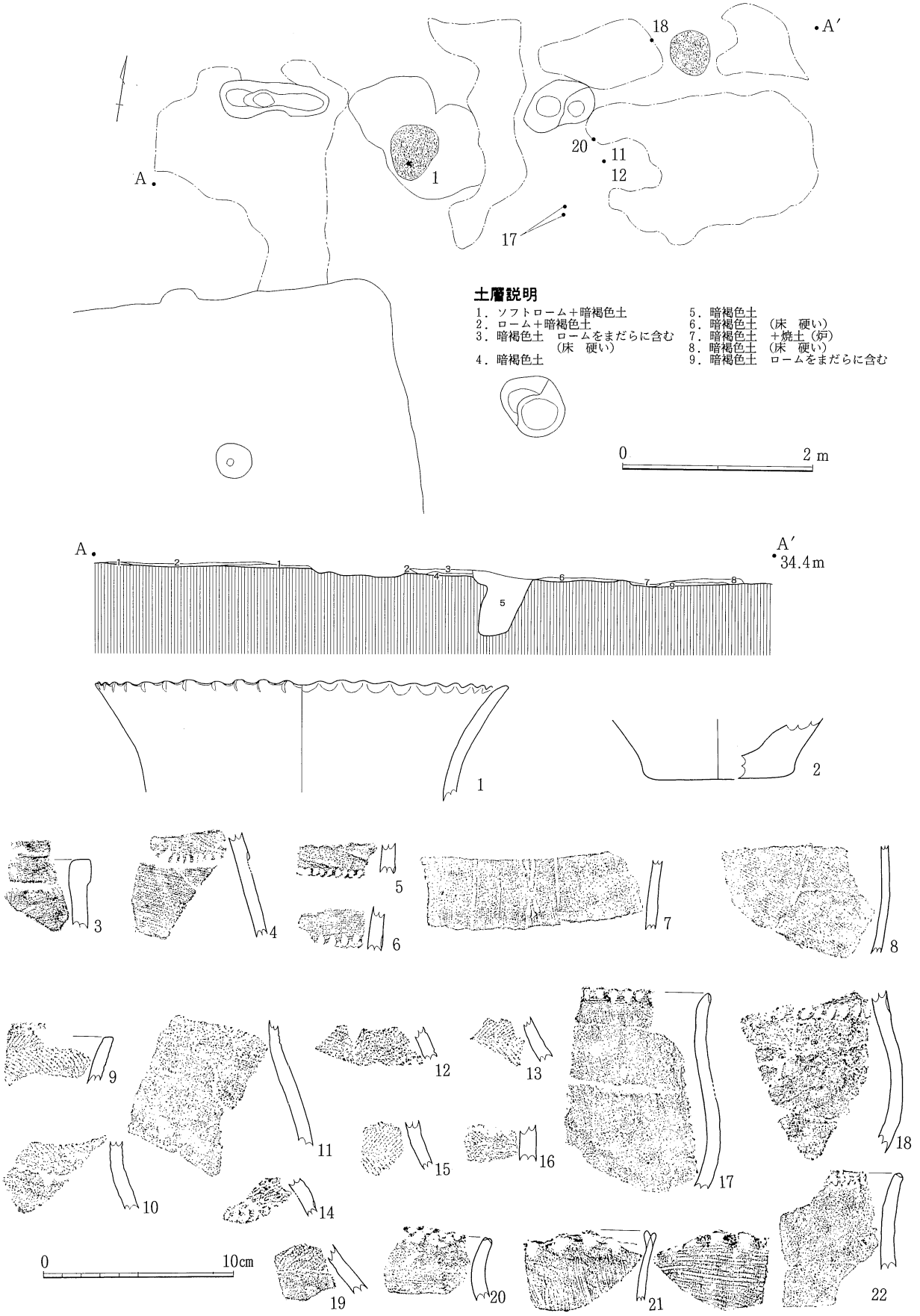
なお、右に図示したのは、覆土中から出土した鉄製品である。刀子と思われるが、本来の形状は復元し難い。



第23図　17号出土鉄製品



第22図　17号（住居）実測図および出土遺物実測図



第24図　18号・19号（住居）実測図および出土遺物実測図

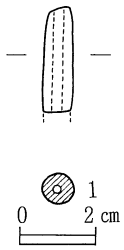
第13表　18•19号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	甕	口縁		ナデ	ハケのちナデ	暗褐色粒子含む 白色骨針わずかに含む	普通			
2	壷	底	底径 8.4	ナデ（一部縦位のミガキ）	縦位のミガキ 横位のケズリ	白色粒子含む	良好	内面　淡褐 外面　暗褐		

18・19号（住居）

17号の西に位置する。わずかな床の残存と、炉と思われる焼土、柱穴と思われるピットなどの存在、遺物の散布状況等から、住居跡と判断したものであり、２軒分をまとめて掲載した。

18号は、炉と思われる焼土および、周辺でわずかにみられた床状の硬化面のみが捉えられたにすぎない。形状、規模等不明である。この部分を中心として出土した資料は図示した通りである。特に時期的に集中する様相も見出し難い。

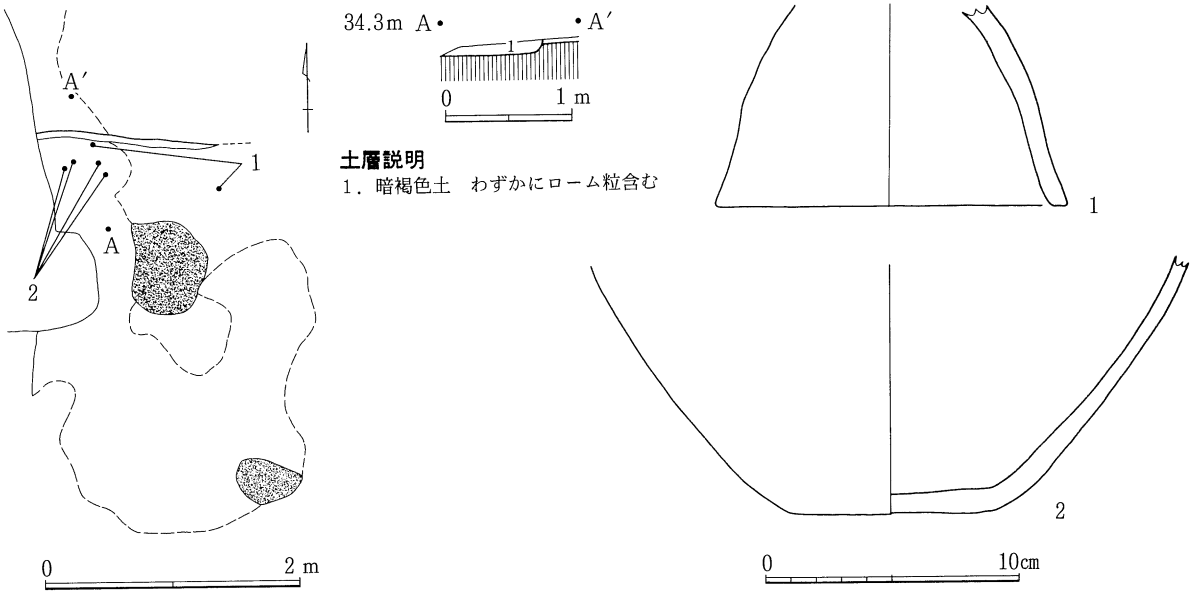


第25図　18号出土管状土錘

19号は、18号の西に位置する。遺構の残存状況は18号とほとんど変わるところはない。ただし、周辺で検出されたピットおよび後に述べる27号(住居)の下層で検出された、ピットをその位置関係から、本住居に伴うと判断した。ただし、各柱模等に相違が認められる点も否めないところであって、位置づけはやや不安定ではある。

図示した遺物は、いずれも炉から出土したものである。１の甕の口縁部には、爪による押圧が明瞭に認められる。ほかに２のような底部も出土している。

なお、次頁に18号から出土した管状土錘を掲載した。土器同様の出土状況であり、年代的には不確定であるが、遺跡周辺における生業の一端を示す資料として位置付けておきたい。残存範囲において、長さ2.8cm、幅0.8cm、孔径３cmである。



第26図　20号・21号（住居）実測図および出土遺物実測図

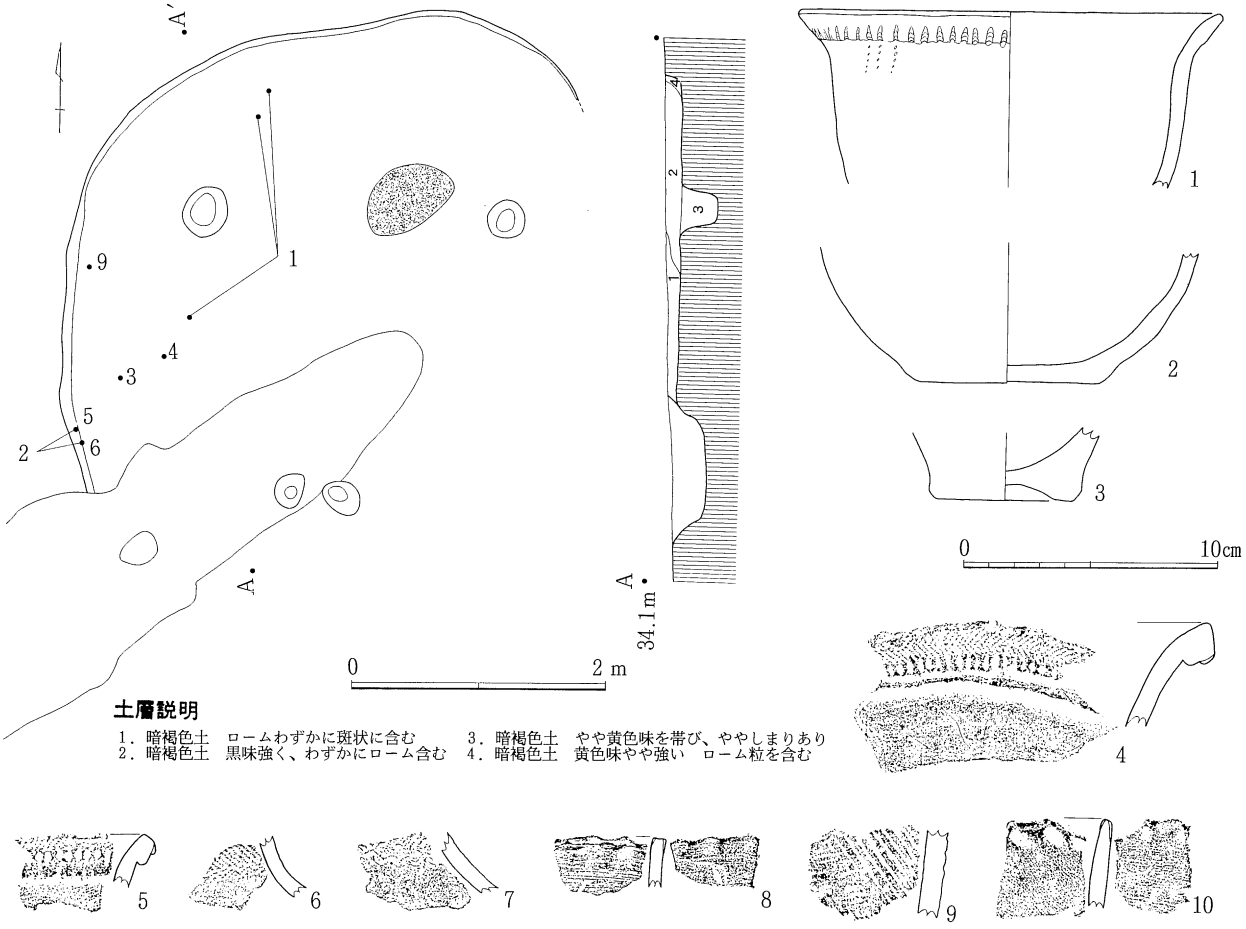
第14表　20•21号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	不明	脚	底径13.4	横位のケズリ	左下のケズリ 右上がりのケズリ	砂粒多い	普通	橙～暗褐		
2	壷（?）	底	底径 8	横位のナデ やや粗いナデ 底部1／3ほど亀裂あり	粗いミガキ	白色粒子褐色粒子含む	やや甘い	内外間とも明褐色	1,960	

20・21号（住居）

18・19号の南に位置し、残存状況は極めて悪いものであった。床の硬化面の一部がわずかに検出され、わずかな段差の存在により、2軒であることが捉えられた。西側は、後述する27号に切られている。双方共、規模・形態等不明である。上に触れたわずかな段差を20号の北壁とし、それより北側の硬化面を21号の床と判断した。結果的には、21号については、床のみ検出で終始し、20号に関しては、床および、炉とおもわれる焼土が検出されたにすぎず、柱穴の検出には至らなかった。周辺にはいくつかのピットが検出されているが、これら床・炉などとの配置状況は良好に復元し得なかった。したがって、ここでは、以上のような構成要素を抽出するに留めておく。20号に関しては、後に触れるような遺物が出土したが、21号に関しては、覆土の堆積も非常に薄いものであり、図示しうるような遺物の出土はなかった。

図示した遺物は、いずれも20号の床上から出土したものである。1は台付品の台部、2は壺の底部と考えられる。弥生時代後期の所産であろうか。



第27図　22号（住居）実測図および出土遺物実測図

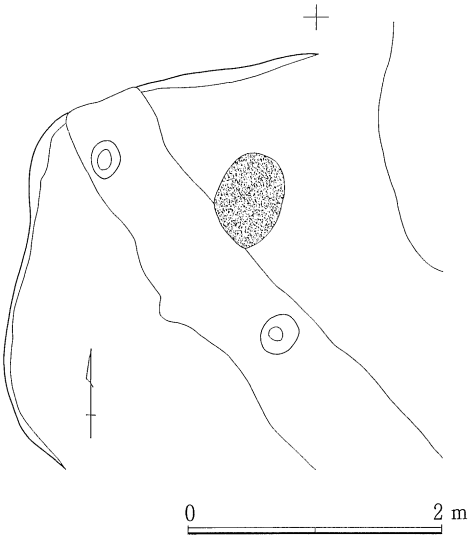
第15表　22号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	甕	口縁	口径16.5 頸径14.5	横位のナデ 若干凹　施文時の押圧か 横位のナデ	横位のケズリ	やや砂っぽい 骨針状物やや目立つ	普通	暗赤褐 黒斑あり		
2	甕	底	底径 7.1	横位のミガキ 整形不明瞭	横位のナデ 横位のケズリ 不整なナデ	全体にやや砂っぽい	普通	内面　黒褐 外面　暗褐～黒褐		
3	壷（？）	底	底径 5.5		粗いナデ	全体に砂っぽい	甘い	淡褐～暗褐		器表 磨耗により整形不明瞭

22号（住居）

20・21号の南西に位置する。南東寄り部分を欠き、約1/2部分が捉えられた。残存部の南西端は、28号(方形周溝墓）により切られている。平面形は、小判型あるいは胴張りの方形の可能性が考えられるが、判然としない。柱穴については、整然とした状態では検出されずまた、南東のそれについては検出し得なかった。炉については、北側の2 本の柱間のやや東に寄った部分で検出されているが、残存状況は良好ではなかった。主軸は座標北方向となろう。床に関しては特に堅固な硬化面を形成するには至っていなかった。覆土の堆積は比較的薄かったが、以下に示すような資料を得ることができた。

遺物は、次頁に図示したようなものが出土した。特定の時期に集中してはいないようである。このうち、1は広口壺の口縁部で、折り返し口縁の下段に櫛状工具によると思われる、深目の押圧がめぐる。その押圧は、一部胴部に及んでいる。2は壺の底部である。この底部は円盤状を呈しており、胴部は球形に近く、古墳時代後期の所産であるかもしれない。3は台付品の接合部であろう。4以下には破片資料を示したこれらのうち、4・5などの壺の口縁では、さきにも若干触れたように、折り返し部の中段で刻み、縄文の施文が終わっているという共通性がみられる。6・7の頸部から胴部にかけての文様はS状結節文による区画内に縄文を施している。8・9は甕の口縁部であり、ともに指頭による押圧が巡らされる。宮ノ台式の範疇で捉えられよう。



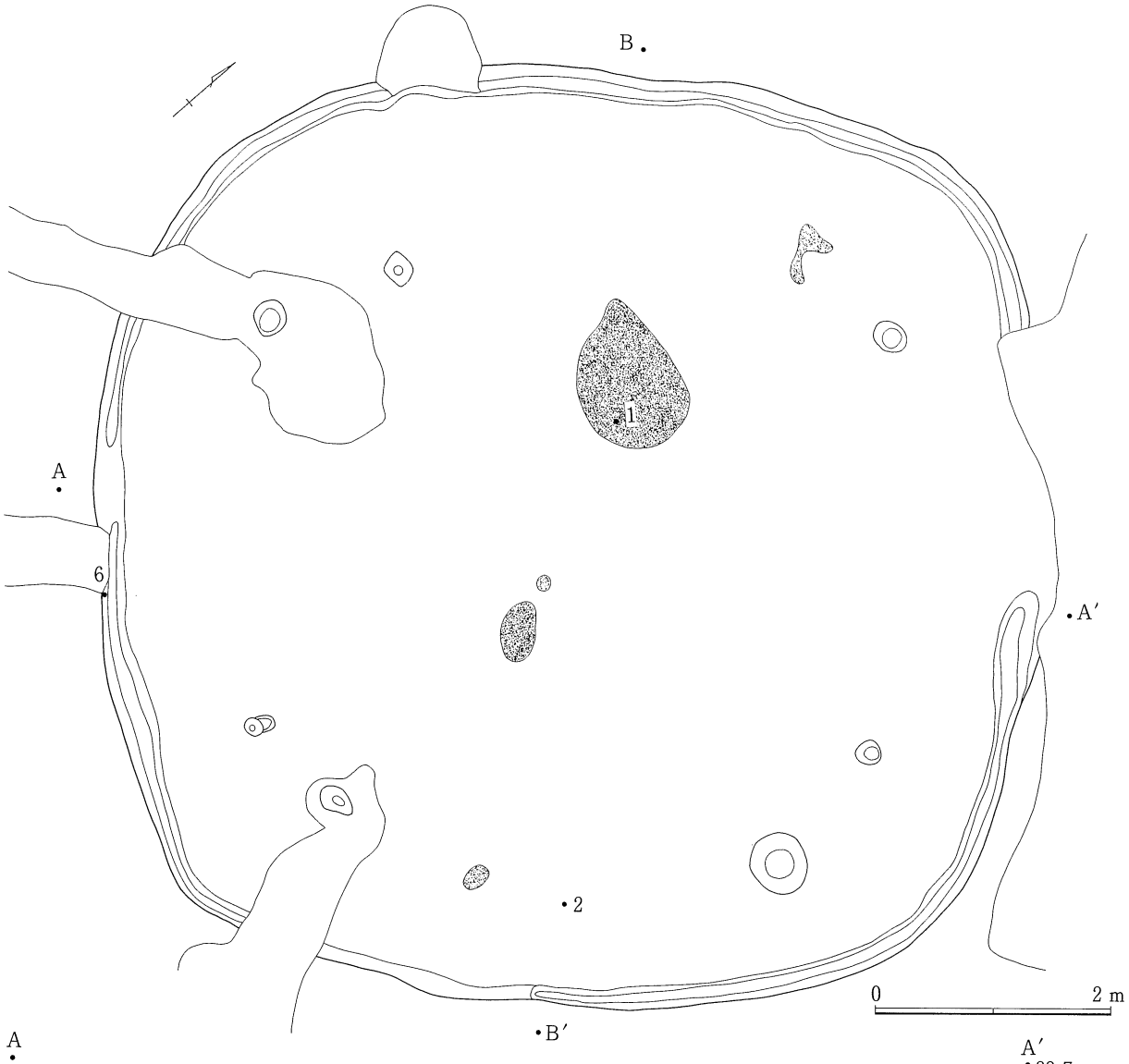
第28図　23号（住居）実測図

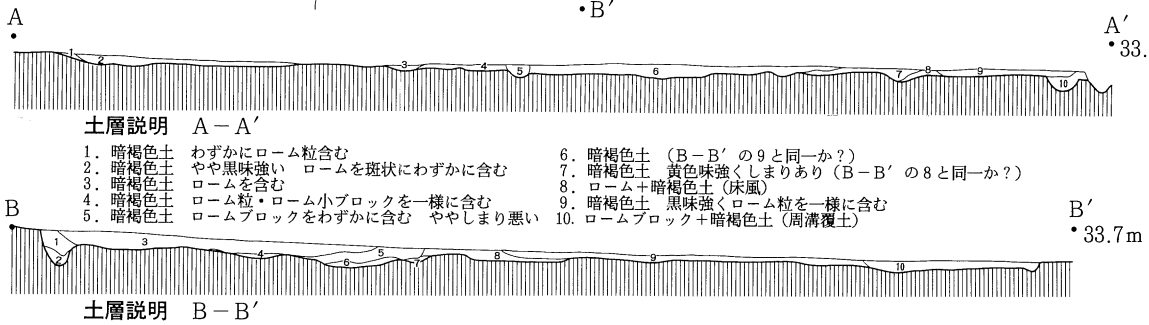
23号（住居）

22号の南西に位置する。おそらく胴張り方形を呈するであろう住居の北西隅部分のみが検出された。また、この北西隅から南東方向には、28号(方形周溝墓)の東辺が通っている。壁の立ち上がりは低く、床の残存状況も良好ではない。わずかに炉と思われる焼土の集中とピットが不規則な配置で検出されたに留まる。このような状況にも起因して本住居からは図示するに足る遺物の出土は認められなかった。

24号（住居）

23号の南に位置する。今回検出した住居のなかでは、最も床面積の広いものである。主軸を北西方向に持つ、胴張りのほぼ正方形を呈するが、北東辺の一部は29号(前方後方墳）の周溝により切られている。この住居では壁際に、断続的ながら周溝が巡るのが認められている。柱穴については、4つ



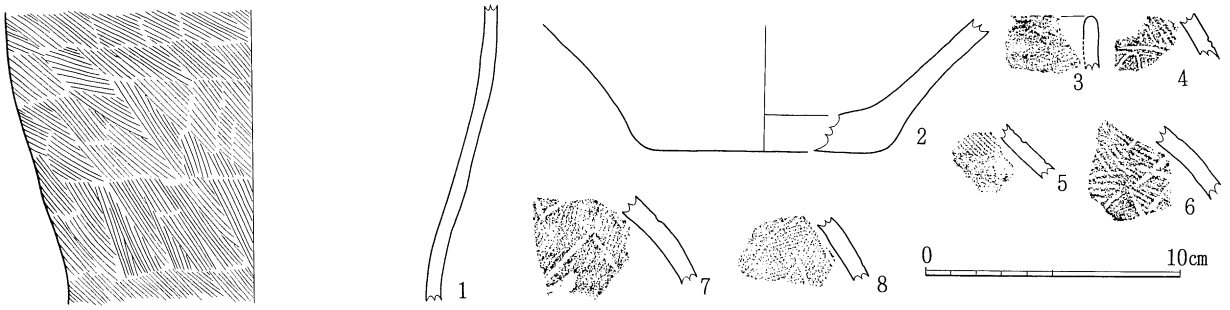


土層説明　A－A′

1．暗褐色土　わずかにローム粒含む
2．暗褐色土　やや黒味強い　ロームを斑状にわずかに含む
3．暗褐色土　ロームを含む
4．暗褐色土　ローム粒・ローム小ブロックを一様に含む
5．暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む　ややしまり悪い
6．暗褐色土　（B－B′の9と同一か？）
7．暗褐色土　黄色味強くしまりあり（B－B′の8と同一か？）
8．ローム＋暗褐色土（床風）
9．暗褐色土　黒味強くローム粒を一様に含む
10．ロームブロック＋暗褐色土（周溝覆土）

土層説明　B－B′

1．暗褐色土　やや黄色味強いロームをわずかに含む
2．ローム＋暗褐色土　周溝覆土
3．暗褐色土　やや黒味強いロームを斑状に含む
4．暗褐色土　ややしまり悪い
5．暗褐色土　ローム粒　焼土粒をわずかに含む
6．暗褐色土　焼土粒をやや多く含む
7．ローム＋暗褐色土
8．暗褐色土　黄色味強くややしまりあり
9．暗褐色土　黒味強くローム粒わずかに含む　しまりあり
10．暗褐色土　ロームを斑状に含む



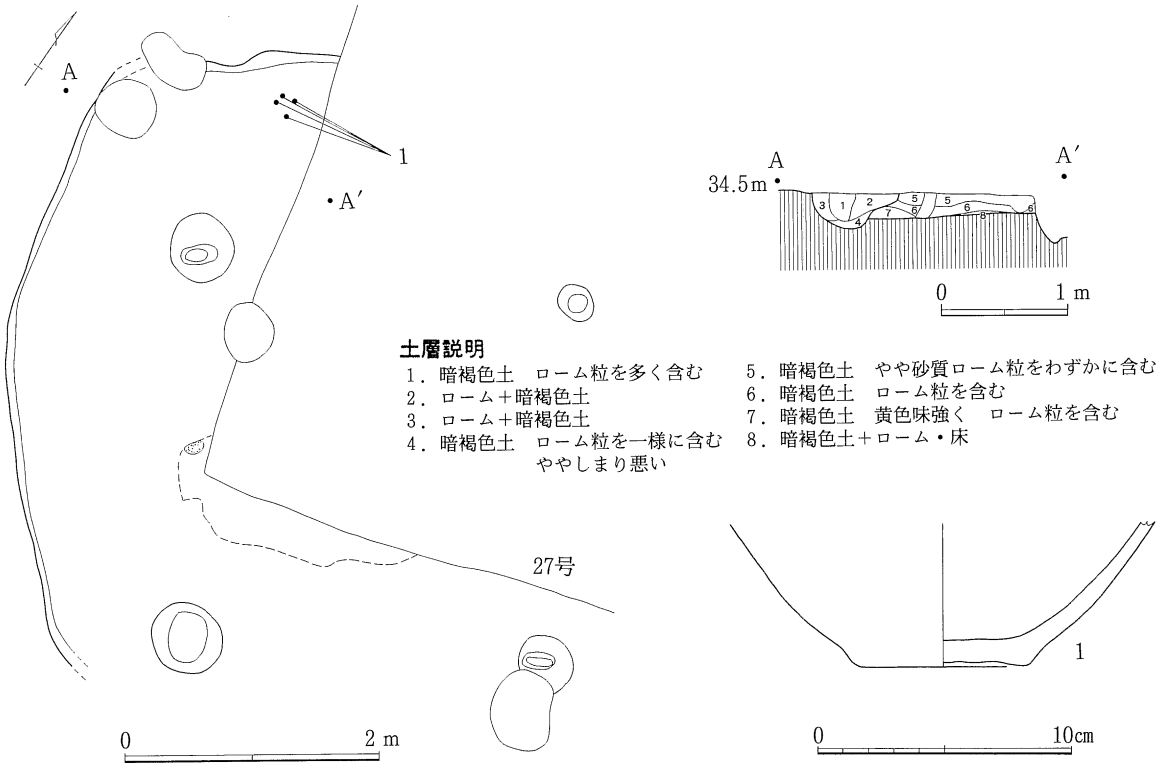
第29図　24号（住居）実測図および出土遺物実測図

第16表　24号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	甕	胴	最大径21.8	横位のナデ 縦位のナデ	横位のナデ	白色粒子わずかに含む	普通	暗褐～黒褐		
2	甕（?）	底	底径 6.2		ナデ？	砂粒多い 白色粒子目立つ	やや甘い	内面　暗褐～黒褐 外面　暗褐		

のほぼ同規模の小ピットをそれにあてて捉えることが可能である。その場合、東西幅が南北幅よりかなり広くなることとなる。なお、若干不規則な配置にはなるが、やや南北に長くなる柱の配置となるような関係を復元しうる位置にも小ピットが検出されている。建て替えの可能性を指摘しうるが、床等にそれを裏付ける痕跡は見出されなかった。床の残存状況はとくに硬化面を形成するには至っていない状態であった。炉は、住居の中央やや北寄りの部分で検出され、ここからは甕の胴部が出土している。全体として遺物の出土は少ない。

出土した遺物は図示のとおりである。1は上にも触れた炉内出土の甕の胴部である。全面的に刷毛による整形がなされている。口縁部、底部とも欠くが、本来はいわゆる砲弾型を呈するものであったと推測される。宮ノ台式の範疇で捉えられよう。2は壺の底部であろう。接地面全体がやや曲線的である。3以降は破片資料である。3の口縁部については本来の形状は不明である。口縁直下に結節文



第30図　25号（住居）実測図および出土遺物実測図

第17表　25号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壺	胴	底径 6.6	ハケ？（細い条線あり） 粘土の付着あり	縦位のケズリ ナデ	白色粒子 白色骨針含む 小礫含む	良好	内面　褐 外面　暗褐		

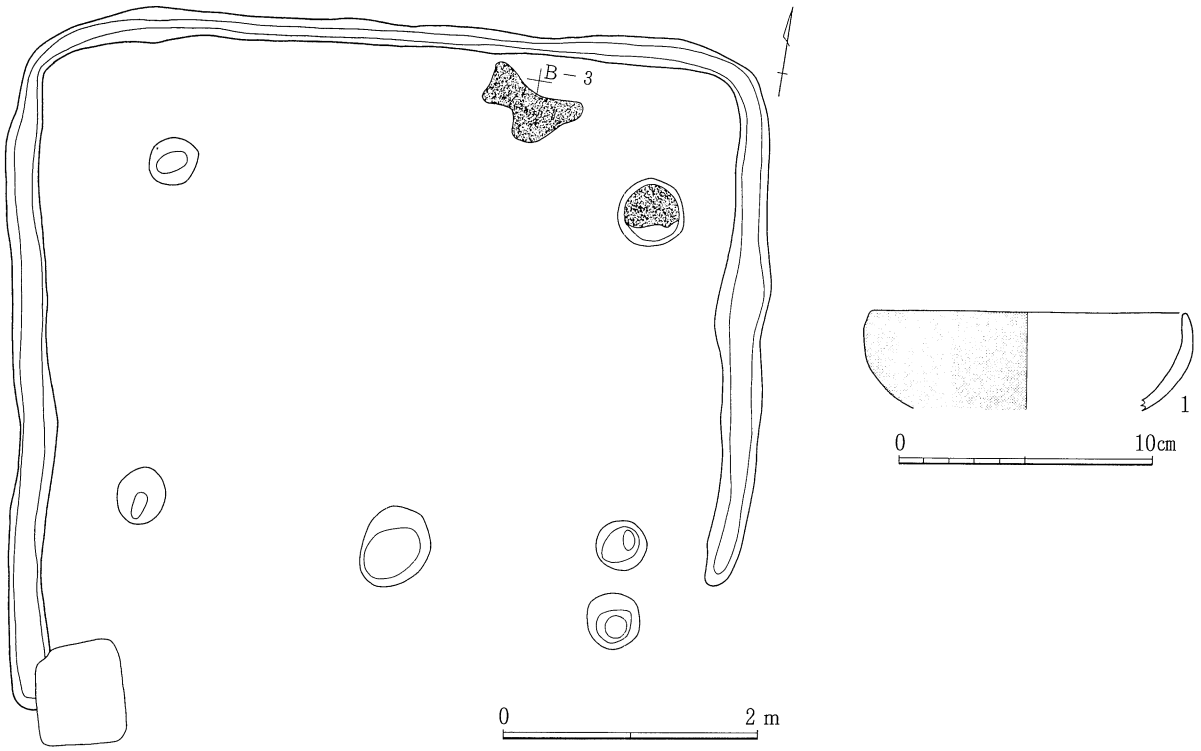
のみが施されている。沈線区画と縄文の組合せの例がいくつか見られる中で、5は2単位の縄文と列点文による文様区画が認められる。

25号（住居）

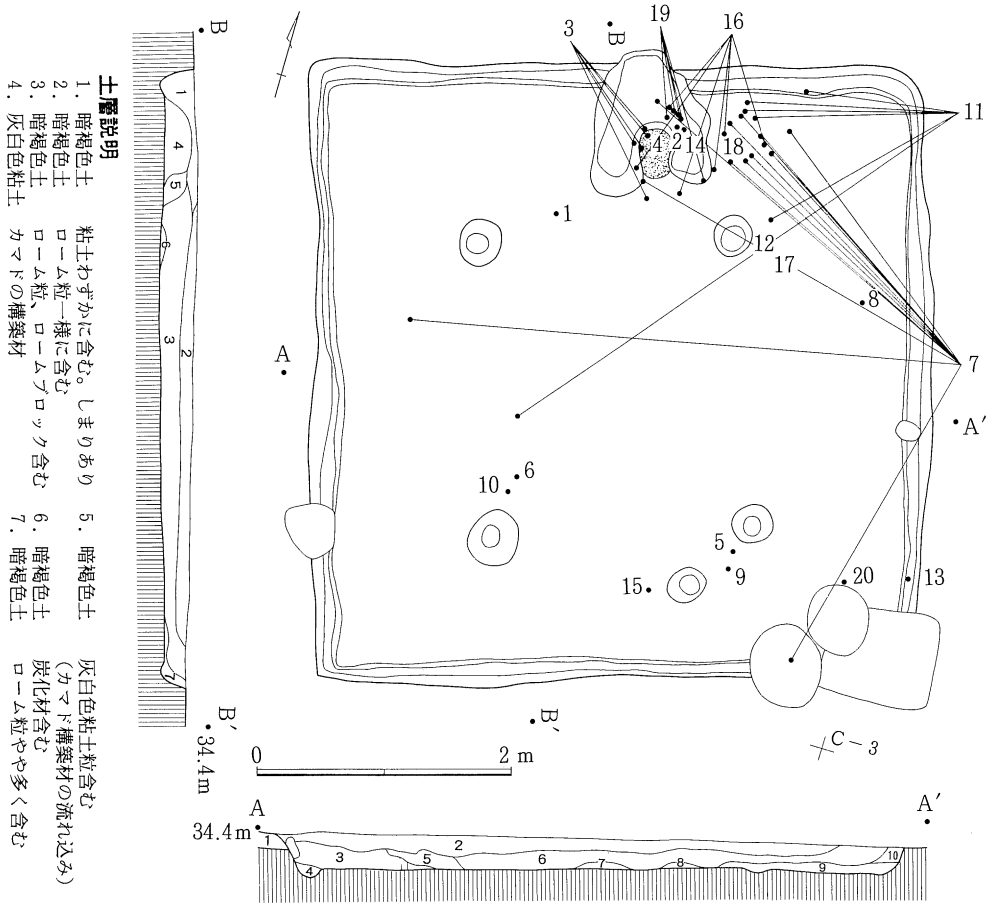
後に述べる27号住居に切られる形で、同住居の南西側で検出された。北壁および西壁の一部がかろうじて捉えられたが、南および東壁については検出し得なかった。残存部の形態から胴張りの方形を呈するものと考えられるが、やや不安定である。柱穴に関しては、27号住居床下層ピットとの組合せに蓋然性を持たすことが可能と判断された。これにより、主軸はほぼ座標北方向を向くこととなる。床に関しては一部で良好な硬化面を検出し得たが、総体的には、良好な状態ではなかった。炉は検出し得なかった。

遺物は北壁に近接した部分で、図示したような壺の底部が出土したのみであった。文様等とくに特徴的な部分も少なく、年代的な位置づけには困難を伴うところである。あるいは弥生時代後期の所産であるかもしれない。

なお、本住居の西側すなわち27号の南側には比較的近接した位置で、焼土あるいは小ピットが検出されている。また、上にも触れたように27号の床下層からもいくつかのピットが検出されている。それらの中には住居の構成部分を包含している可能性が高いと考えられたが、結論的には一軒の復元すら不可能であった。なお、これは柱の配置等に一定の条件をはめた上での、つまり正方形あるいは長方形に近い配置がされ、かつ柱穴の掘り込みの深さが近似するという条件のもとでの検討に過ぎないので、かかる条件を外した場合には、上のような結論には至らないかも知れない。ただし、ここでは可能性のみの追求は避けておきたい。

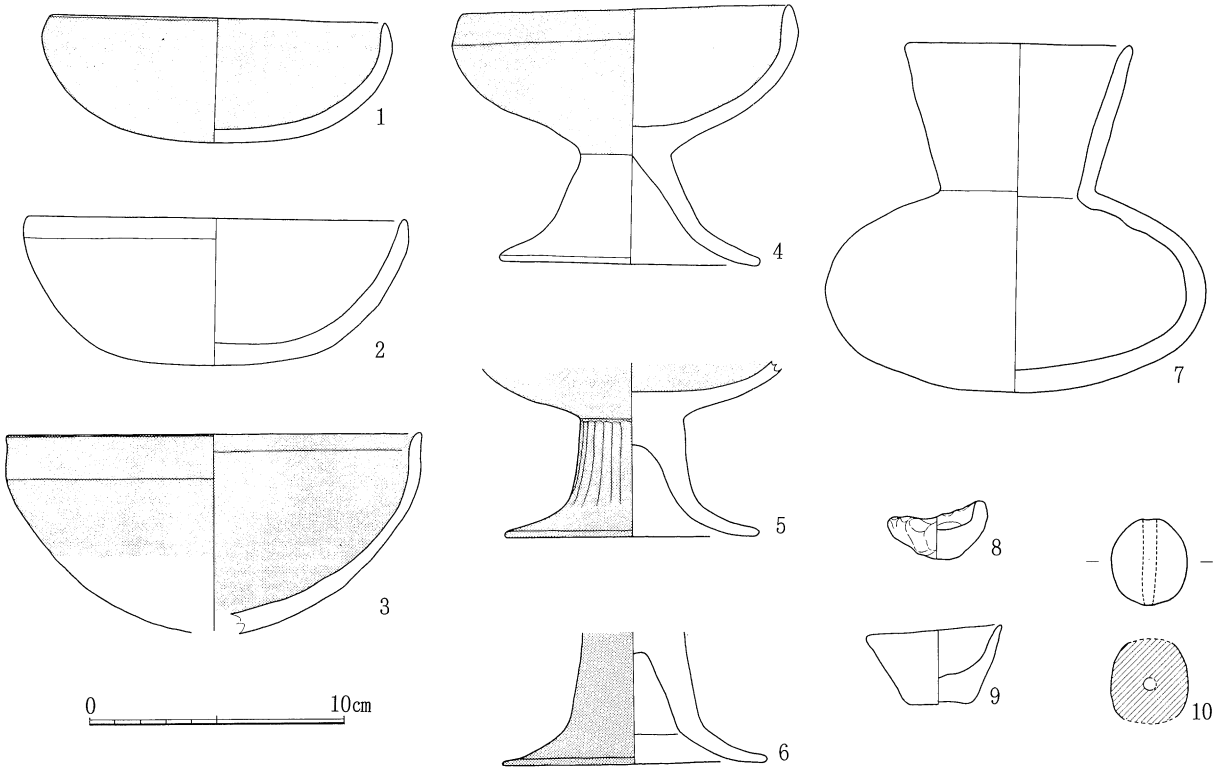


第31図　26号（住居）実測図および出土遺物実測図

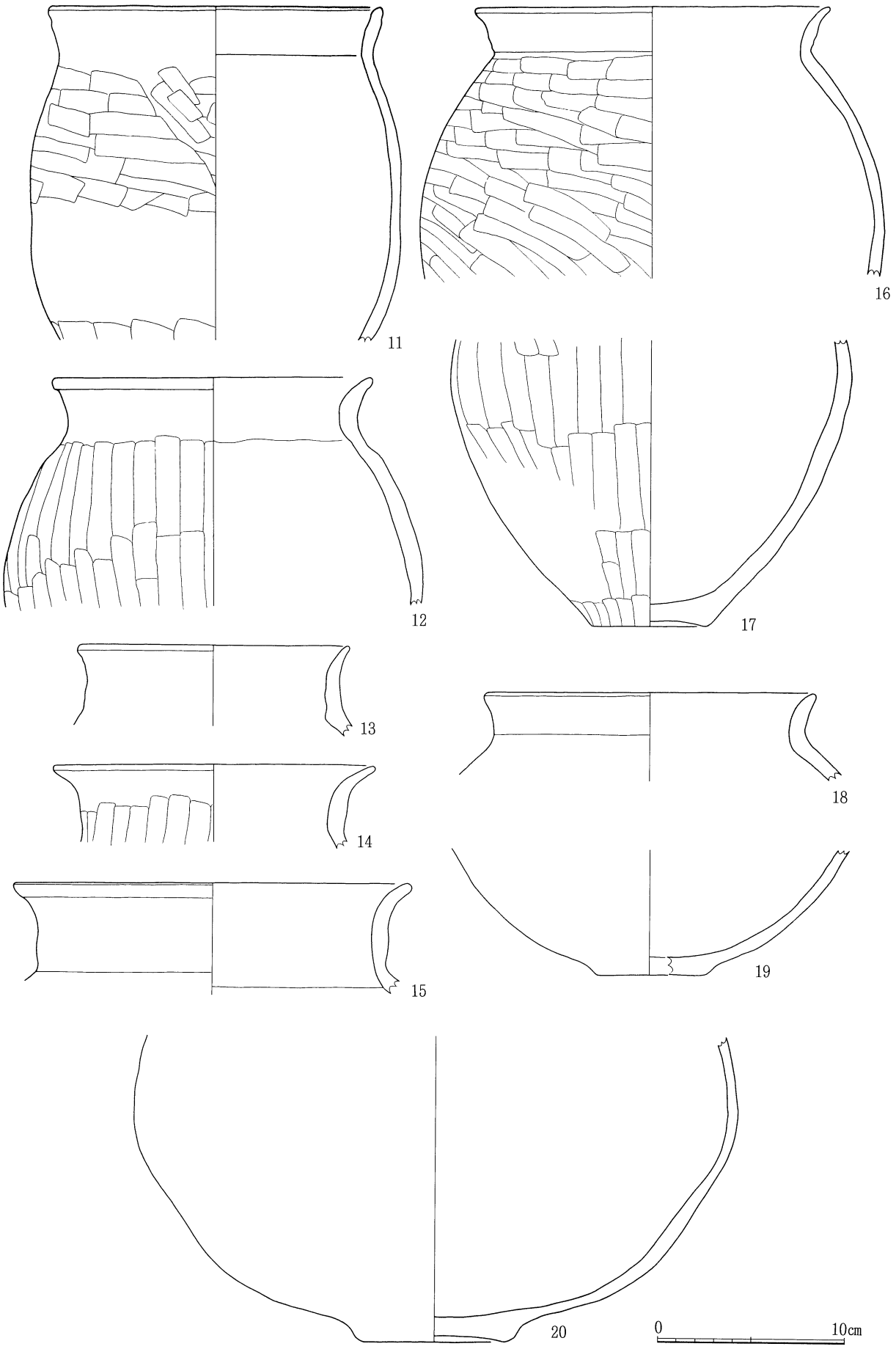


土層説明

1. 暗褐色土　ローム粒を一様に含む（30号覆土）
2. 暗褐色土　ローム粒一様に含む
3. 暗褐色土　ローム粒一様に含む。ややしまりあり
4. 暗褐色土　ローム粒やや多く含む
5. 暗褐色土　焼土多く含む
6. 暗褐色土　ローム粒　ロームブロック含む
7. 暗褐色土　ロームわずかに含む。ややしまりあり
8. 暗褐色土　炭化材をわずかに含む
9. 暗褐色土　ローム粒、炭化粒を含む
10. 暗褐色土　ローム粒を含む



第32図　27号（住居）実測図および出土遺物実測図（1）



第33図　27号（住居）出土遺物実測図（２）

第18表　26号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	坏	上半	口径12.4	横位のナデ	横位のナデ ケズリ？（不明瞭）	白色粒子 白色骨針含む	やや甘い	内面　褐 外面　赤彩		

26号（住居）

今回の調査範囲内において検出された住居のうちでもっとも西側に位置するものである。ただしその残存状況は必ずしも良好ではなく、柱穴および周溝、わずかな焼土を残すのみで、壁の立ち上がりは確認していない。床については若干硬化がみとめられる程度に留まり、明瞭に面的な広がりをもって捉えられたわけではない。形態的には、やや東西に長い長方形を呈するものと思われ、柱穴はこの形態に即したような配置を示して検出されている。主軸はほぼ座標北方向となりそうである。焼土は、北辺の中央よりやや東によった位置で検出されており、カマドの「残骸」であるかもしれない。そもそも、本住居の検出された調査区の西寄り部分においては、南北方向にはしる細く浅い溝が、比較的短い間隔で存在し、これはおそらく耕作機械の走行による影響と考えられるのであるが、遺構に与えた影響は計りしれないものがある。本住居においても、それは例外ではなく、そのことが上に述べたような検出状況に至らしめたものであろう。

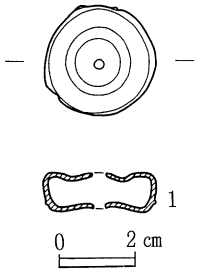
遺物については、覆土がほとんどない状況であったので、小片が得られたのみであり、図示したのは、西周溝の南端のピットから出土したものである。直接本住居に結びつくとは考えられないが、ここに報告しておく。これは、半球形を呈する丸底の坏で、古墳時代後期の所産であろう。なお、同時期の遺構としては、次に報告する27号があり、ここでは良好な資料を得る事ができている。

27号（住居）

26号の東に位置する。今回調査した住居のなかでは、最も新しく、古墳時代後期に属するものであり、これまで見てきた大半の住居に比べ掘り込みも深く、他の遺構の影響をほとんど受けていない。平面的にはほぼ正方形を呈し、主柱穴は4か所で検出され、主軸は座標北よりやや西にふれる。壁際には周溝が巡っている。床の残存状況も比較的良好であった。カマドは北辺のほぼ中央で検出され、火床部および東袖周辺からは、良好な遺物が得られた。

遺物は図示したとおりであるが、周辺の調査においては同時期の住居は検出されておらず、したがって他の遺構からの流入等による遺物相の混乱がほとんどないとみてよく、同時廃棄の一括資料として安定しているものと位置づけられよう。ただし、これら一括資料が古墳時代後期の土器編年上のどのような位置に収まるかについては、今後の検討に委ねられる点も多い。坏については、やや大振りで深いことが一つの特徴であり、坩については胴部が偏平である。高坏についてみれば、坏部の口縁下に弱い稜線をもつこと、甕については、最大径が胴部の中央に近い位置にあること、壺の底が円盤状を呈するものがあること等をこの一括資料を構成する各器種の特徴として抽出することが可能であろう。なお、姉崎地区においては、先年調査された椎津茶の木遺跡でまとまった資料の出土があり、今回の資料との対比をおこなったところ、今回のこの一括資料は、茶の木遺跡の編年上では、第2期に位置づけることが可能であり、古墳時代後期鬼高式のやや古い段階に位置づけられる。

右に図示したのは、本住居出土の鉄製品である。中空で、中央部には小孔があけられている。薄手の製品であり、側面には合わせ目がめぐっている。性格等不明である。



第34図　27号出土鉄製品

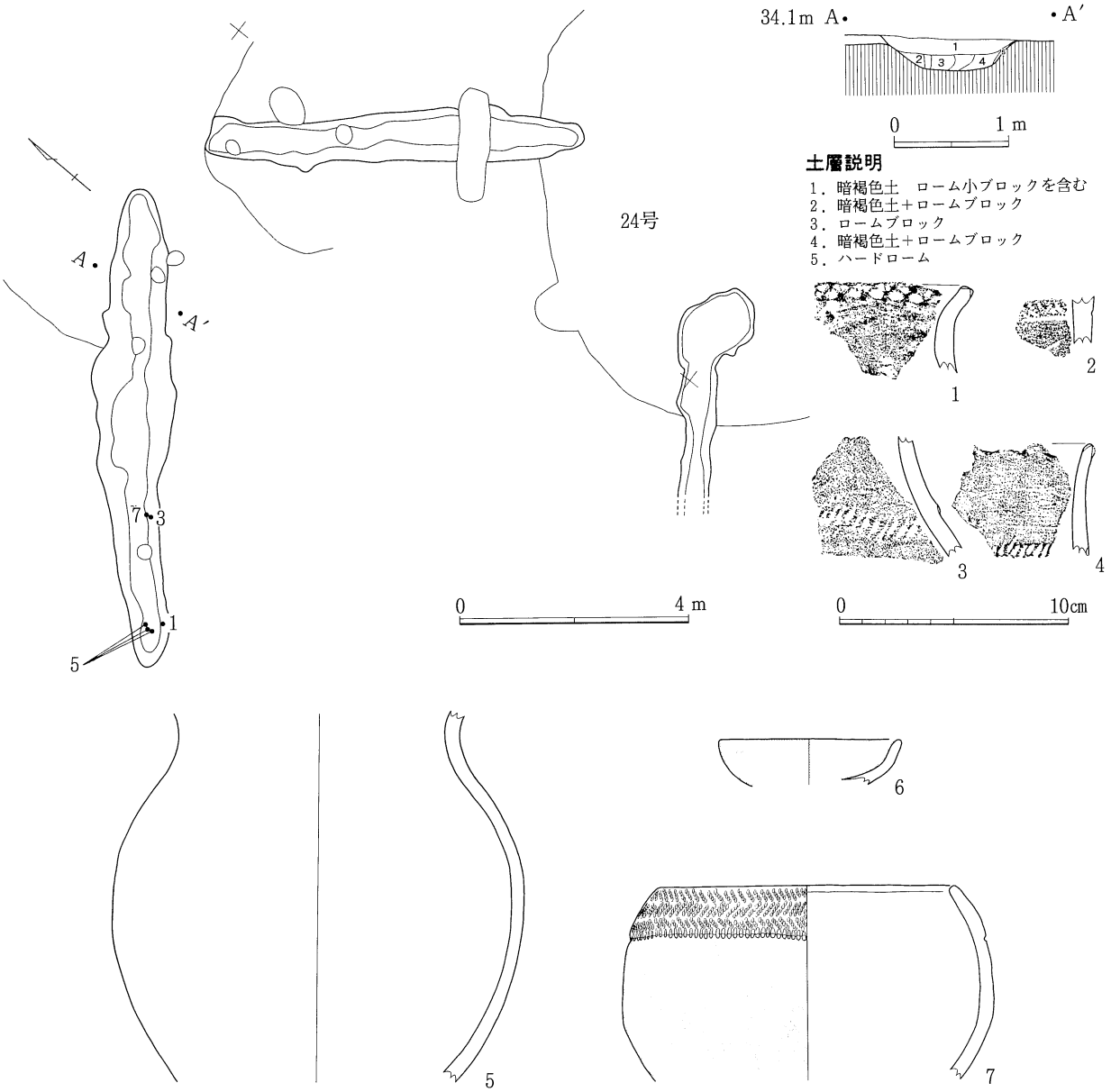
第19表　27号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	坏		口径13.2 底径 2.2 器高 4.9	ナデ	横位のナデ ケズリのちナデ	比較的精良	やや甘い	赤彩 （地の色は明褐）	357	完形
2	坏		口径14.8 底径 2.8 器高 5.8	横位のナデ	横位のナデ ナデ（方向等やや不明瞭横位か）	微砂粒 褐色粒子多い	普通	暗赤褐～暗褐	559	完形
3	坏		口径16.4 器高 7.9	横位のナデ	横位のナデ ケズリのちナデ ケズリ痕残存（けずり方向不整）	小礫含む 黒色粒子わずかに含む	やや甘い	内面　赤彩 外面　赤彩、明褐	883	ほぼ完形
4	高坏		口径13 底径10.1 器高10.1	ナデ 横位のケズリ ナデ	横位のナデ 右下りのケズリ 縦位のケズリ ナデ	白色粒子 微砂粒多い	普通	赤彩、地は明褐	375	器表は剥落している部分多い 赤彩は薄れている部分多い 完形
5	高坏	下半	底径 9.8	ナデ？ 横位のナデ	横位のナデ？ 横位のナデ 縦位のケズリ	微砂粒多い 白色、褐色、黒色粒含む	やや甘い	赤彩、明褐		
6	高坏	脚	底径10.3	横位のケズリ 横位のナデ	横位のナデ	微砂粒多い 白色、褐色、黒色粒含む	やや甘い	赤彩 内面　橙～明褐		
7	坩		口径 8.8 器高13.8 頸径 6.2	横位のナデ 凹凸あり 横位のケズリ ナデ？	横位のケズリのちナデ 工具の静止痕あり ナデ 横位のケズリのちナデ ナデ	暗褐色粒子わずかに含む 比較的精良	やや甘い	橙～暗褐	819	ほぼ完形
8	手捏ね				ヒビ割れ多い	白色粒子目立つ	良好	褐		
9	手捏ね		口径 5.4 底径 2.2 器高 2.9			比較的精良	良好	明褐		
10	土玉					比較的精良	良好			
11	甕	上半	口径17.6 頸径16.8	凹凸目立つ 横位のナデ（条線あり） 右下りのナデ	凹凸目立つ 横位のナデ（条線あり） やや右下りのケズリのちナデ ケズリ痕不明瞭 やや右下りのケズリ	微砂粒多い 白色粒子多い 暗褐色粒子わずかに含む	やや甘い	暗褐		
12	甕	上半	口径17.1 頸径15.7	横位のナデ（条線残る） （回転台使用か） 横位のナデ	横位のナデ（条線残る） （回転台使用か） 縦位のケズリ	白色粒子多く含む 微砂粒含む	普通	橙～暗褐		
13	甕	口縁	口径14.4 頸径14.0	横位のナデ 条線明瞭	横位のナデ 縦位のケズリ？	微砂粒多い 白色粒子含む	普通	内面　暗褐 外面　褐		
14	甕（？）	口縁	口径17.3 頸径14.1	横位のナデ（条線あり）	横位のナデ（条線あり） 縦位のケズリのちナデ	微砂粒多い	良好	褐～黒褐		
15	甕	口縁	口径21.2 頸径18.8	横位のナデ	横位のナデ	黒色粒子多く含む	良好	暗赤褐		
16	甕	上半	口径19.0 頸径17.0	横位のナデ（回転台利用？） 横位のナデ	横位のナデ（回転台利用？）	白色粒子やや顕著 白色骨針わずかに含む	良好	褐～黒褐		
17	甕	下半	底径6.2	横位のナデ 整形不明瞭	縦位のケズリ（不明瞭な部分あり）	微砂粒多い	普通	暗褐～黒褐		
18	甕	口縁	口径17.6 頸径16.8	横位のナデ（不明瞭な部分多い）	横位のナデ	白色粒子やや目立つ	良好	内面　黒褐 外面　暗褐		
19	甕	下半	底径 5.5	丁寧なナデ	ケズリのちナデ	微砂粒　白色粒子多く含む	良好	褐～黒褐		
20	甕	下半	底径 7.6		横位のケズリのちナデ（部分的に光沢あり）	白色粒子含む 褐色粒子わずかに含む	普通	内面　明褐～黒褐 外面　暗褐～黒褐		

2）墳墓

28号（方形周溝墓）

調査区の中央やや西寄りの部分で検出された。北辺・東辺および南辺の約1/2が検出されたが、西



第35図　28号（墓）実測図および出土遺物実測図

第20表　28号（住居）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
5	甕	胴	頸径13.0	亀裂やや目立つ 横位のナデ	横位のナデ ナデ？ 縦位のミガキ	白色骨針含む 小礫わずかに含む	やや甘い	内外面ともに橙	2716	
6	坏（？）	口縁	口径 8.0	横位のナデ	横位の荒いナデ	比較的精良	良好	赤彩		すす（？）付着
7	鉢	上半	口径12.9	横位のナデ		白色骨針含む	良好	内面　暗褐～黒褐 外面　赤彩 （口縁部は暗褐～淡赤褐）		刺突具は不明

辺は検出されなかった。それぞれ一辺3.5m前後で、四隅がきれる形態を呈している。東辺の長軸方向は北西を向いている。北辺は22号住居を切り、東辺は23・24号住居を切っている各辺の掘り方はやや雑な感がある。地勢の影響もあり、北辺の掘り込みにくらべて、南辺は浅いものとなっている。主体部は検出されなかった。遺物は、各辺から多少の破片資料が出土しているが、特に良好な出土状況と言えるものではなかった。

図示した遺物は、いずれも北辺覆土中からの出土である。1～4の破片資料および6の無頸壺については弥生時代後期の所産であろう。5の甕の胴部については、古墳時代後期の所産であろうか、混入の可能性が強い。

29号（前方後方墳）

調査区の中央から東寄りの部分で検出された。今回の調査範囲内では、後方部および前方部の一部が検出されたに留まる。後方部はやや南北に長い歪んだ長方形を呈し東辺約20m、南辺約17m、西辺約18mである。くびれ部の形状は東側では、後方部北辺と前方部東辺が鋭角的にかつ直線的に屈曲するのに対し、西側では曲線的である。周溝は、内側については、明瞭に下端が捉えられたが、外側については明瞭な下端は形成されず、したがって、周溝断面も三角形と言った方が近い部分もある。また周溝は、各辺の中央部で最も幅を広くし、各コーナー部ではかなり狭いものとなっている。周溝底面のレベルは後方部東および後方部西の各中央付近がやや低く、西側くびれ部が最も低くなっている。

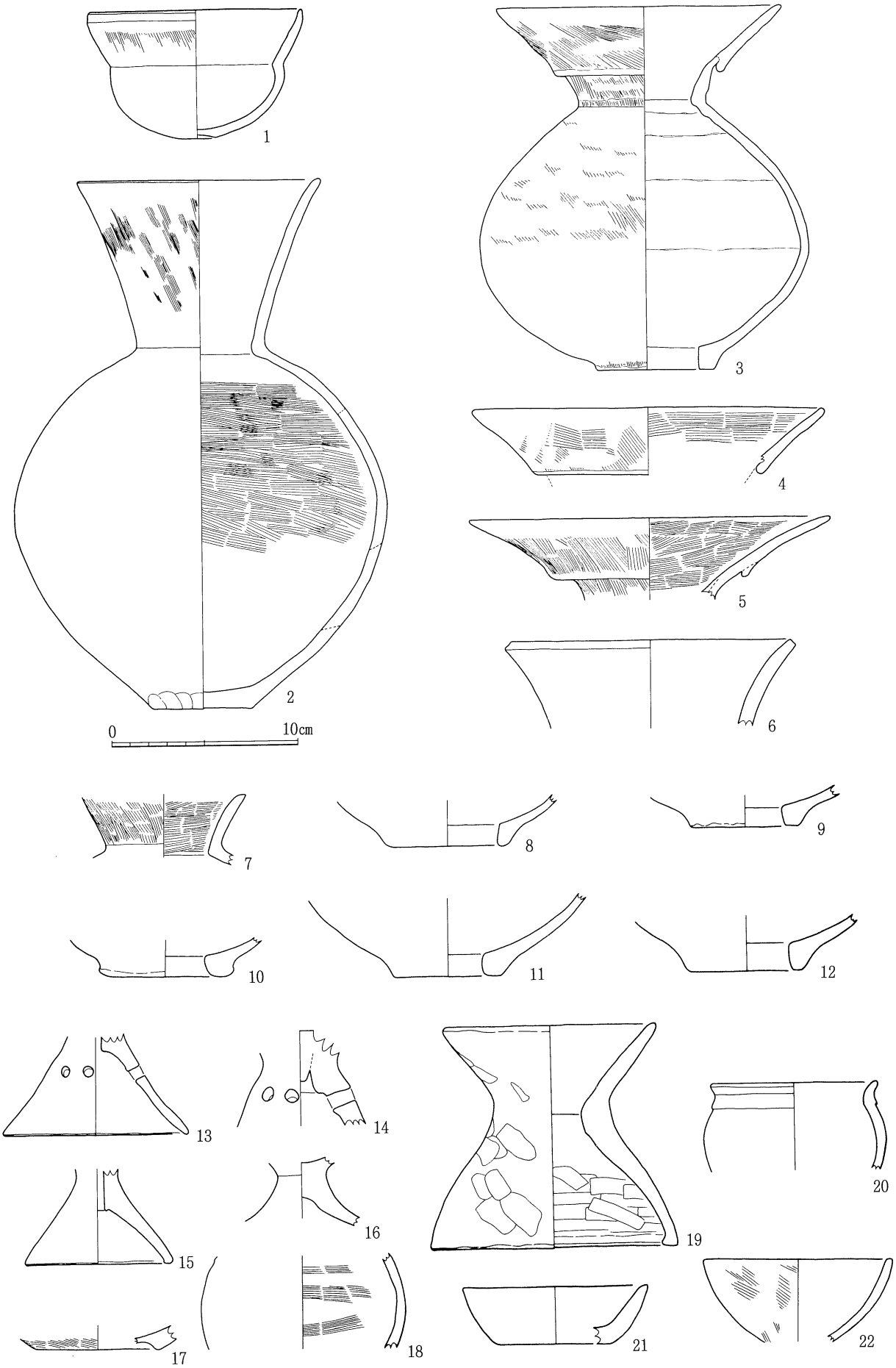
主体部は検出されなかった。おそらく本来あった低墳丘中に存在したものと考えられる。また、いわゆる周溝内土壙は検出されなかった。

遺物はいずれも周溝からの出土となるが、後方部西および後方部東のそれぞれやや北寄りの部分で比較的まとまった土器の出土が認められ、また西くびれ部においても集中して遺物の出土が見られたなお、このうち西くびれ部では、上層では古墳時代後期の資料がみられ、下層は古墳時代前期の資料に限定された。このことは、古墳時代後期の土器の廃棄行為がここで行われたことを示すものであろうし、さらにここにかかる行為が誘導されるような景観を有していたのかもしれない。

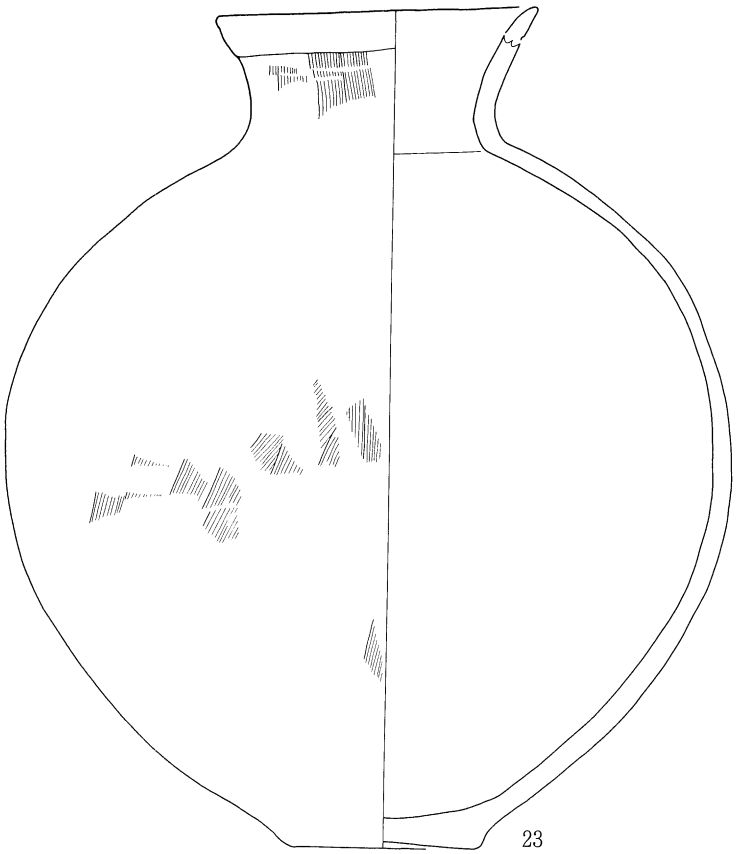
ややまわりくど言い回しになったが、土器の一括廃棄の時点では、このくびれ部が完全に埋まりきっておらず、窪地だったのではないかということである。

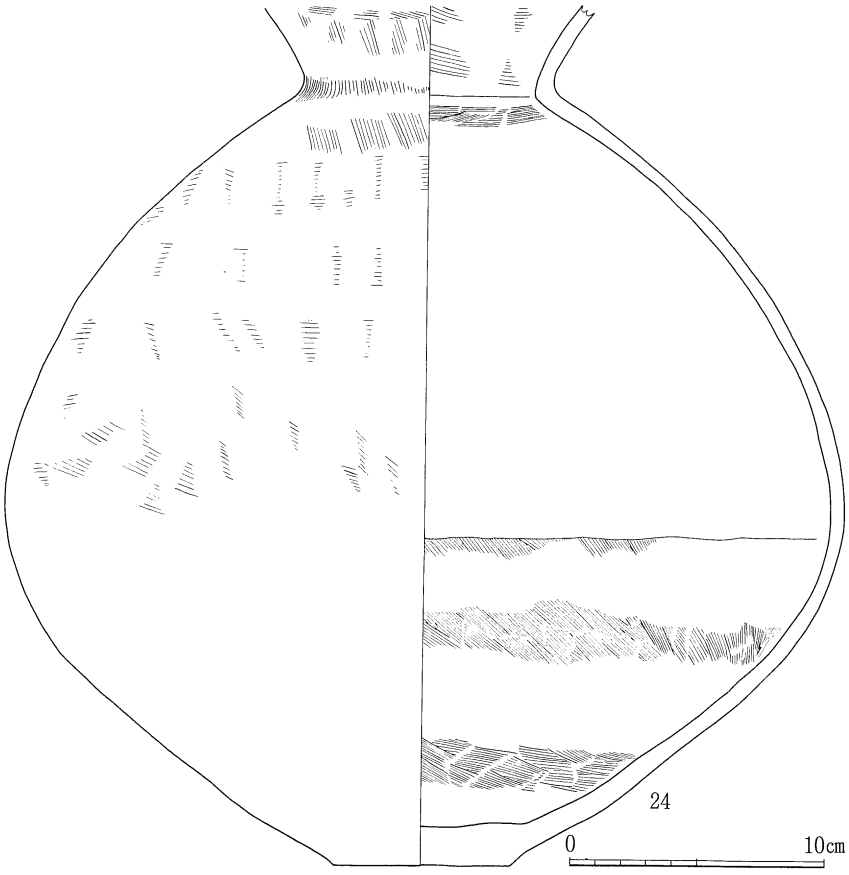
遺物の状況について触れる前に、ここで遺構の形態について補足しておく必要がある。今回の調査範囲に限定すると、この前方後方墳の前方部の形態についてはほとんど不明と言わざるをえない。しかし、前章でも触れた通り、今回の調査部分の北側がすでに調査されており、すでに報告済みである。この報告書（高橋「市原市姉崎東原遺跡」1990）で「020 土坑」として報告した遺構が、この前方後方墳の東側周溝の延長部分であることが、座標値の照合によって判明した（なお、同報告書には、座標値は記載していないが、今回の成果との結合結果については後段に掲載してあるので、参照されたい）。この土坑は南北方向に長い三角形を呈するものであり、南から東に行くに従って幅を減じ、最終的には丸く収まる。このことから、この前方後方墳の周溝は全周せず前方部北側が陸橋状に開放されているという特徴を加えることとなる。同時に前方部東辺長約15m、全長約33mという数値が得られる。

第36図　29号（前方後方墳）実測図

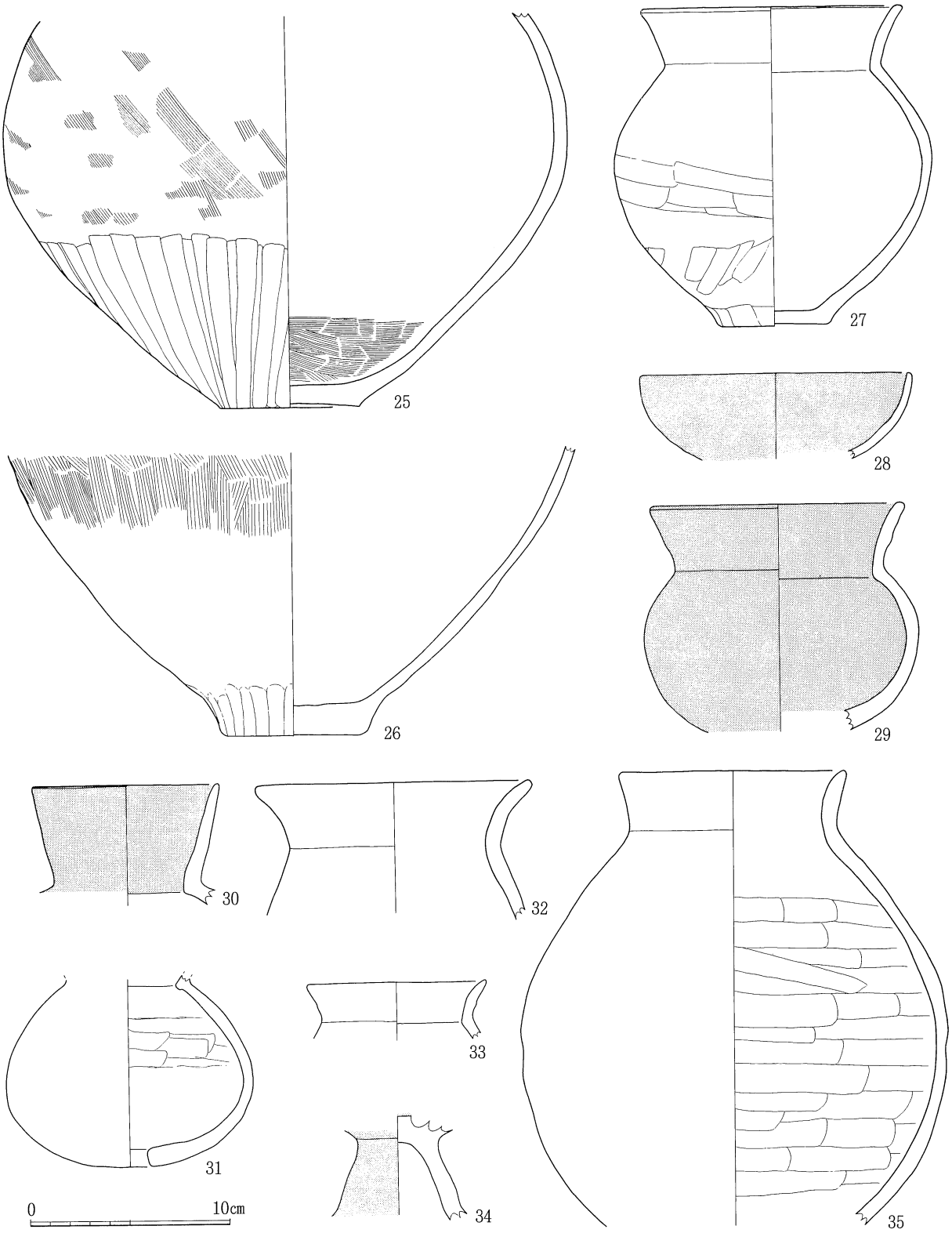


第37図　29号（墓）出土遺物実測図（1）

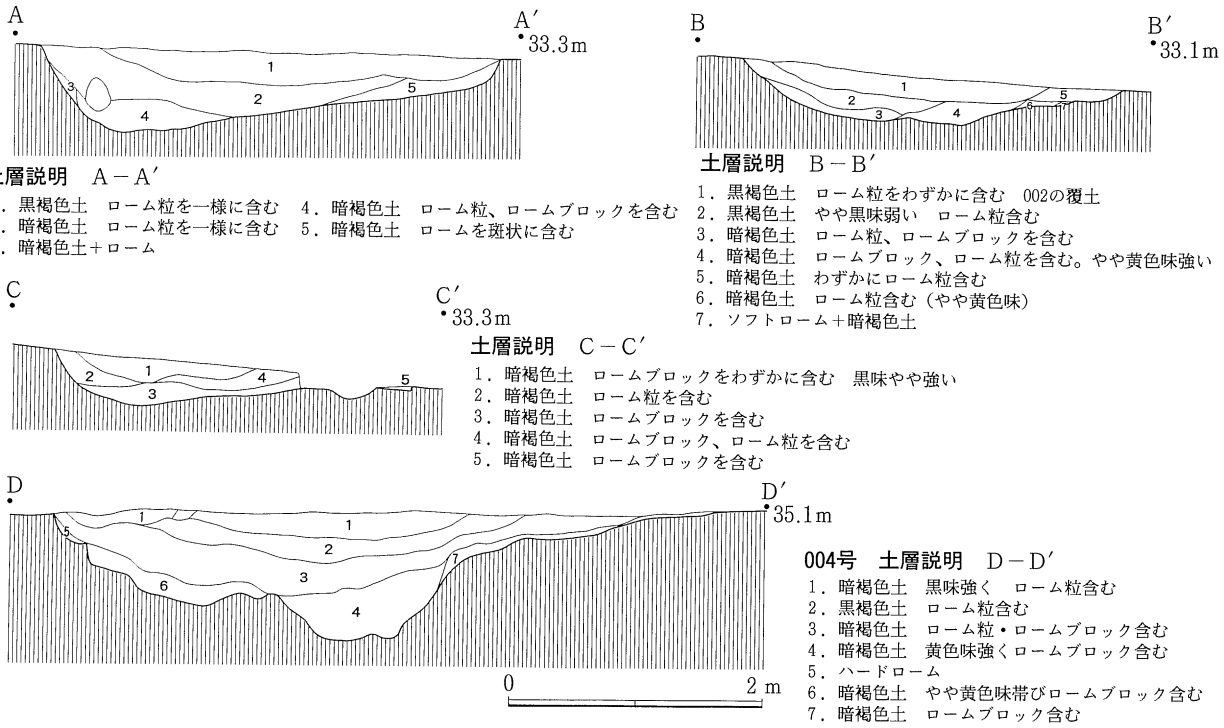




第38図　29号（墓）出土遺物実測図（２）



第39図　29号（墓）出土遺物実測図（3）



第40図　29号（墓）土層断面実測図

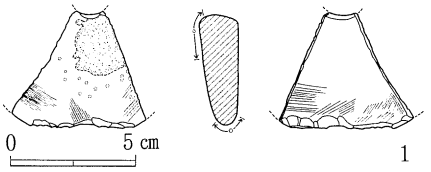
遺物は、37頁以降に掲載した通りである。小型丸底坩、小型器台、大型坩、二重口縁の底部穿孔土器、折り返し口縁の大型壺などの出土が認められた。焼成前底部穿孔土器については、完形品以外にも底部の出土が数点ある。これらはいずれも内面の調整に丁寧さを欠く感があり、焼成もやや甘いものが見受けられた。高坏については、やや良好な資料を欠くが、脚部に２孔一対の穿孔を持つ物が見られる。図の後段には、西くびれ部覆土上層出土の甕の資料等を掲載してある。

総体的に見て、古墳時代前期五領式の範疇で捉えられるものと考えている。そのなかでも、典型的な小型丸底坩を伴うこと等から、中位以降と位置づけられるのではないだろうか。なお、従来より本遺構のような前方後方墳には、いわゆる外来系の土器を伴うことが多いことが指摘されてきているが、ここでは、それらは見出されていない。東海系、畿内系いずれをも欠いてることも本遺構の特徴ということができよう。

典型的な前方後円墳に近接する点、明らかに古墳時代の所産であること、外来系の土器を欠くことなど、いわゆるこれまでの「出現期古墳」とは一線を画したものであると、判断される。

なお、これら派生する問題については、後章で若干ふれることとしたい。

右に示したのは、西くびれ部内側のほぼ中央の壁の上方から、壁に密着するような状態で出土した石製品である。本来円形を呈したものと思われ、中央には穿孔がなされている。ほぼ全面的に研磨されており、それは穿孔部についても同様である。中央から外周にかけて厚さを減じており、外周には刃部が作られている。表面には、擦痕・敲打痕等が見られ環状石斧と考えられる。



第41図　29号出土石製品

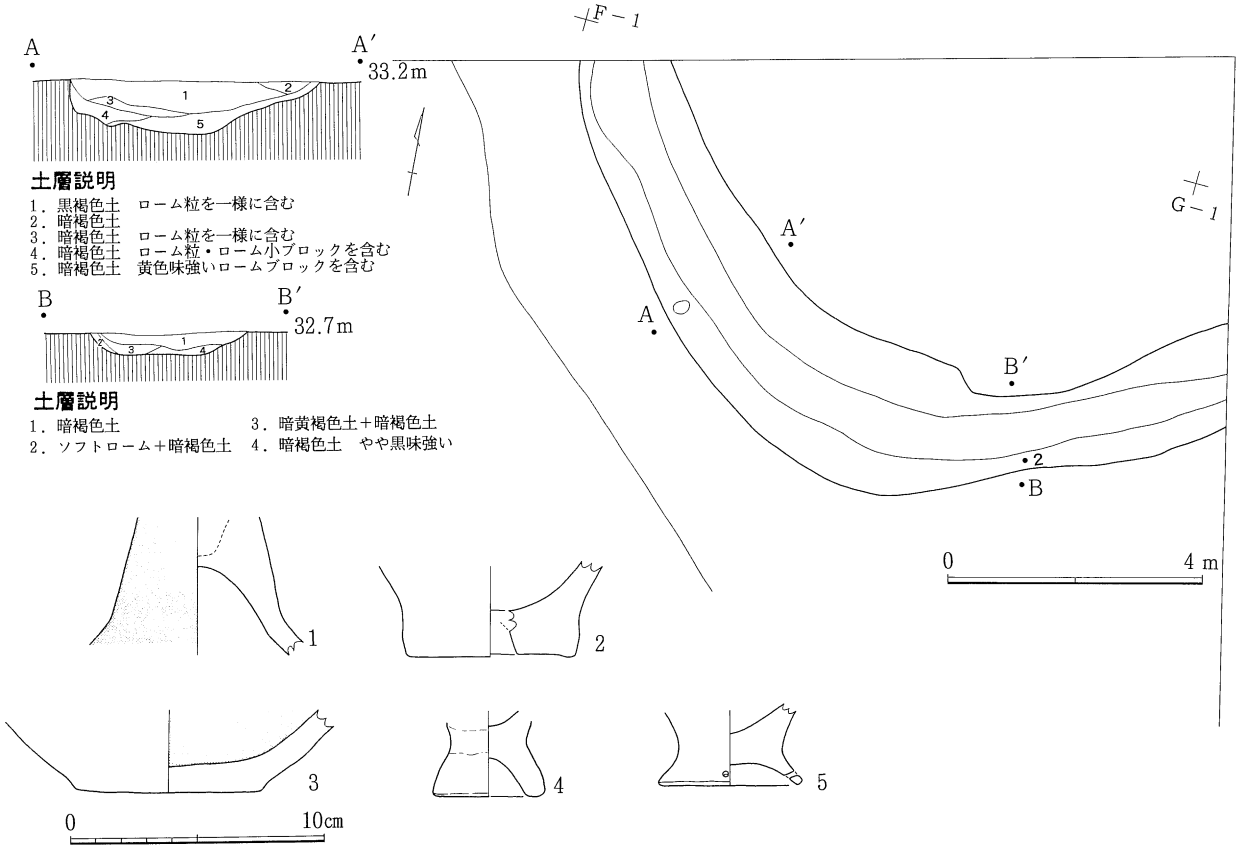
第21表　29号（墓）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	坩		口径 6.4 底径 2.0 器高 6.8 頸径 9.3	横位のナデ やや右下りのケズリ	横位のナデ 左傾したハケののち左傾したケズリ 縦位のケズリ 横位のケズリ 円周方向のケズリ	黒色粒子 白色粒子多く含む	良好	暗褐色	317	完形
2	大型坩		口径13.0 底径 5.3 器高28.5 頸径 7.0	縦位のミガキ 横位のナデ ハケ ハケのちナデ	横位のナデ 縦位のハケののち縦位のミガキ ミガキ ナデ	白色粒子 橙色粒子含む	良好	暗褐色～橙色	3,751	約1／2残存
3	壷		口径15.2 底径 6.3 器高19.5 頸径 6.0	横位のハケのち横位のミガキ ハケメ明瞭 横位のミガキ 輪積み痕あり	横位のナデ やや右下りのハケのち部分的に横位のミガキ やや左傾したハケ 縦位のハケ 右傾したハケのち横位のミガキ	白色粒子を含む	良好	明褐色	1,942	ほぼ完形 焼成前 底部穿孔
4	壷	口縁	口径18.8 頸径12.0	横位のハケのちナデ	ハケのちナデ	赤色粒子含む	甘い	橙～暗褐		
5	壷	口縁	口径19.4	横位のハケのち弱くナデ？	やや左傾したハケ 左傾したハケ	微砂粒多く含む	普通	暗褐		
6	壷（？）	口縁	口径15	横位のナデ	横位のナデ 縦位の弱いミガキ	赤色粒子やや目立つ	普通	内面　褐～淡褐 外面　淡褐～黒褐		
7	壺	頸部	口径 8.8 頸径 6.2			長石粒含む	甘い	橙		
8	壷	底	底径 6.1	ナデ	ナデ ハケメあり	白色粒子含む	普通	黒褐		焼成前 底部穿孔
9	壷	底	底径 5.6	ナデ	ハケのちナデ	白色粒子含む	普通	橙		焼成前 底部穿孔
10	壷	底	底径 6.0	ナデ	弱いミガキ わずかにハケメ残存	赤色粒子含む	やや甘い	褐～橙		焼成前 底部穿孔
11	壷	底	底径 5.8	横位のケズリ	縦位のハケののちナデ	白色粒子含む	良好	橙		焼成前 底部穿孔
12	壷	底	底径 6.0	ケズリ 横位のケズリ	ケズリ？	白色粒子含む	良好	暗褐～橙		焼成前 底部穿孔
13	器台	脚	底径 9.7	ナデ 一部に横位のケズリ痕	縦位のミガキ？ 赤彩（？） 一部残存	黒色粒子 白色骨針含む	良好	橙～暗褐～黒褐		黒斑あり 脚部円孔は二孔一対×3
14	高杯	脚			横位ナデ 縦位のミガキ？	やや砂粒多い	普通	橙		整形は全体に不明瞭 脚部円孔は二孔一対×3
15	器台	脚	底径 7.7	粗い整形 横位のナデ	縦位のミガキ（光沢あり）	黒色粒子わずかに含む	良好	橙		
16	高杯(?)	脚		ナデ	ミガキ	赤色粒子やや多い	普通	暗褐～黒褐		
17	不明	底		ナデ	ナデ	白色粒子わずかに含む	普通	内面　黒褐 外面　暗褐		
18	壷（？）	胴		横位のナデ	横位のケズリ	微砂粒多い	普通	内面　橙～明褐 外面　暗褐		
19	器台		口径11.3 底径12.4 器高12.0 頸径 6.2	横位のナデ 荒いナデつけ 脚部内面下半横位のケズリ	ナデ 部分的にケズリ明瞭	赤色粒子多い	普通	内面　黒褐色 外面　橙色		脚部完存
20	甕	上半	口径 8.8 頸径 8.5	横位のナデ やや雑な整形 横位のナデ	横位のナデ	比較的精良	普通	内面　橙～黒褐 外面　淡褐		

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
21	高坏(?)	上半	口径 9.9	ナデ	横位のナデ（弱いミガキかも）	赤色粒子やや目立つ	普通	内面　淡褐 外面　淡褐～暗褐	134	
22	鉢（？）	上半	口径10	縦位のミガキ ハケ？	平坦な部分と丸い部分がある ハケのちミガキ	雲母粒わずかに含む	良好	暗褐～黒褐	172	
23	壷		口径12.5 底径 7.2 器高33.1 頸径 9.7	横位のミガキ ナデ	横位のナデ ハケののちミガキ ハケののち縦位ミガキ	微砂粒 黒色粒子含む	良好	暗褐	9,239	口縁1/4残 胴部はほぼ完形に復元 胴部ほぼ中央が放射状に割れている→加撃による破壊と考えられる
24	壷		底径 6.9 頸径 9.9	ハケのちナデ	胴部上半ハケのちミガキ 胴部下半ミガキ	黒色粒子含む	良好	内面　暗灰色 外面　暗褐～褐～橙	14,674	口縁以外ほぼ完形
25	壷	下半	底径 7.0	ナデ ハケ	ハケのちミガキ ケズリ	白色粒子含む	良好	暗赤褐～黒褐	7,627	
26	壷	下半	底径 6.6	ナデ	縦位のハケミガキ ハケの上をミガキ（痕跡比較的明瞭）	白色粒子やや目立つ 小礫含む	普通	暗赤褐～暗褐（赤彩ではない）		
27	甕		口径13.0 底径 5.1 器高16.0 頸径10.5	横位のミガキ ミガキ	横位のナデのち横位のミガキ 縦位のミガキ 横位のケズリ やや右傾したケズリ（部分的） 横位のケズリ 外面器表剥落あり 黒斑あり	砂粒やや多く含む	良好	明褐色	1,686	ほぼ完形
28	坏	上半	口径13.4	横位のナデ	横位のナデ 一部に黒斑	白色骨針やや目立つ	良好	内外面とも赤彩	403	
29	甕		口径12.6 頸径10.5	縦位のミガキ	縦位のミガキ 黒斑あり			全面赤彩	1,050	底以外ほぼ完形
30	壷	口縁	口径 9.3 頸径 7.4	横位のナデ 指頭による押圧	横位のナデ	白色骨針含む	良好	内面　赤彩 暗褐 外面　赤彩		
31	壷	下半	底径 2.1	横位のケズリ 横位のナデ	全面丁寧なナデ 一部に縦位のミガキ	白色骨針含む 黒色粒子含む	やや甘い	橙		
32	甕	上半	口径13.7 頸径 9.9	横位のナデ（回転台使用？） ナデ	横位のナデ（回転台使用？） 左傾したケズリ 横位のケズリ	白色粒子やや目立つ	普通	橙～暗褐		
33	甕	口縁	口径 8.8 頸径 7.6	横位のナデ	横位のナデ	黒色粒子やや目立つ	普通	内面　暗褐 外面　暗褐～黒褐		
34	高坏	脚		横位のナデ	横位のナデ 縦位の弱い面取りあり	白色骨針質やや目立つ 全体にやや砂質	良好	内面　暗褐 外面　赤彩		
35	甕		口径11.2	横位のナデ 横位のケズリ	横位のナデ（回転台使用） 横位のケズリ のちナデ	砂っぽい 赤褐色粒子含む 白色粒子含む	普通	橙～暗褐	4,740	底以外ほぼ完形

30号（円墳）

調査区の北東隅部分において検出された。周溝の約1/4部分の調査となった。北側の延長部分は、前回の調査区側に延び、前回報告した 015(溝）につながるものと思われる。直径約12ｍの円墳になることになる。ただし、形態的には、正円からは程遠い感がある。盛り土の残存は認められず、主部も検出されなかった。



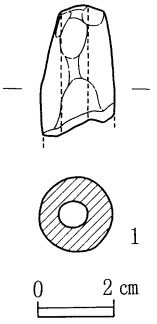
第42図　30号（墓）実測図および出土遺物実測図

第22表　30号（墓）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	高坏	脚				白色粒子 白色骨針わずかに含む	普通	内面　暗褐～黒褐 外面　赤彩		
2	壷（?）	底	底径 6.4	ナデ？（不明瞭）	縦位のナデ（ミガキ？）	白色粒子 小礫含む	普通	内面　褐 外面　暗褐		
3	鉢	底	底径 7.3	ナデ	横位のミガキ	白色粒子・暗褐色粒子わずかに含む	普通	内面　赤彩 外面　褐～暗褐		
4	不明	脚		ナデ 粗いナデ	横位のナデ	白色粒子やや目立つ 小礫含む	普通	淡褐～黒褐		
5	不明	脚		ナデ（やや光沢あり） 円方向のケズリ ナデ	縦位のナデ 横位のナデ	白色粒子・赤褐色粒子わずかに含む	良好	内面　明褐 外面　灰褐～黒褐		

遺物は、いずれも周溝内からの出土であり、とくに良好な状態で出土したものはなかった。１の高坏脚部は、栓状の接合部を明瞭に残すものである。ほかに底部資料が数点検出されたが、あきらかに本円墳に伴うと判断しうるものではない。

前回の、北側の調査に際して検出された円墳（001)と今回のこの円墳とを合わせて２基の円墳が検出されたことになるが、いずれについても、年代の決め手を欠いている前回の円墳については、天神山古墳と極めて隣接し、今回の円墳は前方後方墳に隣接する位置に築造されている。これが、偶然の一致であるか、あるいはある種の階層性反映であるかは、どちらとも決し難いところであるが、興味深い現象ではある。



第43図　30号出土管状土錘

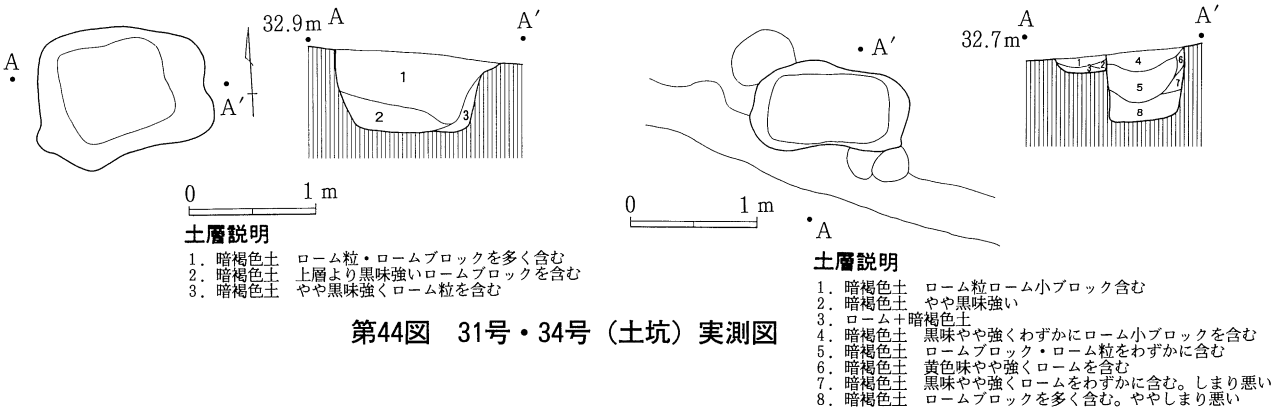
なお、前頁右下に図示したのは、周溝出土の管状土錘である。残存部で、長さ2.5cm、幅2.0cm、孔径0.7cmを計る。

３）土坑

31号（土坑）

６号（住居）の東で検出された。１辺約１ｍのやや歪んだ方形を呈する。確認面から底までの深さは約１ｍである。上端より下方に行くに従って幅を減少する。また、上端よりも下端の方が、平面形が整っている感がある。

この土坑からは図示するに足る遺物の出土は認められなかった。

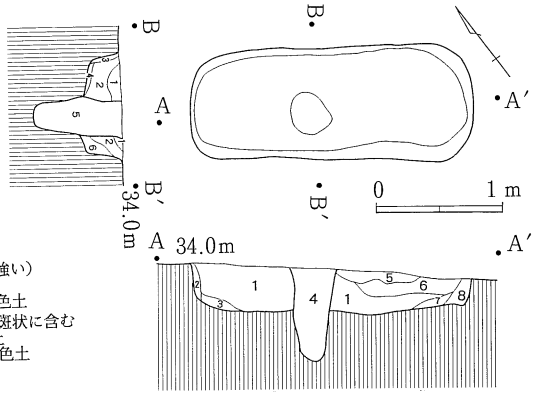


第44図　31号・34号（土坑）実測図

32号（土坑）

７号（住居）の北西に位置する。長方形の平面形を呈し、長軸を北西にもつ。全長は約３ｍ、幅は約80cmを計り、確認面からの深さは約70cmであった。当初は、単独の土壙墓とも考えられたが、覆土断面にはそれを思わせる堆積は認められず、一時に埋め戻されたと考えられるものであり、土壙墓とは認めがたいものである。

また、この土坑からは図示するに足る遺物の出土は認められなかった。



土層説明

1. 暗褐色土（やや黒味強い）
2. 暗褐色土
3. ソフトローム＋暗褐色土
4. 暗褐色土　ロームを斑状に含む
5. 暗褐色土　Pitの覆土
6. ソフトローム＋暗褐色土

土層説明

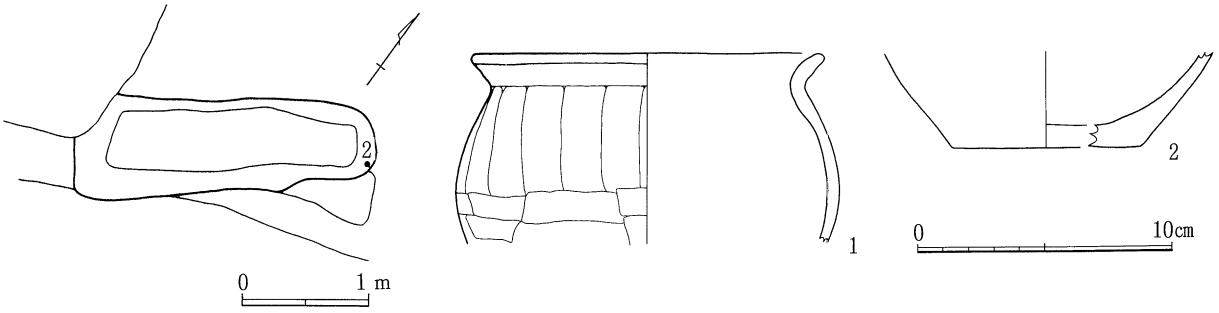
1. 暗褐色土　わずかにローム粒含む
2. ソフトローム＋暗褐色土
3. 暗褐色土　ロームを斑状に含む
4. 暗褐色土　ローム小ブロックを含む。Pitの覆土
5. 暗褐色土　やや黒味強い
6. 暗褐色土　灰褐の斑顕著
7. 暗褐色土　ロームを斑状に含む
8. ソフトローム＋暗褐色土

第45図　32号（土坑）実測図

33号（土坑）

調査区の南限東寄りの部分で検出された。長軸を東北東にもつ、長方形を呈する。長さ約 2.5m、幅約1m、確認面からの深さ約80cmを計る。なお、西端は、ごみ穴により切られている。この土坑の覆土上層において図示したような遺物が出土しているが、覆土中あるいは底面からの遺物の出土は認められなかった。

この覆土上層から出土した遺物は図示した通りである。1は甕の口縁部、2は甕の底部と考えられる。1は古墳時代後期の所産であろうか。頸部は「く」の字状を呈し、外面のケズリ痕も比較的顕著である。胴部はやや球形を呈する。2に関しては、明瞭な整形痕も認められず、帰属時期等不明でであるが、1と同時期の所産と考えておきたい。1に類似する遺物の出土は、今回の調査では認められておらず、どのような過程を経てここに到ったか、不明と言わざるをえない。ただし、近隣に類似する時期の遺構が存在する可能性を示唆しているものとは考えておきたい。



第46図　33号（土坑）実測図および出土遺物実測図

第23表　33号（土坑）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	甕	上半	口径13.7 頸径12.7	横位のナデ	横位のナデ 縦位のケズリ 横位のケズリ	微砂粒多い	良好	暗褐		
2	壷（?）	底	底径7.3	横位のナデ 横位のケズリ	横位のケズリ ケズリ	微砂粒目立つ	良好	暗褐色		

34号（土坑）

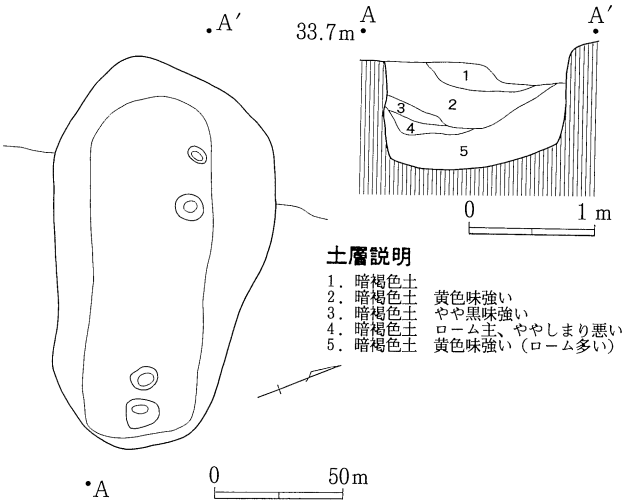
上に述べた33号の西に位置する。33号同様東北東に長軸をもつ。斜面に平行するところから、地形に規制された結果、類似する方向を向いたものとも考えられる。長さ約1.2m、幅約80cmを計り、確認面からの深さは約50cmであった。

この土坑からは、図示するに足る遺物の出土はなかった。

35号（土坑）

24号(住居)の北西隅で検出された。この土坑の覆土上に24号の床がのっており、覆土も褐色味が強く、古そうな感があり、縄文時代の陥し穴と考えられる。長さ約１ｍ、幅約80㎝、確認面からの深さ約１ｍを計る。底面には非常に浅いピット状の窪みが不規則な配置で認められたにすぎず、刺突具を立てておいたような痕跡は検出されなかった。

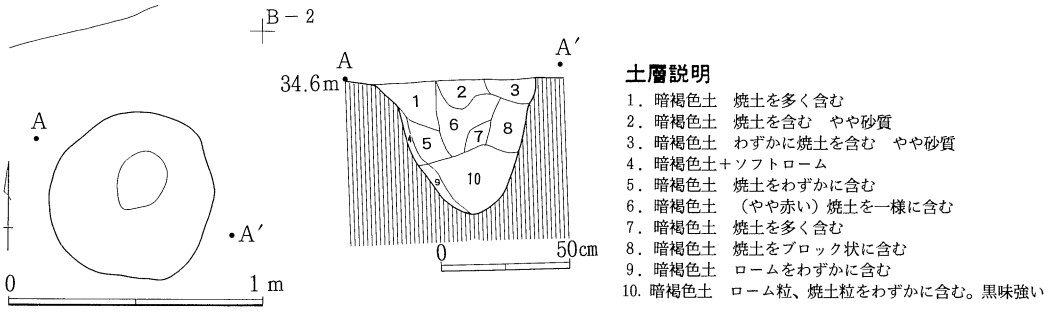
この土坑からは図示するに足る遺物の出土はなかった。



第47図　35号（土坑）実測図

36号（土坑）

調査区の北限、西寄りの部分で検出された。円形を呈するものである。直径約60㎝、深さ約60㎝を計る。覆土上面で土器の破片がややまとまって出土したが、やや大型の甕の胴部であり、径および傾きの復元が不可能であったので図示しえなかった。また、覆土中に焼土がやや集中して堆積しているのが認められたが、遺構本体には酸化した部分は認められなかった。



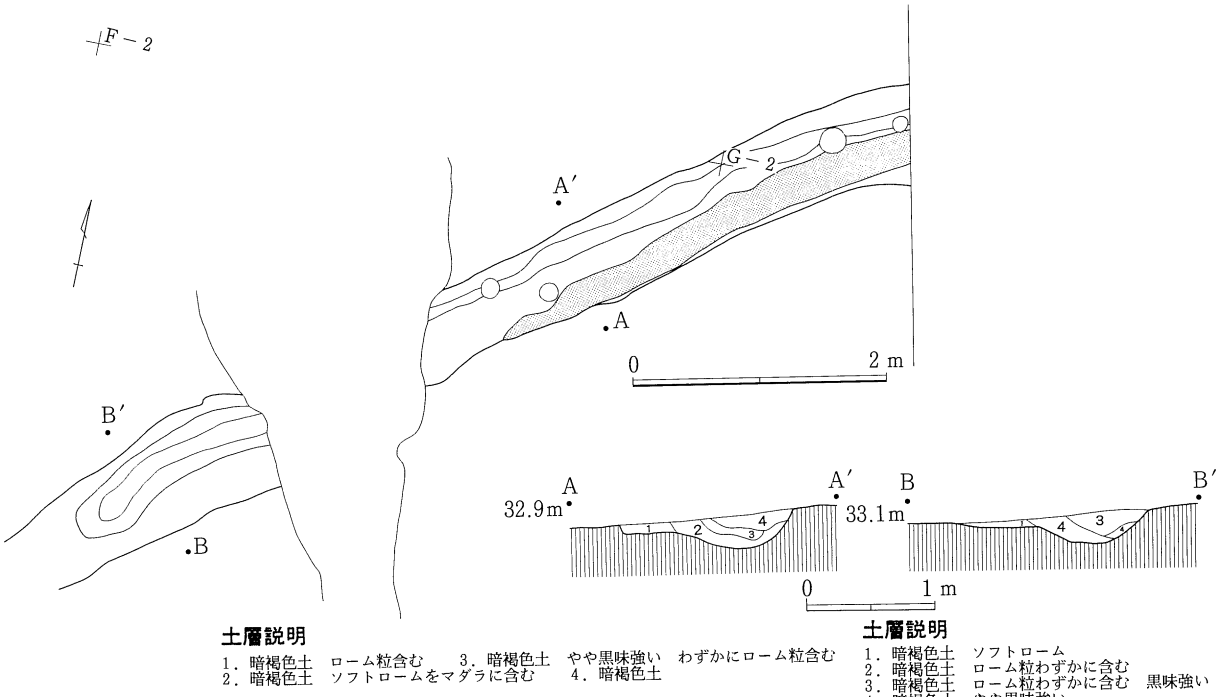
第48図　36号（土坑）実測図

４）溝・道

37号（道）

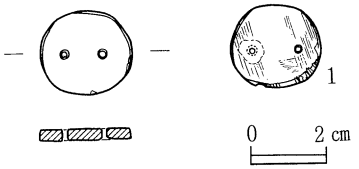
調査区の東限ほぼ中央から南西に向かって延び、29号の周溝を切って、29号の後方部南東隅北側の部分にいたるまで漸次底面レベルを高めつつ消滅する。底面には硬化面が認められ、道としての機能が考えられる。ただし、一旦掘り下げたことは明白であるので、当初は何らかの区画を意図したものであった可能性もある。また、29号の後方部の地山にまで底面が達しているところから、この道が通っている時点においては、すでに29号の墳丘は削平されていた可能性もある。

この遺構の時期を推定するにたる良好な遺物の出土は認められなかったが、おそらく近世以降の所産と考えられる陶器片等の出土があった。しかし、図示するに足るものではなかった。



第49図　37号（溝）実測図

右に図示したのは、この37号の覆土から出土した緑泥片岩製の双孔円盤である。縦2.1cm、横2.3cm、厚さ3cmを計り、孔間は1.0cmである。本来帰属する遺構については現状では不明である。近隣に当該　時期の遺構が存在する可能性を示唆するものである。今後の周辺の資料の増加を待ちたい。

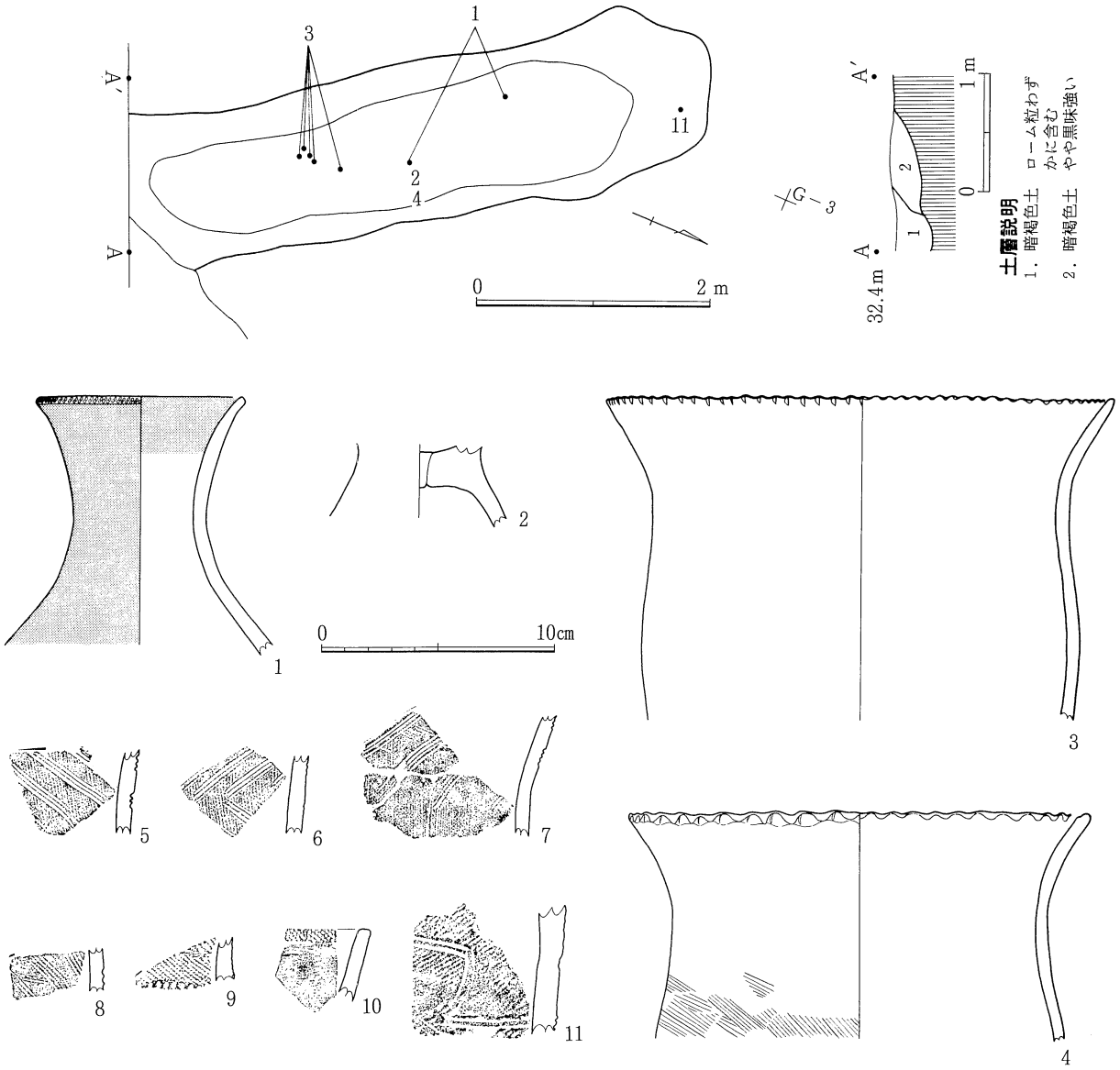


第50図　37号出土石製品

38号（溝）

調査区の南東隅よりやや西の地点で検出された。南側については調査範囲外に延びている。調査範囲内では、長さ約５ｍ、幅約 1.2ｍ、深さ約50cmを計る。この溝からは、のちに見るように、弥生時代中期宮ノ台式の土器がまとまって出土し、他の時期のものはほとんど見られなかった。そのため方形周溝墓の一辺かとも思われたが、周辺にはこれと組になるような溝は検出されなかった。また、集落を区画するような溝とも捉え難いものであり、ここでは単独の溝として扱っておく。

遺物は図示したようなものが、出土している。いずれもが溝の覆土中からの出土であり、底面に接するような出土状況を示すものはない。１は壺の口縁部である。頸部には文様は見られず、口唇部直下に細く縄文が巡らされる。２は高坏の接合部であり、栓状の接合箇所が見られる。３・４は甕の口縁部から胴部にかけてである。何れも口縁部には指頭または爪による押圧が巡らされている。胴部は双方とも曲線的な形態を示している。後期に近い段階の所産と思われる。５以降には破片資料を集めた。羽状の沈線文をもつものが比較的多く見られる。なお、11については、縄文時代後期堀ノ内式の範疇で捉えられるものであろう。



第51図　38号（溝）実測図および出土遺物実測図

第24表　38号（溝）出土土器観察表

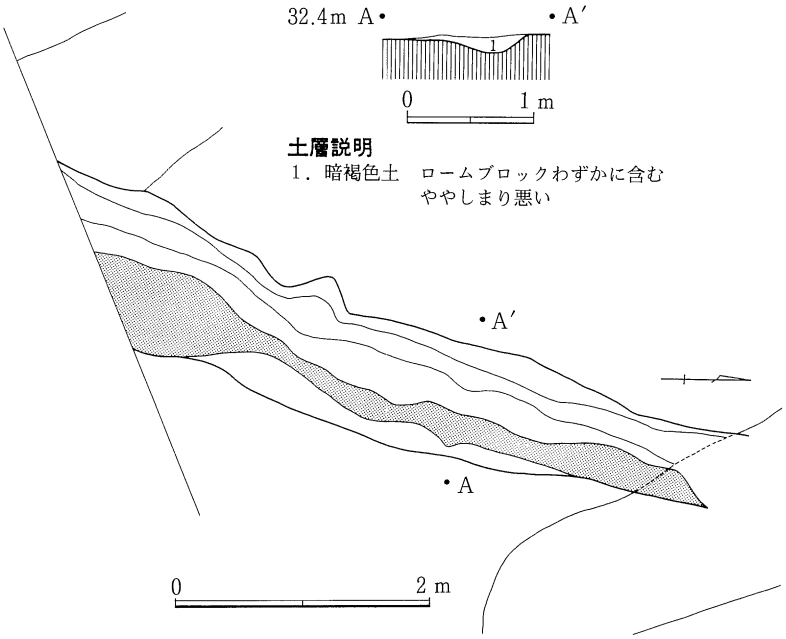
No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壷	上半	口径8.7 頸径5.7	縦位のナデ	縦位のミガキ	黒色粒子やや目立つ	普通	赤彩、淡褐色		
2	高坏	脚		荒い整形	ハケのち左傾したミガキ	白色骨針含む	良好	褐		
3	甕	上半	口径21.6 頸径18.0	横位のナデ ナデ（部分的に光沢あり）	やや右下りの横位の径痕 左傾した条痕	全体にやや砂質 白色粒子やや目立つ	やや甘い	内面　褐 外面　褐～暗褐		
4	甕	上半	口径19.6	横位のケズリ ナデが及んでいる部分あり 縦位のナデ	横位のナデ ハケ	全体にやや砂質 白色粒子が目立つ	やや甘い	淡褐～黒褐		

39号（道）

調査区の南東隅、38号と南端を重複して検出された。北東方向に延び、北端は7号（住居）の覆土上にかかっている。全体に硬化面が形成されており、段状を呈する部分もあって、掘り返しが行われたと考えられる。

台地の縁を通っており、最近まで使われていた道であるかもしれない。

確認面からの掘り込みも浅く良好な遺物の出土は認められなかった。

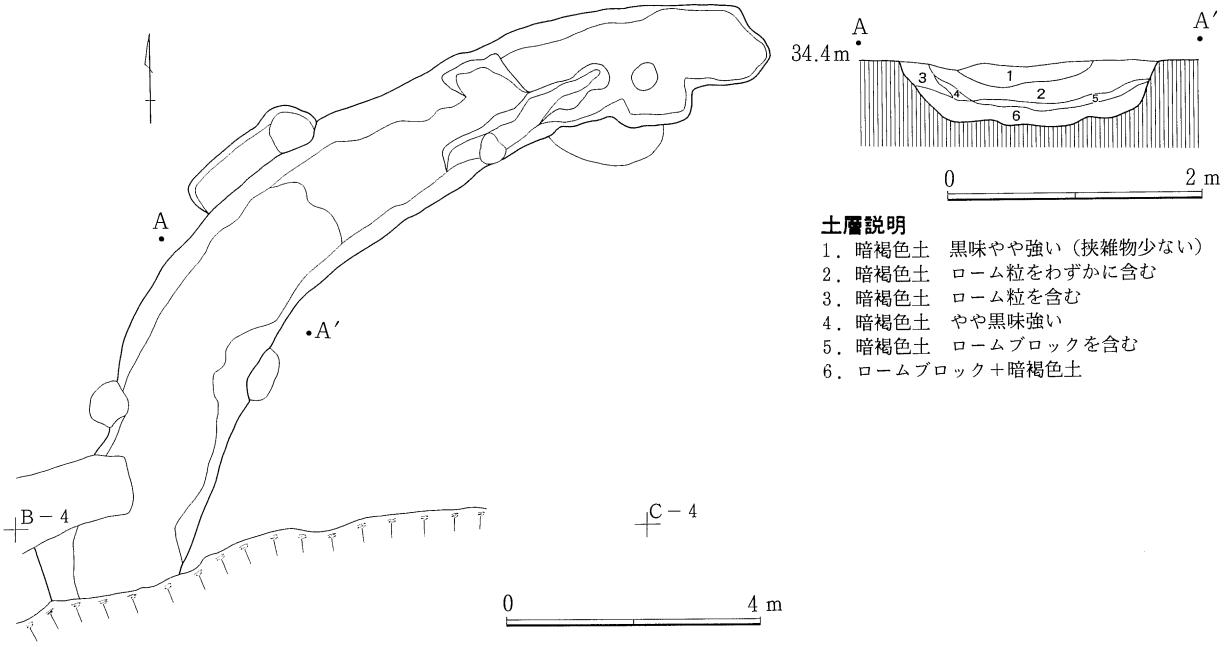


第52図　39号（溝）実測図

40号（溝）

調査区の中央よりやや西の部分で検出された。全体に弧状を呈する。南端の部分は台地整形の際に切られている。残存部で約14mであった。東から西向きに延び次第に南へとゆるやかな曲線を描いている。当初は、墳墓の周溝かと思われたが、全周せず、また組になるような溝も検出されなかったところから、単独の溝として扱った。

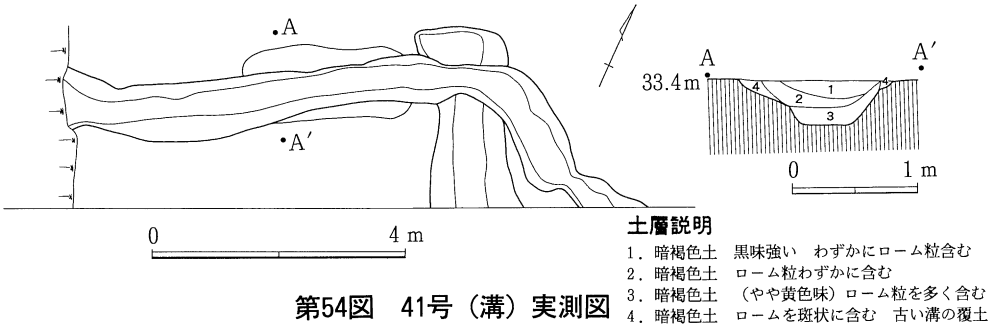
覆土中からは、多くの破片資料が出土しているが、遺構の時期等を想定させるようなものは認められなかった。



第53図　40号（溝）実測図

41号（溝）

調査区の南限、中央よりやや西に寄った部分で検出された。断面形は逆台形を呈し、西端は台地整形部により切られている。東の部分では、一部溝の重複があり、表土除去段階では方形周溝墓の南辺かとも思われたが、調査の結果やや弧状を呈する溝であると判断するに至った。覆土中あるいは底面には、特に硬化した面は検出されておらず、道とは考え難い。



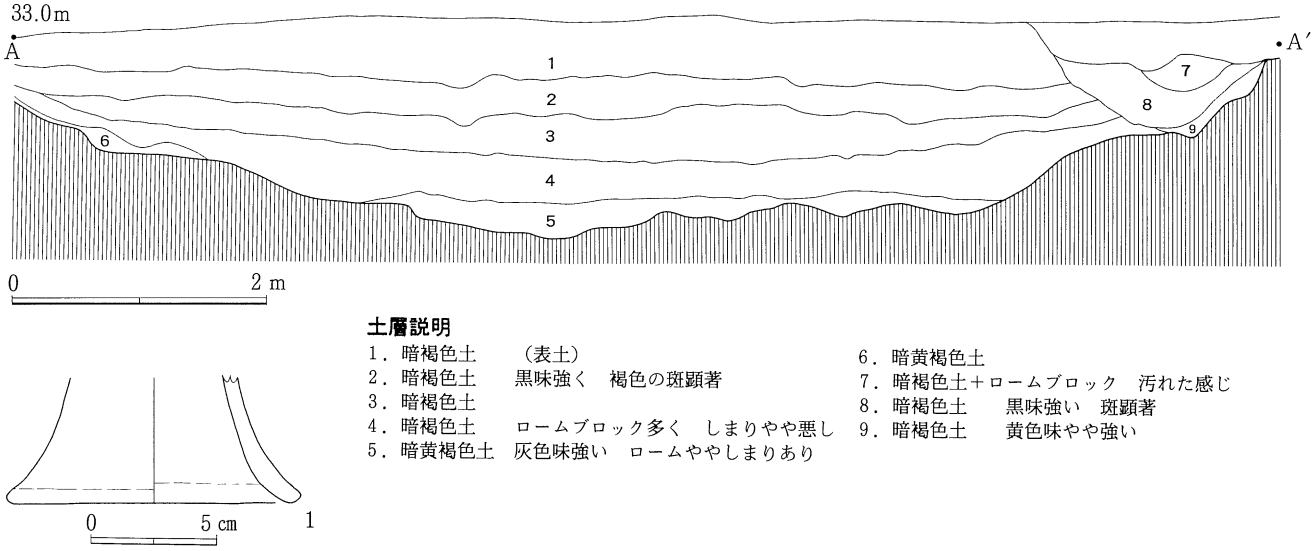
第54図　41号（溝）実測図

なお、覆土からはわずかに土器の破片礫等の出土が認められたが、図示には至らなかった。

42号（台地整形部）

調査区の南西部分は、調査前より一段下がっていた。今回の調査ではこの部分についても、表土を除去したが、その結果南源限部分についても新たな落ち込みが検出された。調査前より明らかであった、段状の部分と新たに検出された段状の部分をここでは一体の物として捉え、一括して台地整形部として扱う。

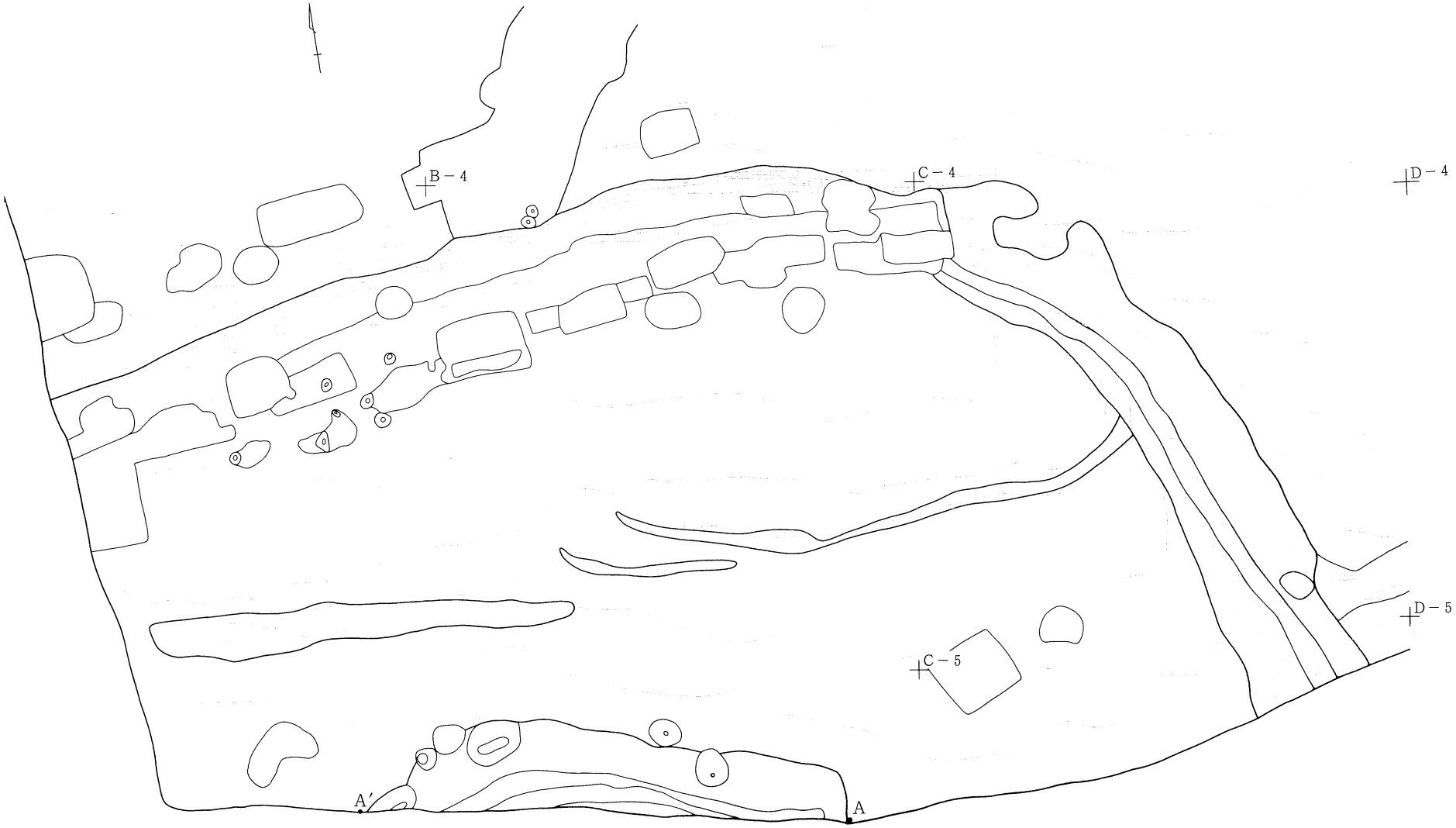
今回の調査範囲の外周にあたる台地の斜面には、犬走り状の平坦面が見られる。本遺跡を含む一体に戦国期の城郭があったとも想定される所以である。今回検出された台地整形部は、かかる痕跡と有機的関係を有するものであると考えられる。



第55図　42号（台地整形）実測図および出土遺物実測図

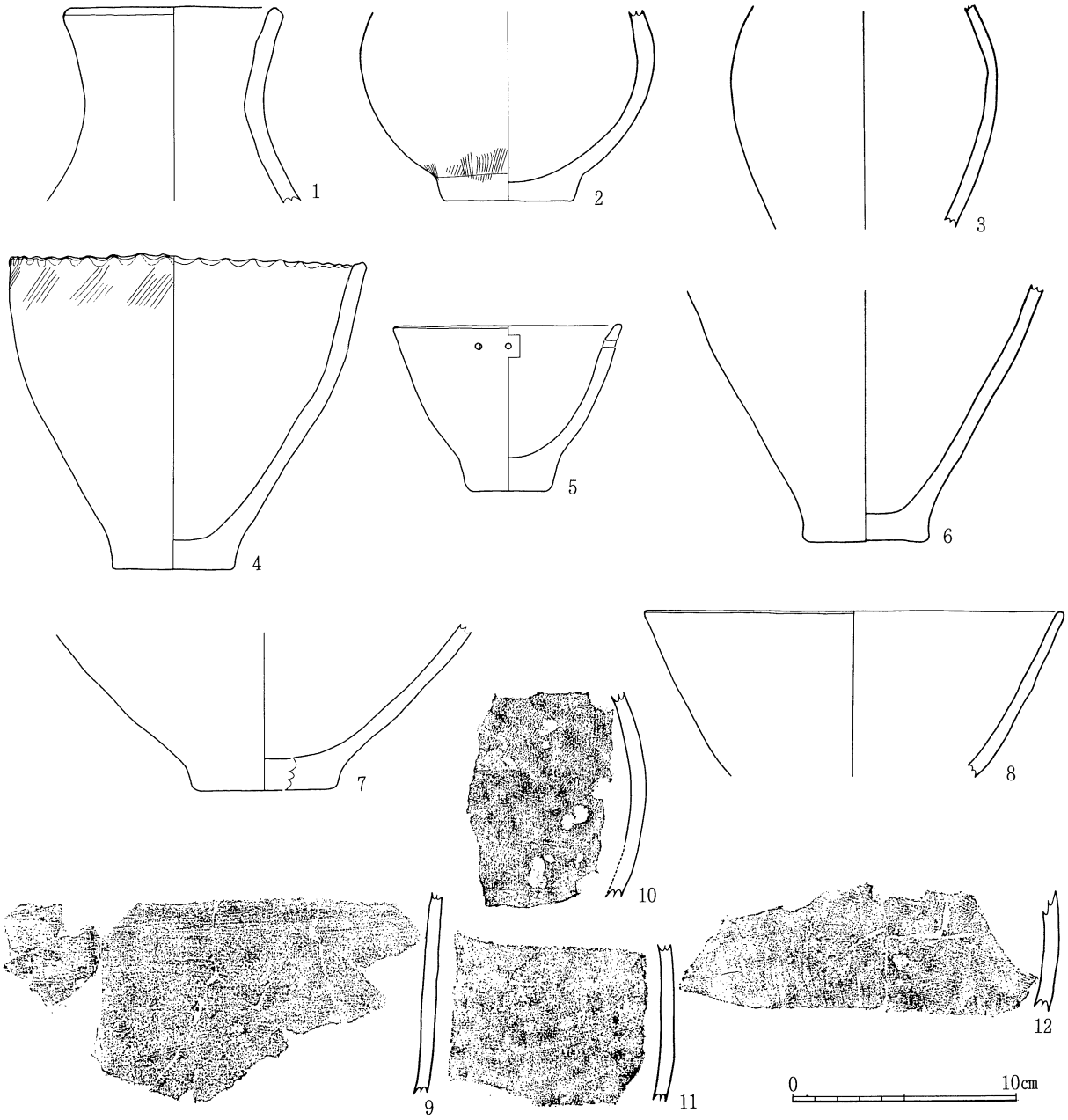
第25表　42号（台地整形）出土土器観察表

No.	器種	部位	法量	技法		胎土	焼成	色調	容量	備考
				内面	外面					
1	高坏	脚	底径11	左下がりのケズリ（ナデ） 横位のケズリ 横位のナデ	縦位のナデ 横位のナデ	赤褐色粒含む	良好	内面　明褐 外面　明褐～黒褐		



第56図　42号（台地整形部）実測図

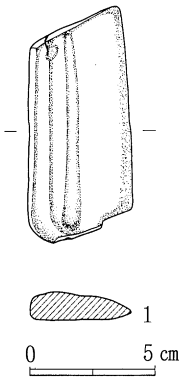
この土地の改変の時期については、不明であり、図示した遺物もこの台地整形との関係で位置づけられるものではない。当初の予定では、今回の調査区の北東の台地上と斜面部をＣ地点として調査することとなっていたが、諸般の事情により現段階では未着手である。したがって、この台地整形の性格については、当分その位置づけは保留しておきたい。



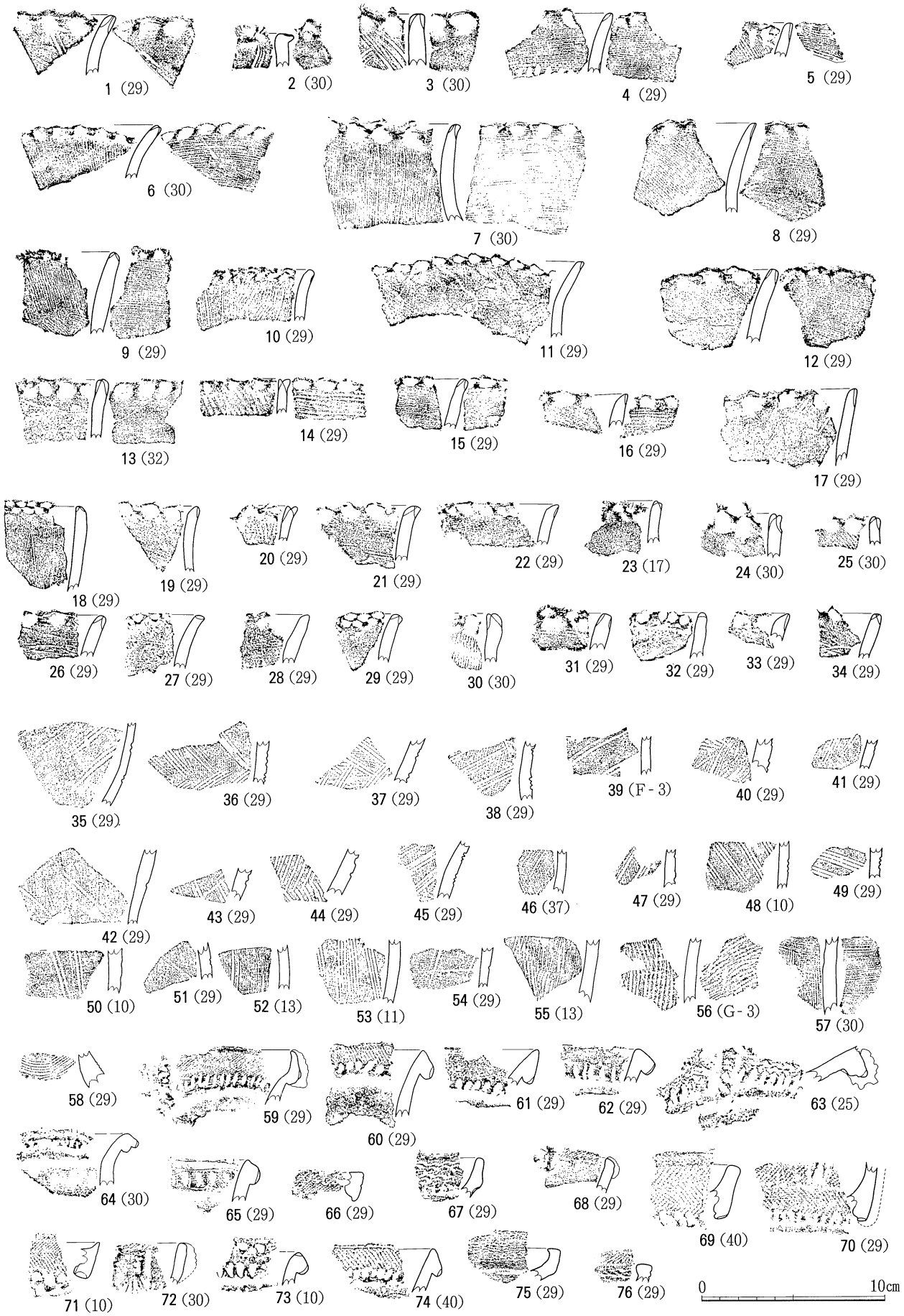
第57図　Ｄ－３区出土遺物実測図

第26表　D－3区出土土器観察表

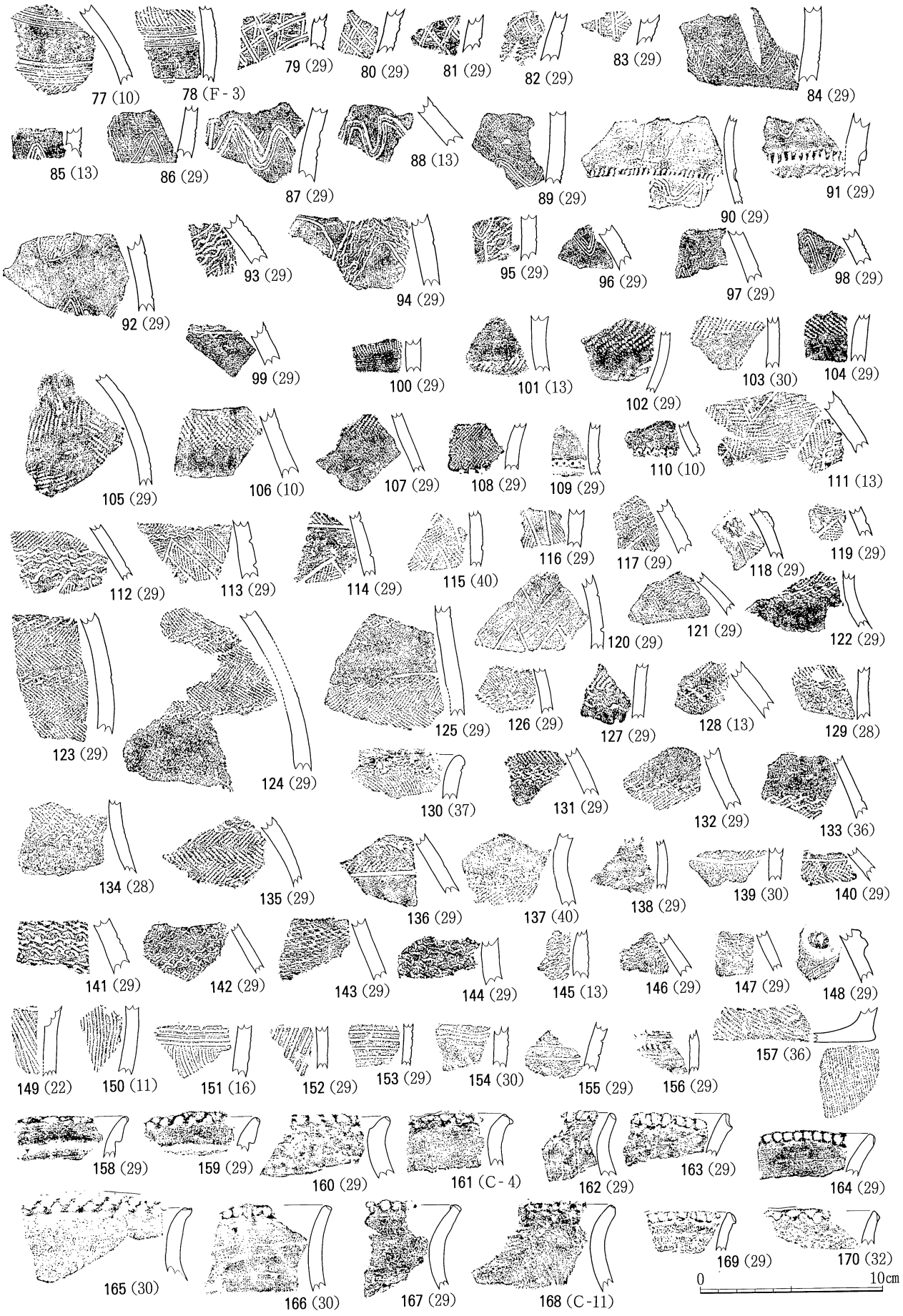
No.	器種	部位	法量	技法 内面	技法 外面	胎土	焼成	色調	容量	備考
1	壷	頸	口径 9.4 頸径 8.0	横位のナデ	波状の横位のケズリ	やや砂っぽい 白色粒子含む	やや甘い	内面　暗褐 外面　淡褐～褐		
2	壷	下半	底径 5.7	ナデ	横位のナデ（一部ハケを残す） 縦位のハケ	白色粒子目だつ	良好	暗褐	682	
3	壷	胴		横位のナデ	縦位のミガキ	白色骨針含む	普通	内面　黒褐 外面　明褐～黒褐		
4	甕		口径15.9 底径 5.0 器高14.0	ナデのち部分的にミガキ	右傾したハケ 縦位のナデ	白色骨針わずかに含む	やや甘い	灰褐～黒褐	1,260	ほぼ完形
5	甕		口径10.2 底径 3.5 器高 7.4	ナデ	横位のナデ 縦位のナデ	小礫わずかに含む 白色粒子含む	普通	暗褐色	219	ほぼ完形
6	甕	下半	底径 4.5	ナデ 整形不明瞭	横位のナデ 縦位のミガキ 一部に左傾したハケ残す 横位のナデ（ケズリ?）	小礫含む	やや甘い	内面　褐～黒褐 外面　暗褐	815	
7	壷（?）	下半	底径 5.6	ナデ	外面整形不明瞭（ナデか）	小礫やや目立つ	良好	外面　暗褐 内面　灰褐	730	
8	高杯(?)	上半	口径18.8	横位のケズリのちナデ	右下りのナデ	白色骨針含む	やや甘い	内面　暗褐～黒褐 外面　明褐～暗褐		



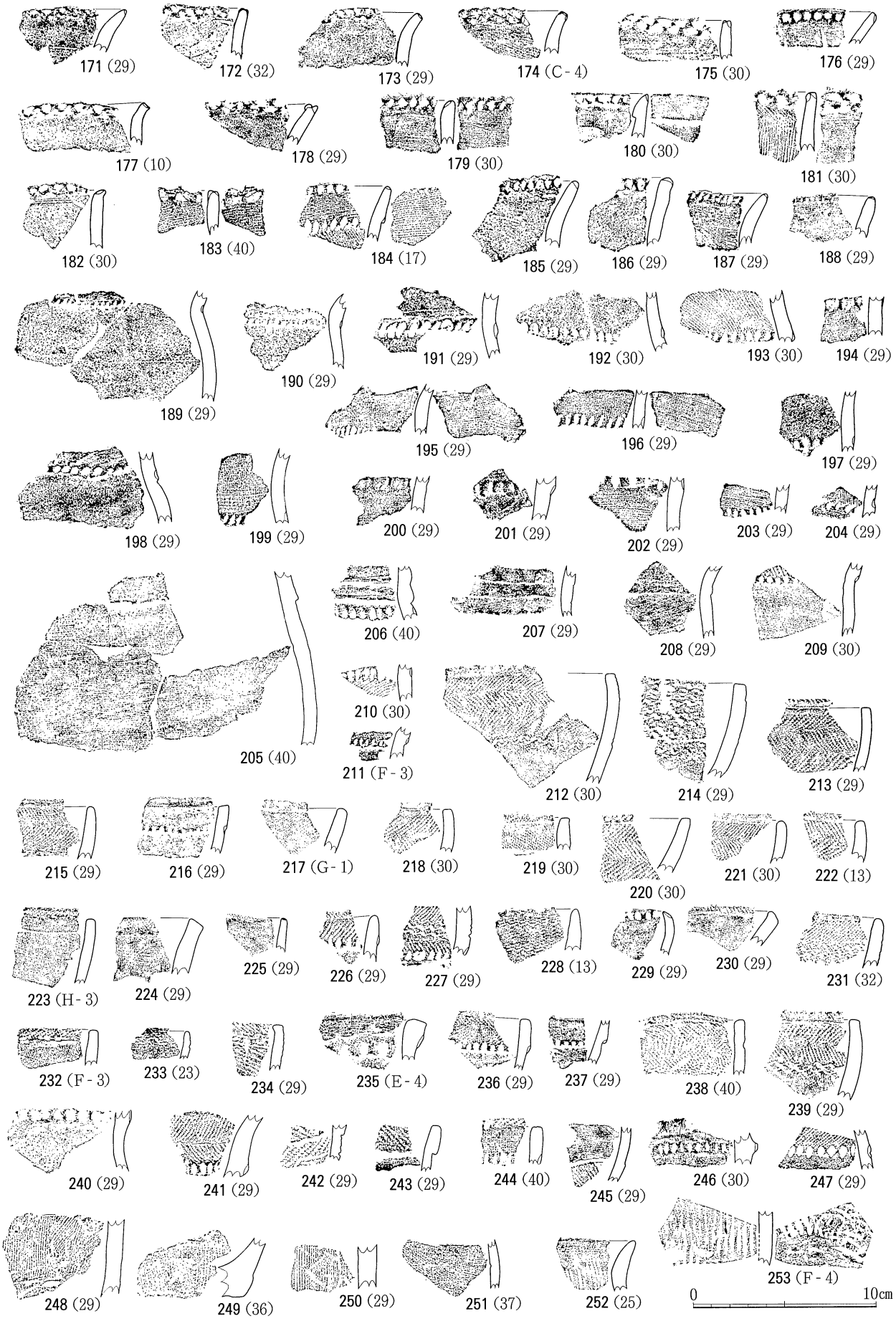
第58図　D－3地区出土石製品



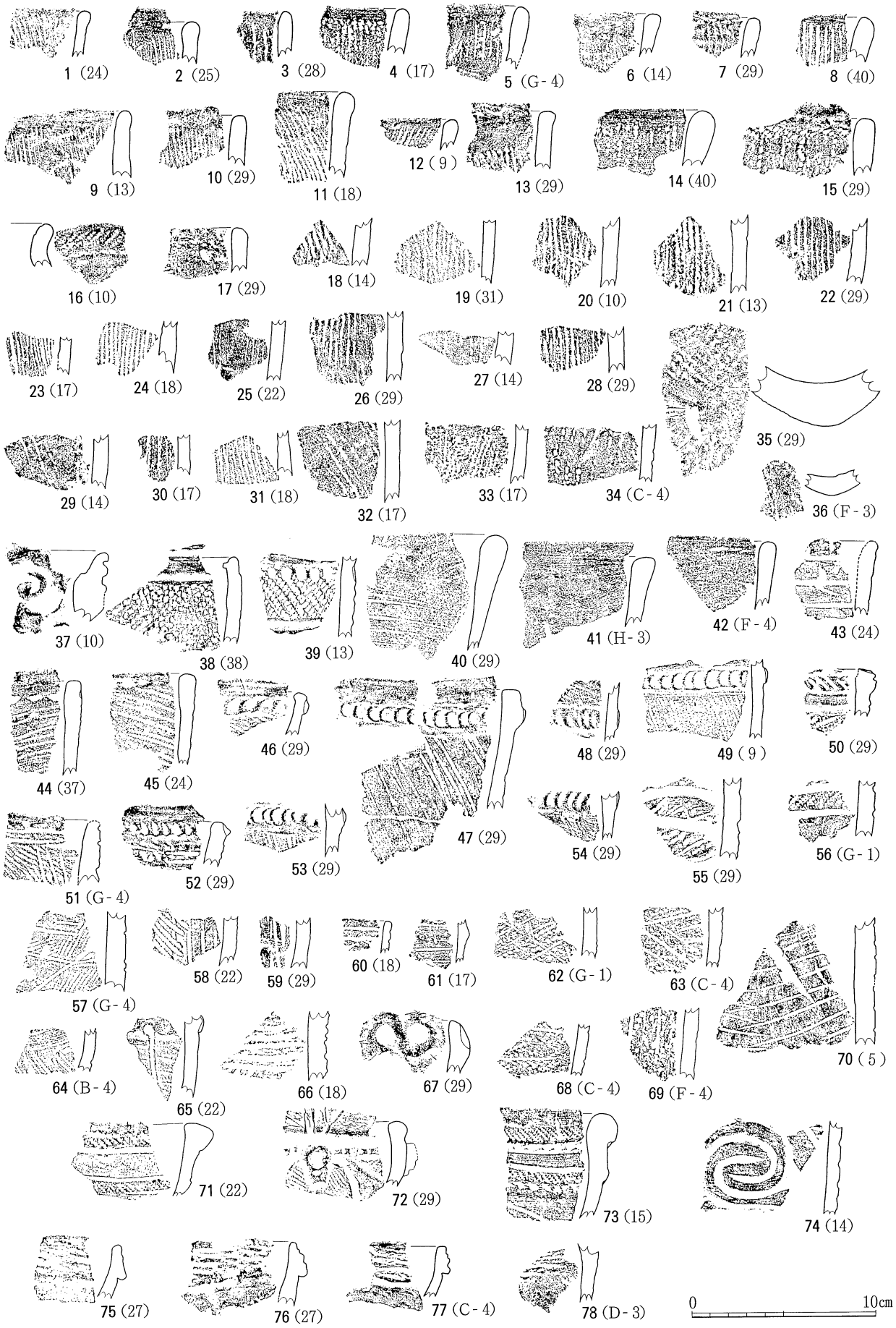
第59図　弥生土器拓影図（1）



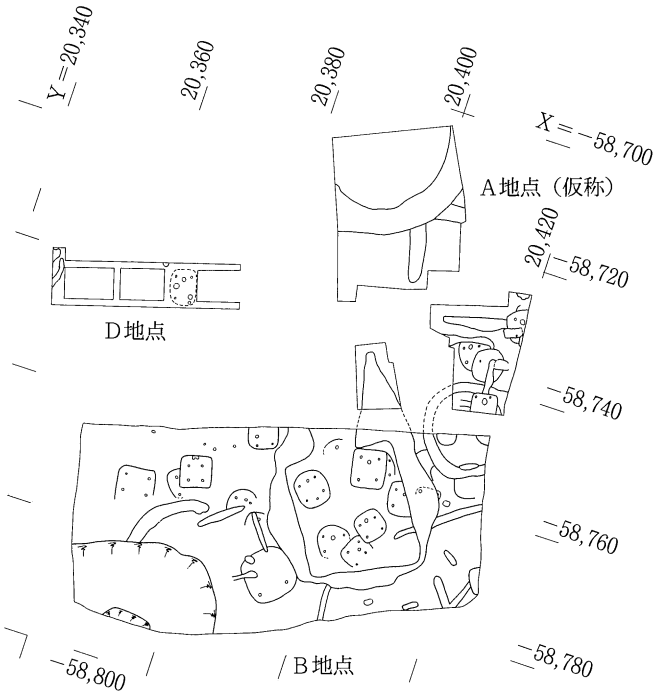
第60図　弥生土器拓影図（2）



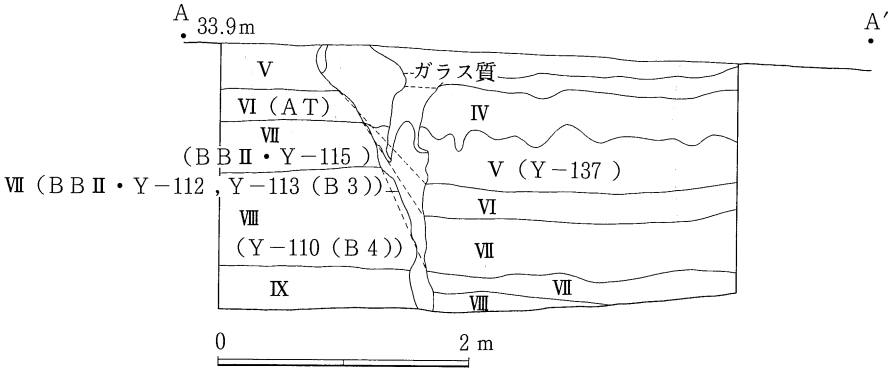
第61図　弥生土器拓影図（3）



第62図　縄文土器拓影図



第63図　姉崎東原遺跡全体図（1／600）



第64図　トレンチ東壁土層断面実測図

第３章　東原遺跡の火山灰層と地割れ

上　本　進　二

姉崎・東原遺跡は養老川下流部左岸の標高25ｍの台地上にある。遺跡の立地する台地は沖積平野との比高は約17ｍで、海食崖起源の急崖（段丘崖）に囲まれている。台地上は平坦であるが、奥行数100ｍ規模の谷津（谷地田型低湿地）や台地縁辺部の地すべりによって開析が進んでいる。とくに、遺跡の南側の谷津に面した崖端には馬てい形の滑落崖を持つスランプ型地すべりが連続して発生している。

１）遺跡の火山灰層について

９号住居跡を南北に縦断するトレンチにおいて、火山灰層を観察した。以下、上位よりその特徴を記載する。

完新世テフラ　黒褐色の腐植物質に富む土壌層で、最下部が漸移層に相当し、その上部のオレンジ色のスコリアを含む黒色土が富士黒土層(FB)に相当するものと思われる。FBの上位には灰褐色の弥生～古墳期のテフラ（湯舟第３スコリア下部）起源と思われる土層があって部分的に宝永スコリアが混入している。

Ⅳ層（ソフトローム）土壌化が進んだ風化火山灰層で、土壌学の分類ではＢ層に当たる。空隙が多く固結度の低い層である。テフラ起源のスコリア等はほとんど見られない。

Ⅴ層（ハードローム）Ⅳ層との境界部は植物根や地割れによって波状になっており、一様ではない。中部から下部には、径5-7㎜のオレンジ色スコリアと、径２㎜以下の黒色スコリアが多く見られる。これらのスコリアは富士山東麓でY-137と呼ばれる火山灰（上杉ほか、1980）であろう。

Ⅵ層　中部にATがあり、その上位には１㎜程度のオレンジ色スコリアと凝灰岩片が散在する。相模野台地のL3層中上部に相当する。

Ⅶ層上部　下部を中心に径５㎜の青灰色～濃緑色の凝灰質岩片が多く見られ、非常に特徴的である。これは、富士山の基盤岩が噴火の際にもぎ取られて飛来した岩片（本体物質）で、空隙が少ないために末風化のものが多い。富士山東麓のY-115に比定できると思われる。相模野台地のL3層下部に相当する。

Ⅶ層下部（第２黒色帯）　明瞭な黒色帯なので識別は容易である。径3-5㎜のオレンジ色と茶色のスコリアが多く含まれている。また、径５㎜の青灰色～濃緑色の凝灰質岩片も含まれているが、含有量はⅦ層よりも少ない。富士山東麓のY-112・１13に比定できると思われる。相模野台地のB3層に相当する。

Ⅷ層　Ⅶ層下部からⅧ層にかけて径1-2㎜程度の白色パミスが次第に増加する。白色パミスには細かい黒い斑点があるのが特徴である。これは相模野台地のB4層に特徴的な『花崗岩パミス』(Y-110)と呼ばれる本体物質であり（上杉ほか、1980)、その色調が花崗岩に似ているところからその名がある。本層下部は相模野台地のL5・B5・L6に相当するの可能性が高い。

Ⅸ層　Ⅷ層からⅨ層にかけて『花崗岩パミス』(Y-110)とは別の径１㎜以下の細かい白色粒が漸増する。これは箱根中央火口丘から噴出したパミス群(CCP7～1)で、立川ローム層最下部から武蔵野ローム層にかけて急増する。黒い斑点がなく風化すると黄色味を帯びてくるので『花崗岩パミス』と区別できる。本層は相模野台地のB5・L6・武蔵野ローム上部に相当するのであろう。

２）地割れについて

姉崎東原遺跡では幅約60㎝で遺跡を東西に横切る地割れが検出された。この地割れに直交するトレンチに現われた地割れ断面の観察結果を以下に述べる。

図に示したように、地割れは地表部で幅60㎝、地下２ｍ地点で幅15㎝ほどであった。地割れの上部には富士黒土層(FB)が落ち込んでおり、層内からアカホヤ火山灰が検出されている。このアカホヤ火山灰は土層中に堆積した状態のまま地割れに落ち込んでいることから、地割れの形成はアカホヤ火山灰堆積後(6300y.B.P)であろう。地割れの下部には崩壊したロームブロックが落ち込んでいる。地割れの北側と南側でATが垂直方向に約80㎝ずれており、地割れは重力断層に伴う開口割れ目であることが分った。断層の走行はN68°E,70°SEであった。

また、トレンチの周辺にも小規模な地割れが無数に入っており、いずれも南に向かって階段状に滑り落ちるタイプの変位をしている。同じような例が神奈川県藤沢市の慶応義塾藤沢校地内遺跡でも検出されており（上本1980)、層理面にほぼ平行にすべり面が形成されることによって発生する層すべりが起こったものと考えられる。そして、本遺跡周辺に連なる地すべり群と関連をもって形成されたものと思われる。おそらく地震または豪雨が発端となったのではなかろうか。

トレンチの東隣には弥生時代後期の住居址があり、その床面は地割れに落ち込んだ土の上に貼床をして住居としている。このことから、地割れの形成時期は弥生時代後期よりも古い時期になる。前記した地割れに落ち込んだ土層の年代と併せて考えると、概ね6000～2000年前間ということになる。

第4章　ま　と　め

今回の調査は、約2000㎡という限られた部分でのものであり、集落全体の様相について論じることはできない。ここでは、断片的な様相から推察される大略を述べるに留めておきたい。

これまで明らかにしてきたように、この台地上において、人々の生活が営まれるようになったのは縄文時代早期に遡るようであるが、縄文時代の直接的な生活の痕跡としての住居跡は見出されていない。断続的に後期までの遺物が見られるのみである。

弥生時代中期宮ノ台式期にいたって、集落の形成が開始され、それは古墳時代初頭まで継続したものと考えられる。この間が厳密に連綿として集落域であったかどうかは出土遺物の僅少性から断定し難い部分も残るが、中期もあって後期もあるという程度の捉え方において、連続しているといえる。南関東地方における弥生時代の土器編年は、わずかに中期宮ノ台式が孤高を保っている状況にあり、それ以降の枠組みは非常に流動化している。型式名を与えるのがためらわれる状況となりつつある。なお、集落を巡る溝の存在は、今回の調査の中では確認されていない。

集落域から墓域へと転化するのは、古墳時代初頭の住居が廃絶してから、あまり間を置かない時期であったと考えられる。前方後方墳の築造がその契機になったと思われる。この前方後方墳は、周溝が全周しないことおよび周溝の形態がルーズな感を呈するという特徴を有する。いわゆる出現期古墳の特徴といえるものであるが、周溝から出土した遺物からは、出現期とは位置付け難い。典型的な小型丸底坩の存在がその一つの指標であり、二重口縁の底部穿孔壺・周溝出土のやや大型の２つの壺における装飾の欠如等からも、古墳時代前期の真っ直中にあると捉えられる。いわゆる外来系の土器の出土は認められず、小型精製土器群の様相も不明瞭である。同じ養老川水系でも、右岸に存在する神門古墳群とは、時期的にも開きがあり、土器様相も全く異なるといえる。被葬者のありかたの相違を物語っているのであろうか。

養老川右岸では、神門３号墳の築造以後、前期の大型の前方後円墳は遂に出現することがなかったのに対し、左岸においては、今富塚山、姉崎天神山、釈迦山の３基の築造をみている。今富塚山については、４世紀前半という年代が与えられている。この年代観については、否定も肯定もできる材料を持ち合わせていないが、現段階では漠然と古墳時代前期と捉えておきたい。これら前方後円墳と、今回存在があきらかになったこの前方後方墳との関係をどう捉えるかが一つの問題となろう。前方後円墳の拡散に先行して、前方後方墳の築造が広がるという見方がある。また、県内の傾向から、前方後円墳を築造しえない地域において、前方後方墳が築造されたと言う見解もある。少なくとも、後者のような理解は、今回の調査によってその修正を図る必要が生じている。前者については、主要な３基の前方後円墳の実体がいまだに不明な部分が多いところから、論を進めるのは若干ためらわれるところである。ただし、この前方後方墳が３基の前方後円墳のいずれよりも先行すると考えた場合、これら前方後円墳の築造がかなり短期間に集中することとなり、かかる理解にはやや無理があるようにも思われる。むしろ、前方後円墳の築造と並行する（３基の築造順序はここでは問わない）形で、この前方後方墳の築造が行われたと考えておきたい。ここにおいて、形態の相違は、時期的な部分よりも、被葬者の階層差と捉えられよう。当然、並行するような形での労力の集中を可能としうるような状況を想定する必要が生じてくる。身分制あるいは分業制といった理論的側面で整理しておくことが求められようが、ここでは踏み込んだ見解を提出する材料に欠けており、今後の検討課題としておき

たい。また、このような前方後方墳の被葬者の性格を巡っては、「派遣将軍」を想定する見解もある(1)。これらは、いわゆる外来系の土器の伴出を一つの根拠にしたものであるが、今回検出された前方後方墳からは、外来系の土器の出土は認められず、また上述のような築造の時期の問題からして、前方後円墳の築造ののちに将軍が派遣されたこととなり、このような理解は無理が生じる。

養老川水系を巡る古墳時代の状況については、甘粕健氏の労作がある(2)。ただし、当時の状況と、今日における研究の成果とは齟齬をきたしている部分があることも念頭においておく必要がある。これは、甘粕氏の見解に限った事ではないが、養老川水系における生産基盤および水利の問題については、特に慎重に考えるべきであろう。養老川水系であるところから、同川によって形成された沖積平野をその生産基盤とし、その水利事業を軸に古墳時代の社会をとらえることについては、他地域の状況を敷衍したうえで成りたってきている面もあろうが、養老川の本流を管理して灌漑事業を行うことついては、同川が近年まで幾度か流路を変えるほどの暴れ川であったところから並み大抵のことではない。これは中流域の牛久古墳群に関しても同様な状況であったと思われ、近年でも集中豪雨により氾濫をおこし、水田一帯が水没する事がまま見られる。沖積平野を安定した生産基盤としてみることに対しては、身近にいる人間にとっては懐疑的にならざるを得ない。強いて言えば姉崎二子塚の乗っている砂堆と台地の間が比較的安定しているとは思われるが、水はけの悪い後背湿地的環境であったかもしれない。このような場所に関しては、排水のコントロールに主眼が置かれることになろう。水利をめぐる利害の対立あるいは調整機能といったものを、養老川本流に求めることについては、疑問とするところがある。谷水田あるいは沖積平野の限られた部分を生産基盤として想定し得るに留まるのではないだろうか。水系を軸とした考え方の枠組みから一旦離れる必要がある。大規模土木事業はアジア的専制国家の象徴であるかのように見る傾向があるが、我が国において、国家的土木事業といいうる程の大規模な事業がどこに見だせるのか、疑問である。王権あるいは地域首長の権力の増大を別の契機に求める必要があるのではないだろうか。水利事業に対する、いわば過大評価といった点に関しては、最近の都出比呂志氏は、国家における流通機構を重視すべきとする見解を出されている(3)。考古学的にどの様な流通の有り方をもって国家成立の指標とするかと言う問題が残っているとは思うが、視点としては、重要である。とくに房総のように良好な石材を産出しない地域にあっては、縄文時代から生産用具が他所依存的であったと思われ、それら石材産地が石製品あるいは素材としての原石の供給を終焉させることは、房総の内部の社会状況如何に関わらず、房総全体を鉄依存に向かわせる契機になったと考えられる。生産用具の欠如は個人さらには共同体の死活問題であって、縄文時代とは異なる交通を模索したことは想像に難くない。死活問題であることによって、供給側と需要側の関係では供給側が有利な位置におかれると見られ、一種の上下関係が発生する可能性があるのではないか。共同体の生産基盤の優劣は生産用具の確保、維持に規定されることも可能性として存在しよう。眼前に沖積平野が広がっていたとしても、それは潜在的なものに留まるのであって、生産用具が不十分であれば、あくまでも「可」耕地以上の意味を持つものではない。房総における石器の終焉については充分な検討を踏まえたわけではないが、生産用具の根本的な転換の時期における流通機構の再編を考慮する必要がある。かかる状況に直面したときには、それまでの生産力の大小はある意味で意味を失う可能性もあり、いち早く鉄の供給ルートを確保した方が経営規模の大小に関わらず優位に立つような状況も想定し得る。おそらく、当時の鉄素材の供給は畿内によるところが多かったと思われる

が、房総と畿内の間でも優劣の関係が生じていたかもしれないのであって、鉄の供給に対する反対給付を求められた可能性もあるのではないだろうか。推測に推測を重ねるものではあるが、房総半島の海岸部に砂鉄鉱床が展開していることに注意する必要もある。素材としての鉄の供給に対する反対給付として砂鉄の供給があったのかもしれない。

養老川流域における古墳群の消長を瞥見する限り、古墳時代を通して首長墳が継続的に築かれたといえる地域は見当たらない。下流右岸の神門の3基ののち、左岸の姉崎古墳群、のちには中流域の牛久古墳群へと勢力が移動している感もある。

註

(1) 高　橋　一　夫　「前方後方墳の性格」『土曜考古』第10号
土曜考古学研究会　1985

(2) 甘　粕　　健　「養老川水系の古墳分布と山王山古墳の歴史的性格」『上総山王山古墳』
市原市教育委員会　1980

(3) 都　出　比呂志　「日本古代国家形成論序説 －前方後円墳体制論の提唱－」『日本史研究』343
日本史研究会　1991

写　真　図　版

図版 1

姉崎東原遺跡Ｂ地点と
姉崎天神山古墳

1

姉崎東原遺跡Ｂ地点全景

2

図版 1

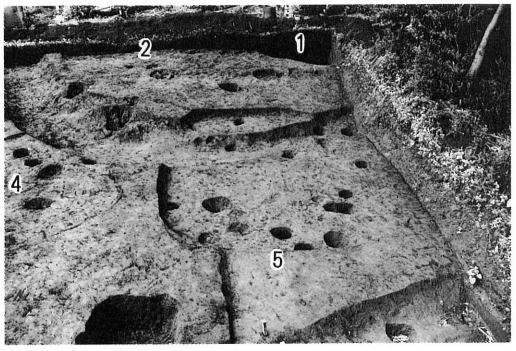
1

2

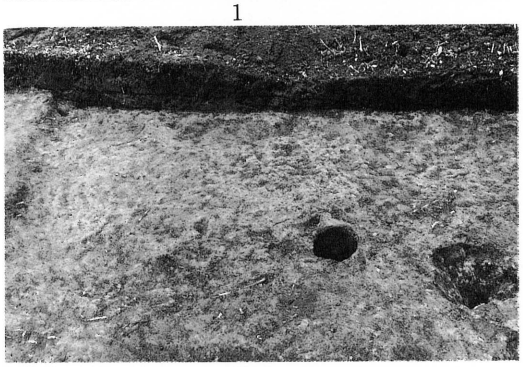
図版 2

北東部全景 1	5 号（住）全景 2
2 号（住）全景 3	1 号（住）全景 4
14～16号（住）全景 5	13号（住） 遺物出土状況（1） 6
13号遺物出土状況 （2） 7	13号 全景 8
14号（住）全景 9	16号（住）全景 10

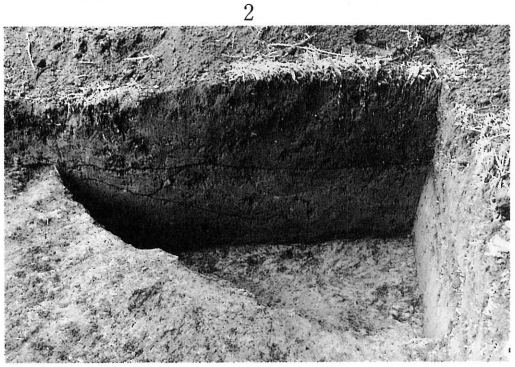
1



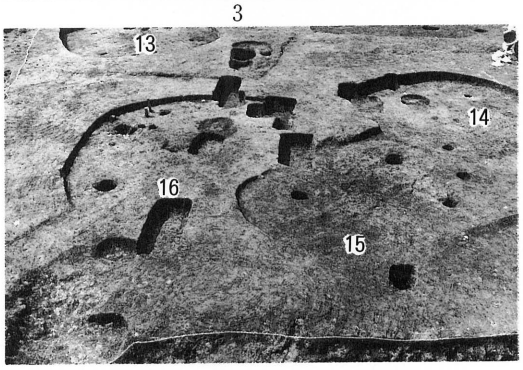
2



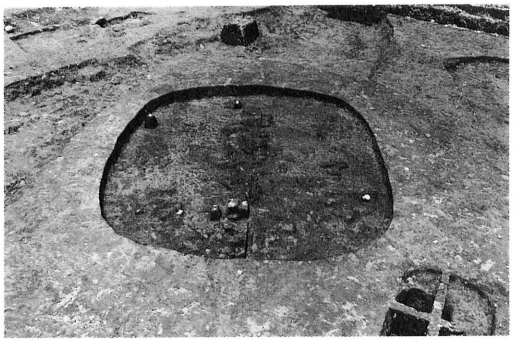
3



4

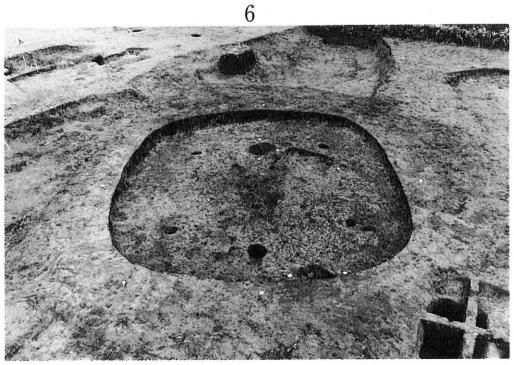


5

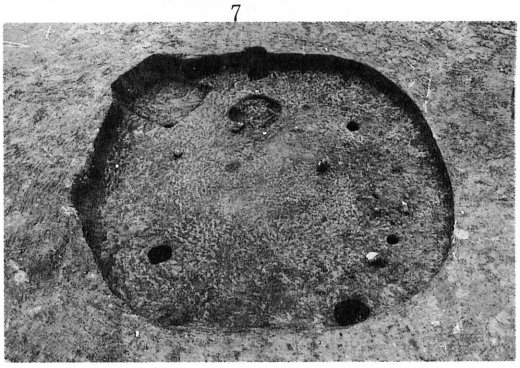


6

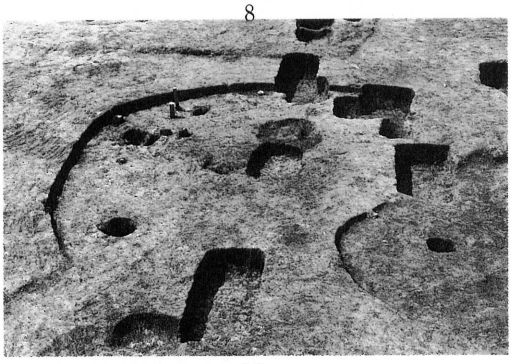
7



8



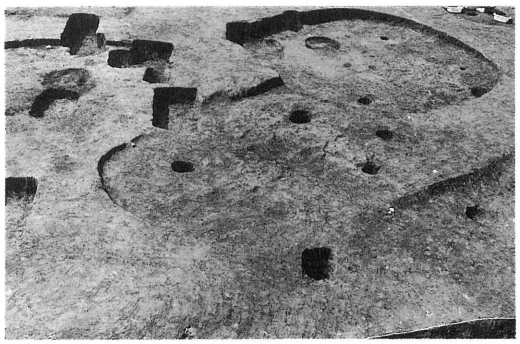
9



10

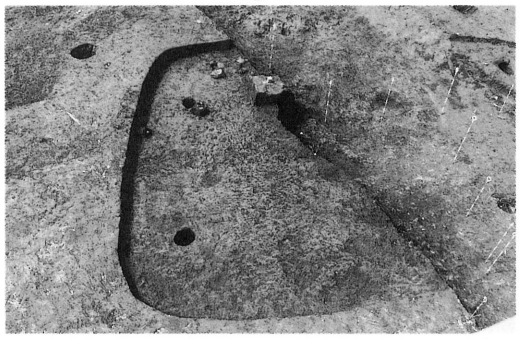
図版 3

15号（住）全景 1	10号（住）全景 2
8 号（住）全景 3	12号（住） 遺物出土状況 4
7 号（住）全景 5	北西部全景 6
22号（住）全景 7	24号（住）全景 8
27号（住）全景 9	27号カマド周辺 遺物出土状況 10



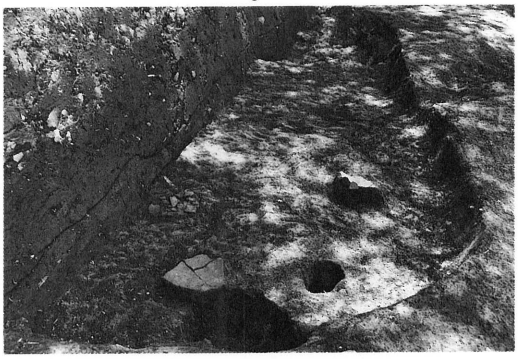
1

2

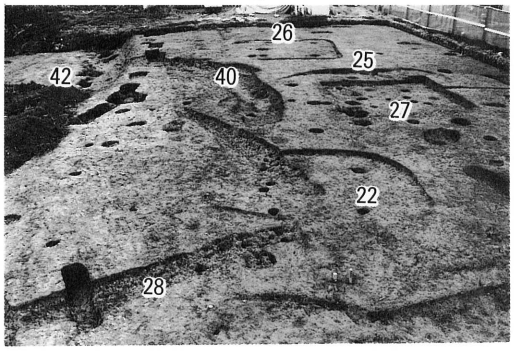


3

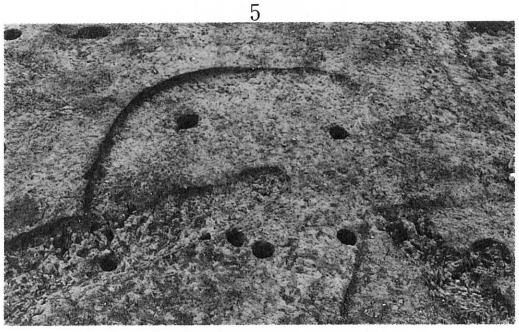
4



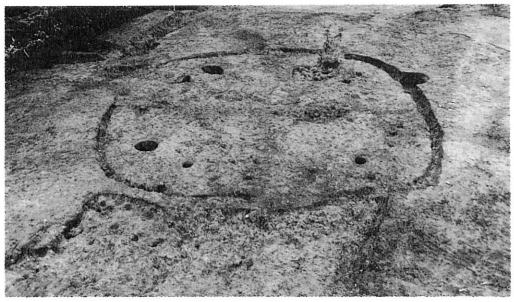
5



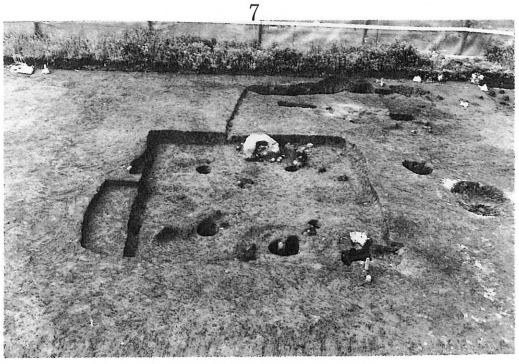
6



7



8



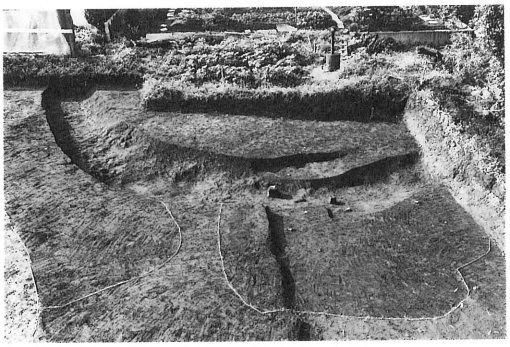
9

10

図版 4

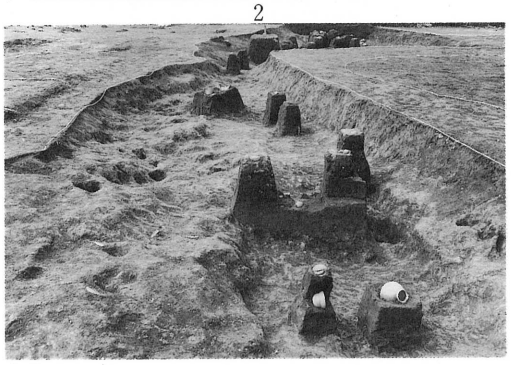
<table>
<tr><td>17号（住）全景
1</td><td>30号（墓）全景
2</td></tr>
<tr><td>29号(墓)西くびれ部
遺物出土状況
3</td><td>29号西辺
遺物出土状況
4</td></tr>
<tr><td rowspan="2">29号全景
5</td><td>29号坩・壷出土状況
（西辺）
6</td></tr>
<tr><td>29号壷出土状況
（西くびれ部）
7</td></tr>
</table>

1



2

3



4

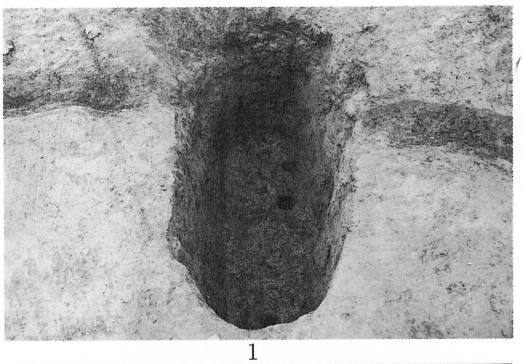
5

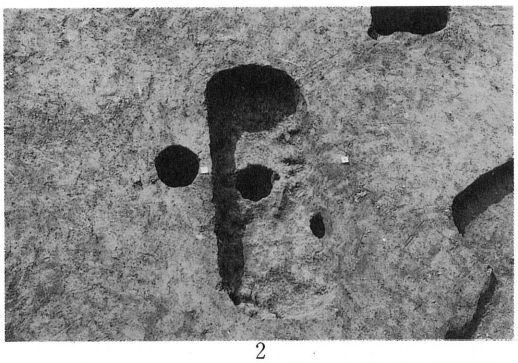
6

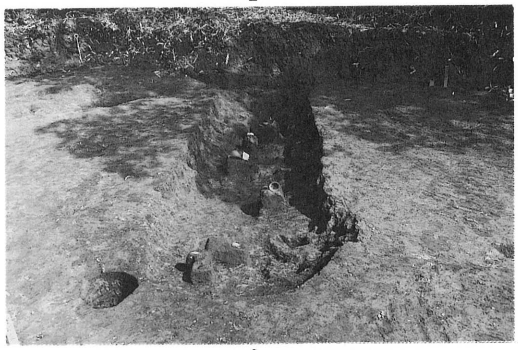
7

図版 5

35号（土坑）全景 1	32号（土坑）全景 2
38号（溝）全景 3	31号（土坑）全景 4
41号（溝）全景 5	28号（墓）周辺全景 6
40号（溝）全景 7	42号（台地整形）（１） 8
42号（２） 9	地割れ土層断面 10

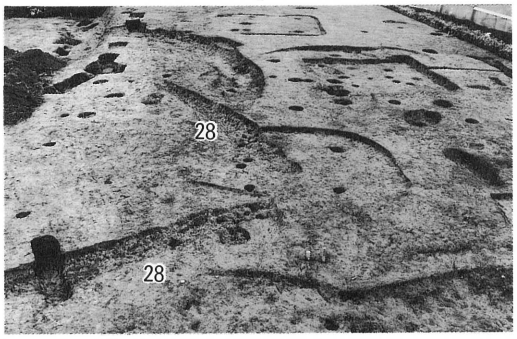

1


2

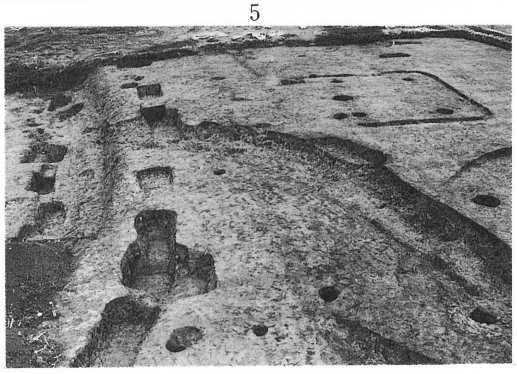

3

4

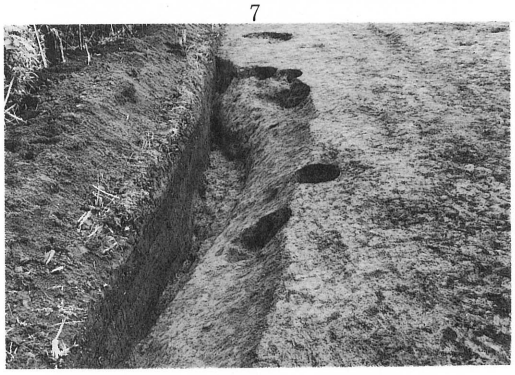
5

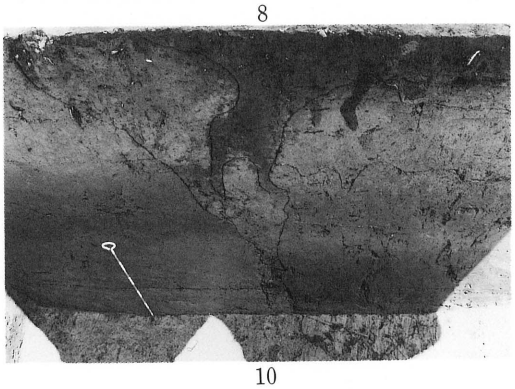


6


7

8


9


10

図版 6

1 号：1

3 号：2 ～ 5

5 号：6 ～15

7 号：16～18

8 号：19～22

1（4－1）

2（6－1）

3（6－2）

4（6－3）

5（6－4）

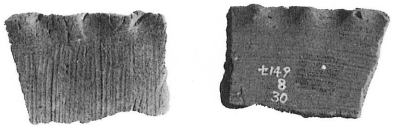
6（8－1）

7（8－2）

8（8－3）

9（8－8）

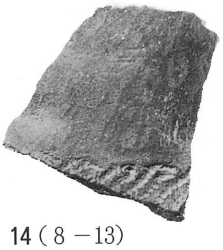
10（8－9）



11（8－11）

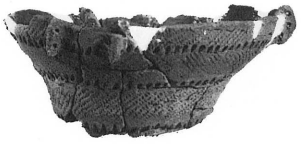
12（8－10）

13（8－12）



14（8－13）

15（8－14）

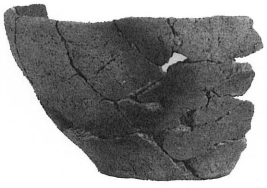


16（9－1）

17（9－2）

18（9－3）

19（10－2）



20（10－1）

21（10－3）

22（10－4）

（縮尺不同カッコ内は挿図番号　以下図版15まで同じ）

図版 7

8号：1～6，8～11

9号：7,13,15～16,21

10号：12,14,17,19,22,24

12号：18,20,27,28

13号：23,25～26

1（10－5）

2（10－12）

3（10－8）

4（10－9）

5（11－1）

6（11－2）

7（12－1）

8（10－6）

9（10－11）

10（10－10）

11（10－7）

12（14－2）

13（12－5）

14（14－3）

15（12－3）

16（12－2）

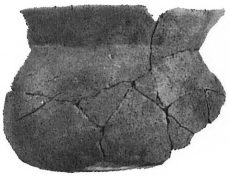
17（14－1）

18（16－4）

19（13－1）

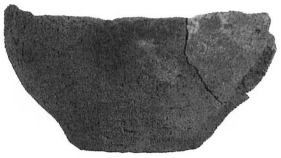
20（16－3）

21（12－4）


22（13－3）

23（17－2）

24（13－2）


25（17－3）

26（17－1）

27（16－2）

28（16－1）

図版 8

14号：1～17

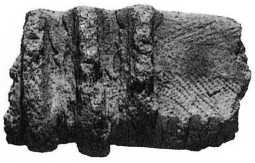
15号：18

16号：19～25,29

17号：26

20
21 >号：27～28

1（18－1）


2（18－2）

3（18－3）

4（18－4）

5（18－5）

6（18－6）

7（18－7）

8（18－8）

9（18－9）

10（18－10）

11（18－11）

12（18－12）

13（18－13）

14（18－16）

15（18－17）

16（18－14）

17（18－15）

18（19－1）

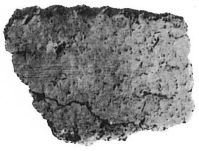
19（20－1）

20（20－2）

21（20－4）

22（20－7）

23（20－6）


24（20－5）

25（21－1）

26（23－1）

27（26－1）

28（26－2）

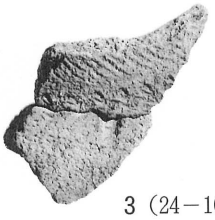
29（20－3）

図版 9

18•19号：1～23

1（24－16）

2（24－15）



3（24－10）

4（24－14）

5（24－13）

6（24－ 9）

7（24－ 3）

8（24－20）

9（25－ 1）

10（24－19）

11（24－12）

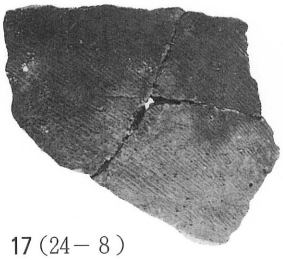
12（24－11）

13（24－22）

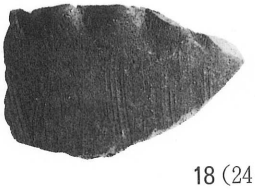
14（24－ 4）

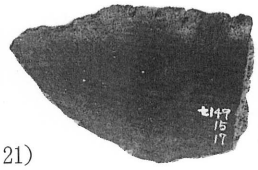
15（24－ 5）

16（24－ 6）



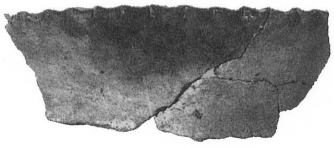
17（24－ 8）





18（24－21）

19（24－ 2）



20（24－ 1）

21（24－ 7）

22（24－17）

23（24－18）

図版10

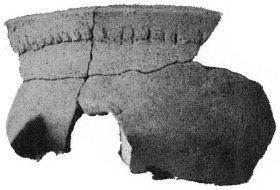
22号： 1 ～10

24号：11～15,18～19,27

25号：21

26号：16

28号：17,20,22～26



1（27－1）

2（27－2）

3（27－3）

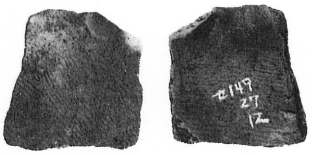
4（27－7）

5（27－5）

6（27－8）

7（27－4）

8（27－9）



9（27－10）

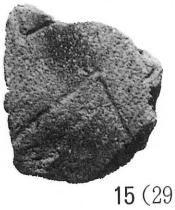
10（27－6）

11（29－3）

12（29－2）

13（29－6）

14（29－8）



15（29－7）

16（31－1）

17（36－2）

18（29－5）

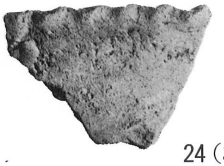
19（29－4）

20（36－6）

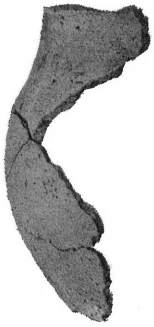
21（30－1）

22（35－3）

23（35－4）

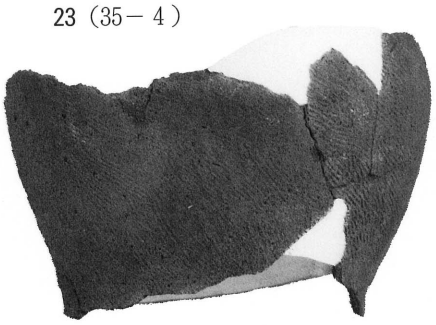


24（35－1）



25（35－5）

26（35－7）



27（29－1）

図版11

27号：1～21

1（32－7）

2（32－4）

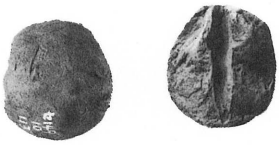
3（32－2）

4（32－8）

5（32－9）

6（32－5）

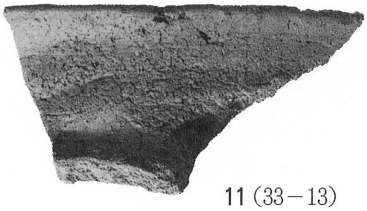
7（32－3）



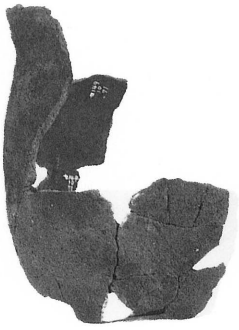
8（32－10）

9（32－6）

10（32－1）



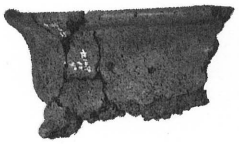
11（33－13）



12（33－11）

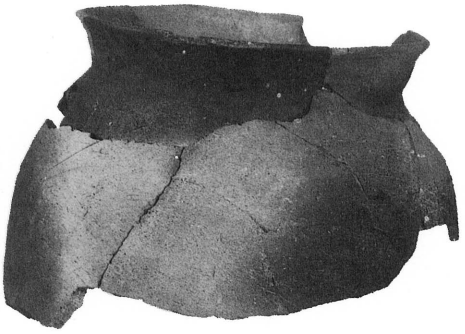
13（33－12）

14（33－14）



15（33－15）

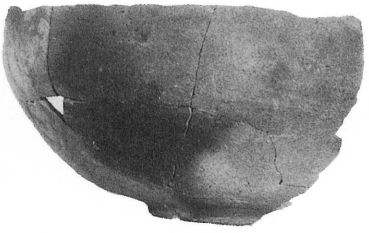
16（33－17）



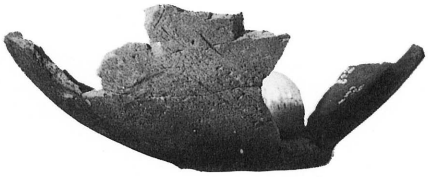
17（33－16）

18（33－18）

19（34－1）



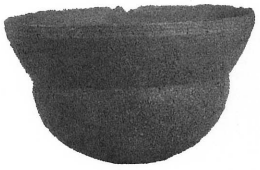
20（33－20）



21（33－19）

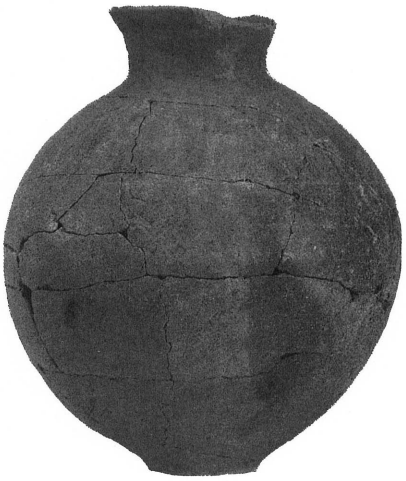
図版12

29号：１～11

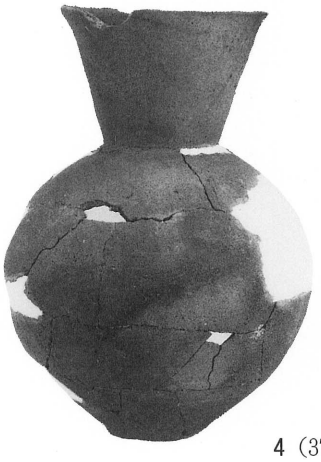


1（37－1）

2（37－3）



3（38－23）



4（37－2）

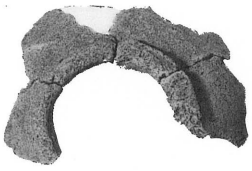
2（37－3）底

5（37－5）

3（38－23）

6（37－10）

7（37－12）



6（37－10）底

7（37－12）底

11（38－24）

8（37－13）

9（37－15）

10（37－14）

図版13

29号：１～19

1（37－8）

2（37－9）

3（37－11）

4（37－16）

5（39－34）

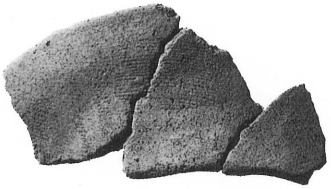
1（37－8）底

2（37－9）底

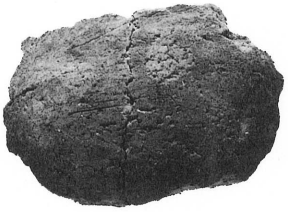
3（37－11）底

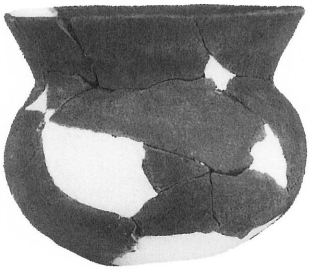
6（37－17）

7（39－30）


8（37－4）

9（38－7）


10（37－18）


11（39－29）

12（39－31）

13（37－22）

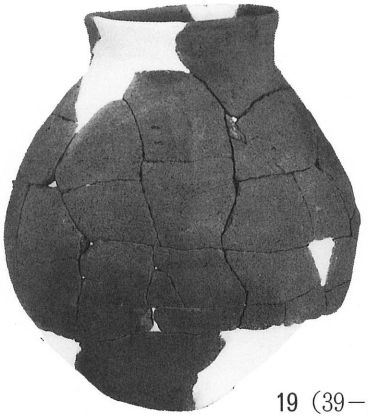
14（37－19）

15（39－27）

16（39－26）

17（37－21）

18（39－27）


19（39－35）

図版14

29号：1，3，13,22～24

30号：5，7，8，18～20

33号：21,27

37号：9

38号：2，4，10～12,14～17

25～26

42号：6

1（39－33）

2（51－20）

3（37－20）

4（51－1）

5（42－5）

6（41－1）

7（42－4）

8（43－1）

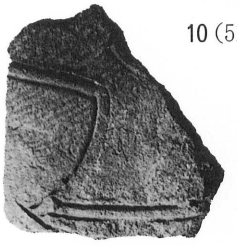
9（50－1）

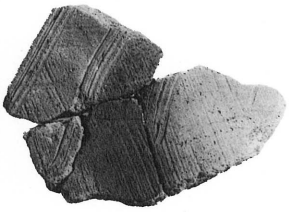
10（51－6）

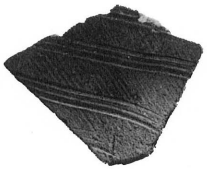
11（51－10）

12（51－8）

13（41－1）


14（51－11）


15（51－7）


16（51－5）

17（51－9）

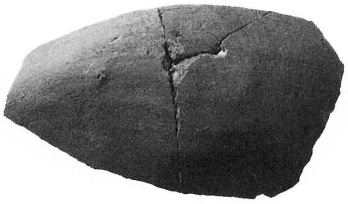
18（42－1）

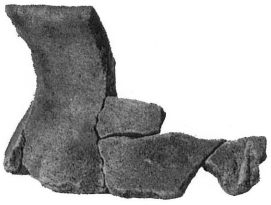
19（42－3）

20（42－2）

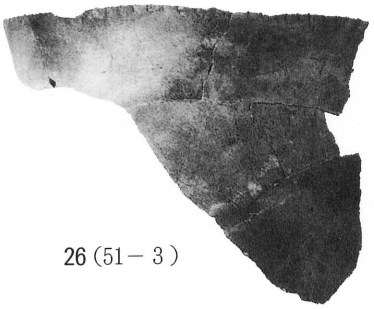
21（46－2）

22（37－6）


23（39－28）


24（39－32）

25（51－4）


26（51－3）

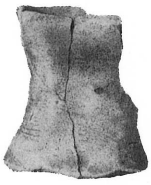
27（46－1）

図版15

5号 ： 9 ,11,12,14

17号 ：13

D - 3 ： 1 ～ 8 ,10,15～18



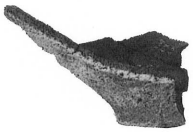
1（57－1）

2（57－3）

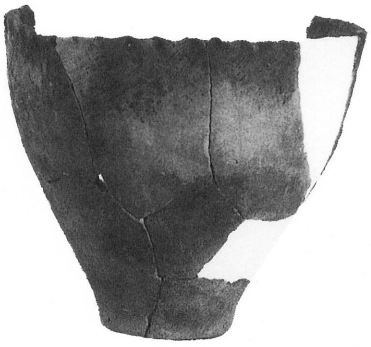
3（57－5）

4（57－6）

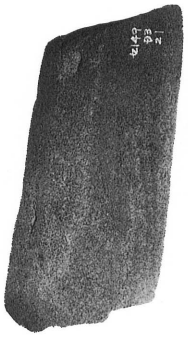
5（57－2）



6（57－7）



7（57－4）

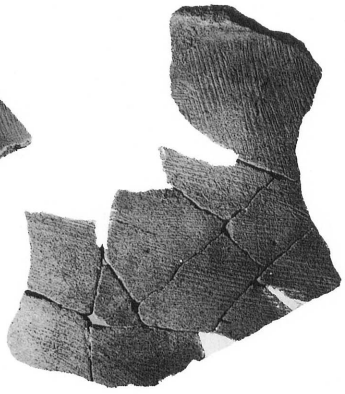


8（58－　）

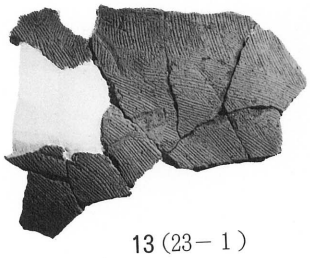
9（8－4）

10（57－10）

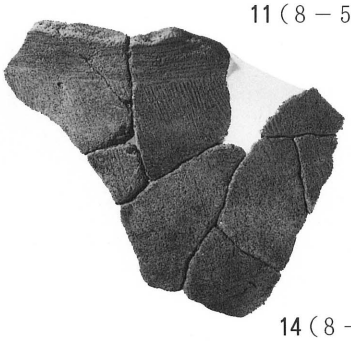
11（8－5）



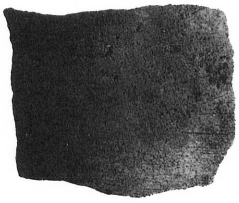
12（8－6）



13（23－1）

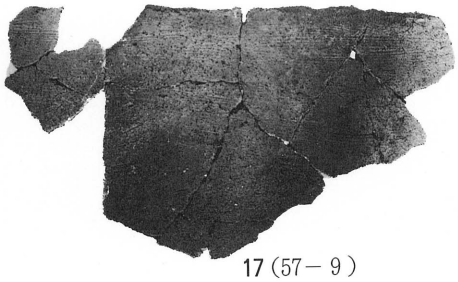


14（8－7）

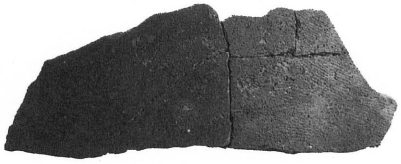


15（57－11）

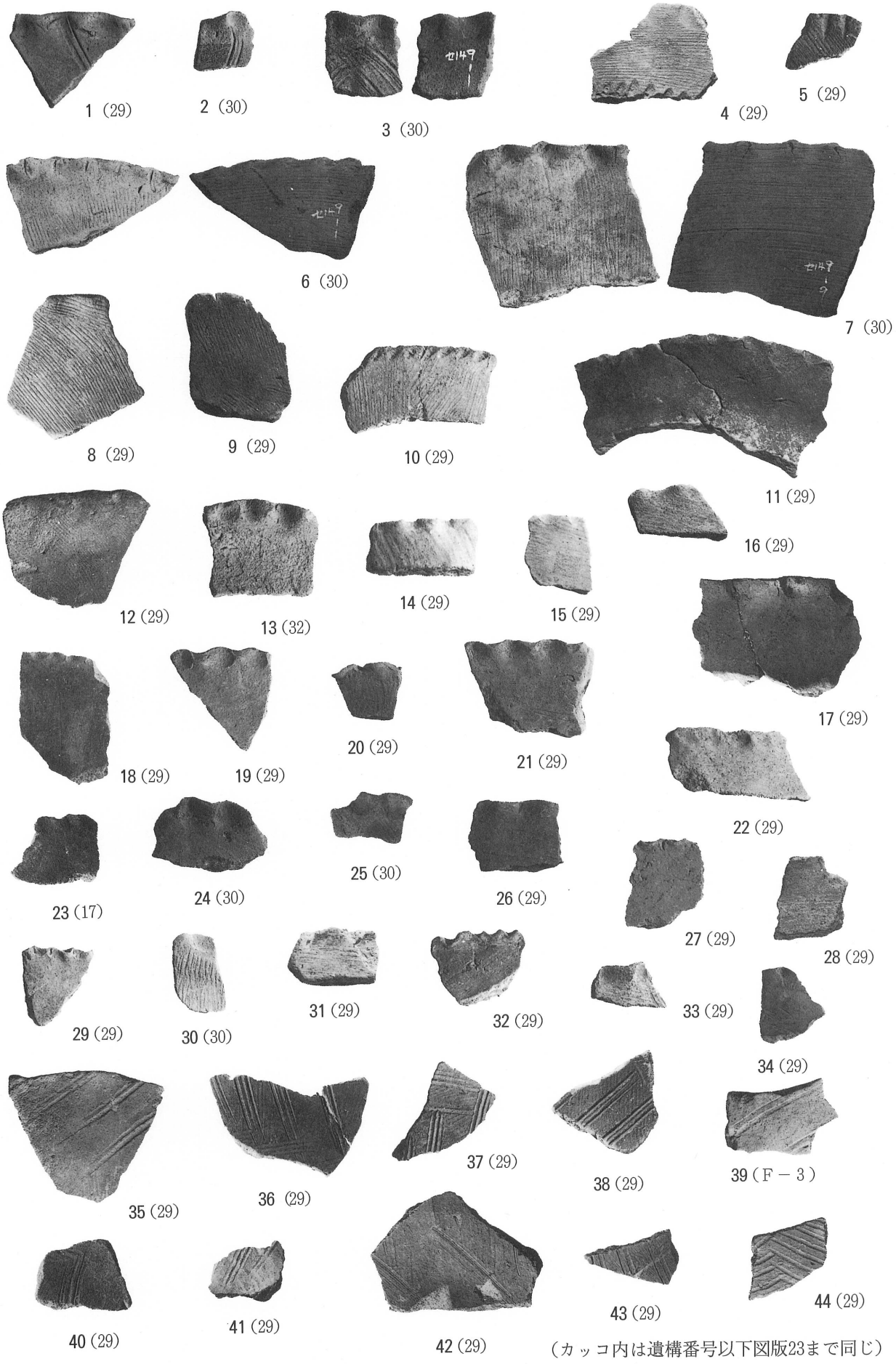
16（57－8）



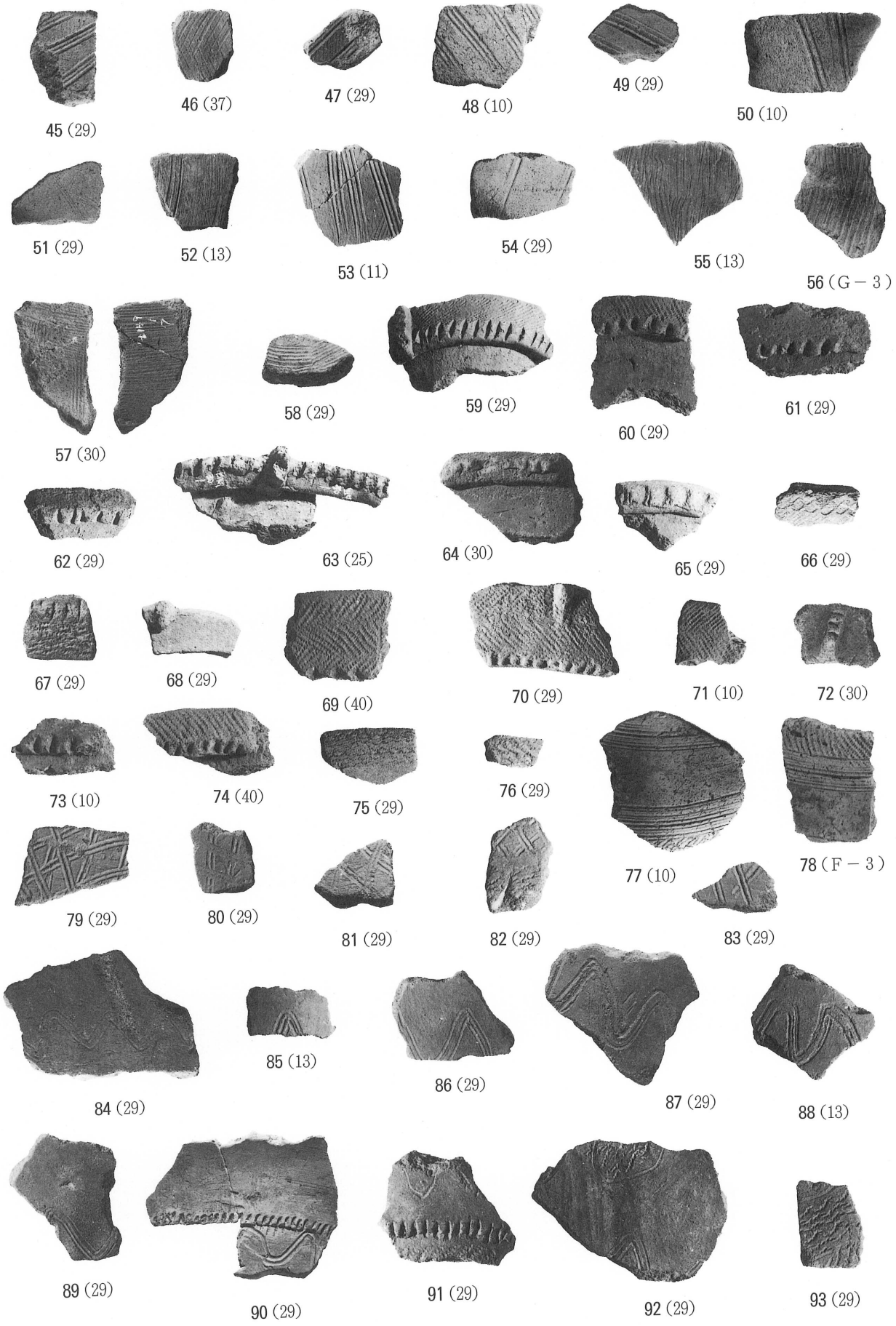
17（57－9）

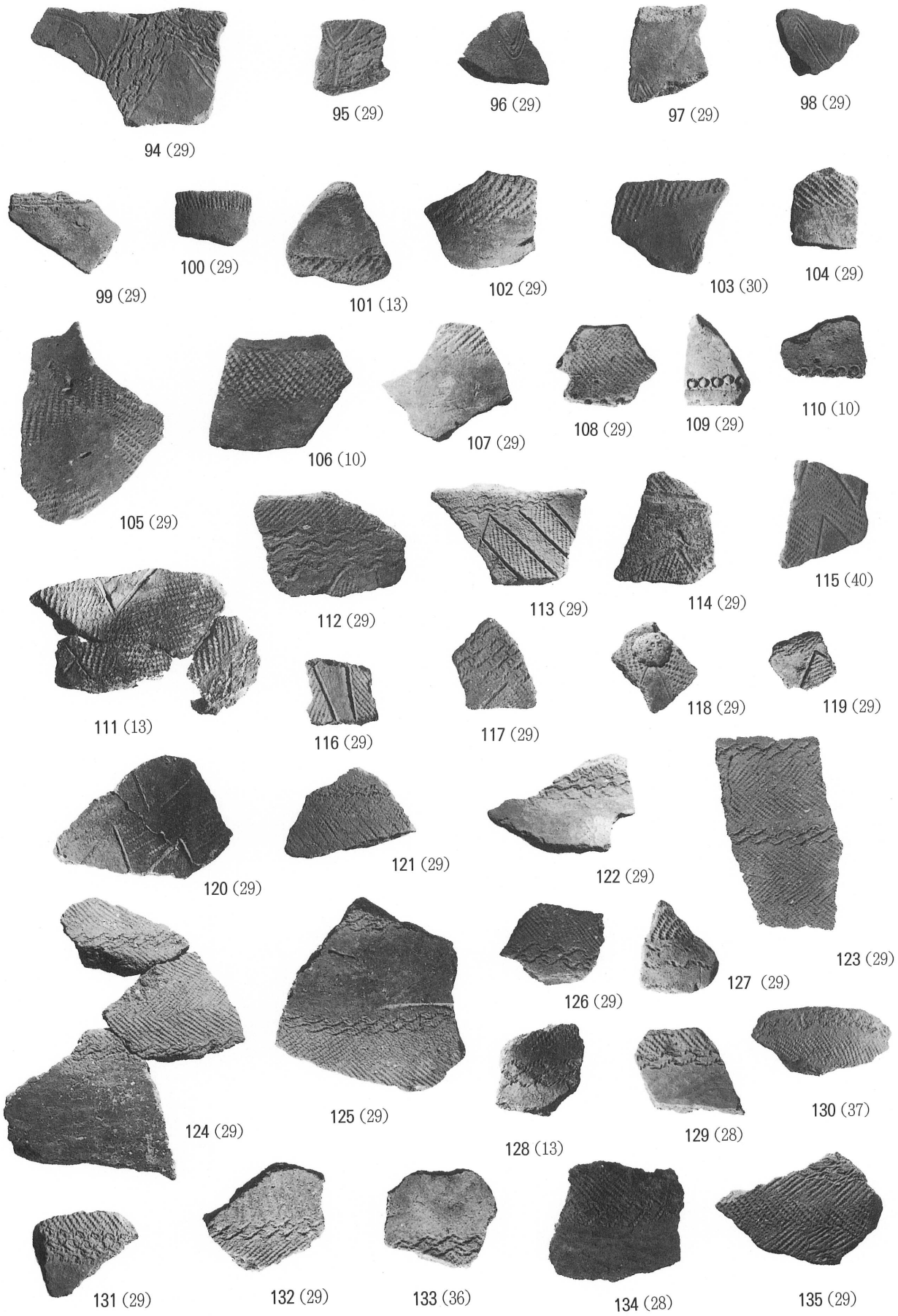


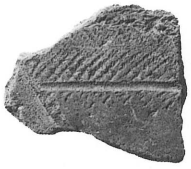
18（57－12）



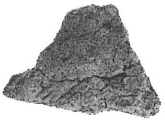
（カッコ内は遺構番号以下図版23まで同じ）


45 (29)
46 (37)
47 (29)
48 (10)
49 (29)
50 (10)
51 (29)
52 (13)
53 (11)
54 (29)
55 (13)
56 (G－3)
57 (30)
58 (29)
59 (29)
60 (29)
61 (29)
62 (29)
63 (25)
64 (30)
65 (29)
66 (29)
67 (29)
68 (29)
69 (40)
70 (29)
71 (10)
72 (30)
73 (10)
74 (40)
75 (29)
76 (29)
77 (10)
78 (F－3)
79 (29)
80 (29)
81 (29)
82 (29)
83 (29)
84 (29)
85 (13)
86 (29)
87 (29)
88 (13)
89 (29)
90 (29)
91 (29)
92 (29)
93 (29)


94 (29)
95 (29)
96 (29)
97 (29)
98 (29)
99 (29)
100 (29)
101 (13)
102 (29)
103 (30)
104 (29)
105 (29)
106 (10)
107 (29)
108 (29)
109 (29)
110 (10)
111 (13)
112 (29)
113 (29)
114 (29)
115 (40)
116 (29)
117 (29)
118 (29)
119 (29)
120 (29)
121 (29)
122 (29)
123 (29)
124 (29)
125 (29)
126 (29)
127 (29)
128 (13)
129 (28)
130 (37)
131 (29)
132 (29)
133 (36)
134 (28)
135 (29)


136 (29)

137 (40)


138 (29)

139 (30)

140 (29)

141 (29)

142 (29)

143 (29)

144 (29)

145 (13)

146 (29)

147 (29)

148 (29)

149 (22)

150 (11)

151 (16)

152 (29)

153 (29)

154 (30)

155 (29)

156 (29)

157 (36)

158 (29)

159 (29)

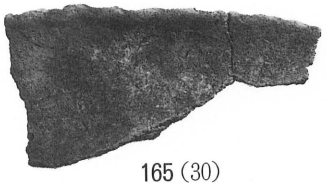
160 (29)

161 (C－4)

162 (29)

163 (29)

164 (29)


165 (30)

166 (30)

167 (29)

168 (C－11)

169 (29)

170 (32)

171 (29)

172 (32)

173 (29)

174 (C－4)

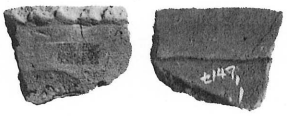
175 (30)

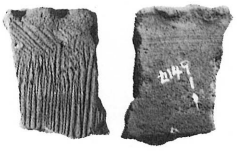
176 (29)

177 (10)

178 (29)

179 (30)


180 (30)


181 (30)

182 (30)

183 (40)

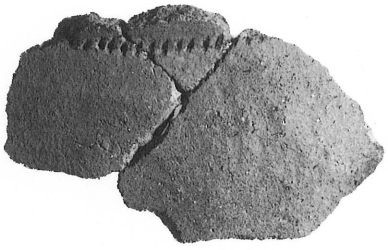
184 (17)

185 (29)

186 (29)

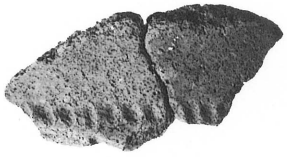
187 (29)

188 (29)


189 (29)

190 (29)

191 (29)


192 (30)

193 (30)

194 (29)

195 (29)

196 (29)

197 (29)

198 (29)

199 (29)

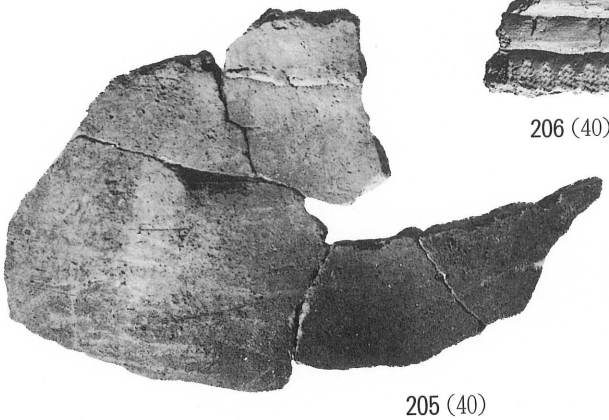
200 (29)

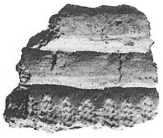
201 (29)

202 (29)

203 (29)

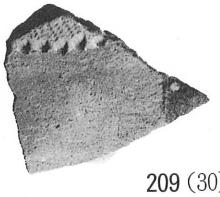
204 (29)


205 (40)


206 (40)

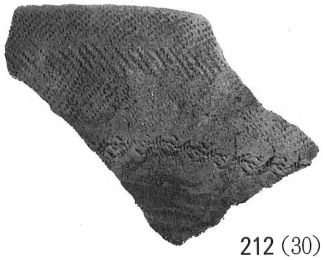
207 (29)

208 (29)


209 (30)

210 (30)

211 (F－3)

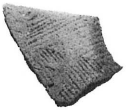

212 (30)

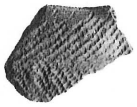
213 (29)

214 (29)

215 (29)

216 (29)


217 (G－1)


218 (30)

219 (30)

220 (30)

221 (30)

222 (13)

223 (H－3)

224 (29)

225 (29)

226 (29)

227 (29)

228 (13)

229 (29)

230 (29)

231 (32)

232 (F－3)

233 (23)

234 (29)

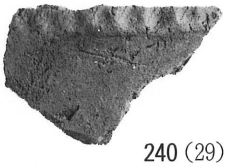
235 (E－4)

236 (29)

237 (29)

238 (40)

239 (29)


240 (29)

241 (29)

242 (29)

243 (29)

244 (40)

245 (29)

246 (30)

247 (29)

248 (29)

249 (36)

250 (29)

251 (37)

252 (25)

253 (F－4)

1 (24)

2 (25)

3 (28)

4 (17)

5 (G－4)

6 (14)

7 (29)

8 (40)

9 (13)

10 (29)

11 (18)

12 (9)

13 (29)

14 (40)

15 (29)

16 (10)

17 (29)

18 (14)

19 (31)

20 (10)

21 (13)

22 (29)

23 (17)

24 (18)

25 (22)

26 (29)

27 (14)

28 (29)

29 (14)

30 (17)

31 (18)

32 (17)

33 (17)

34 (C－4)

35 (29)

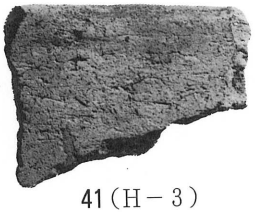
36 (F－3)

37 (10)

38 (38)

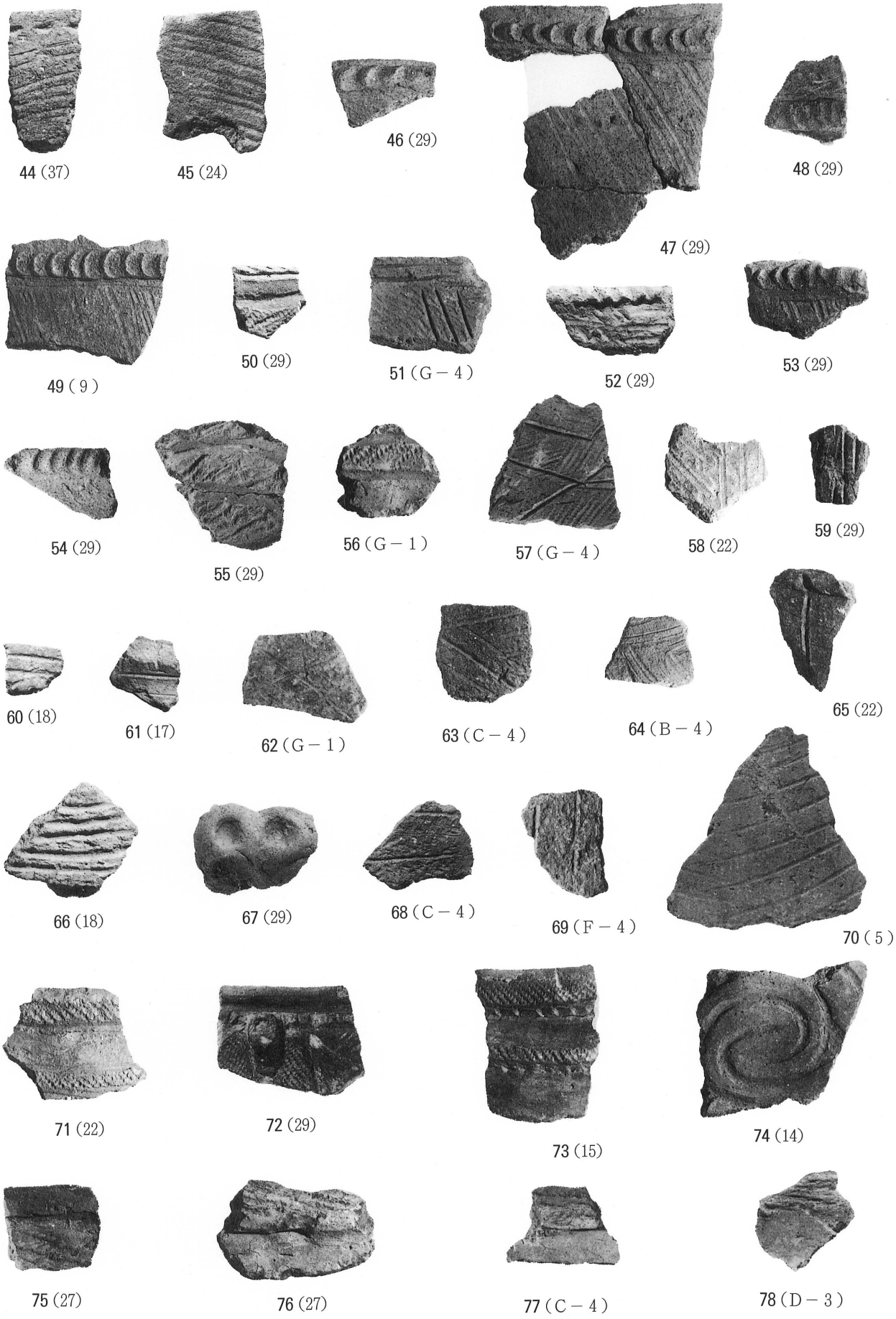
39 (13)

40 (29)


41 (H－3)

42 (F－4)

43 (24)


44 (37)
45 (24)
46 (29)
47 (29)
48 (29)
49 (9)
50 (29)
51 (G − 4)
52 (29)
53 (29)
54 (29)
55 (29)
56 (G − 1)
57 (G − 4)
58 (22)
59 (29)
60 (18)
61 (17)
62 (G − 1)
63 (C − 4)
64 (B − 4)
65 (22)
66 (18)
67 (29)
68 (C − 4)
69 (F − 4)
70 (5)
71 (22)
72 (29)
73 (15)
74 (14)
75 (27)
76 (27)
77 (C − 4)
78 (D − 3)

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第51集

市原市姉崎東原遺跡B地点

平成5年8月18日　印 刷
平成5年8月31日　発 行

編　集　財団法人　市原市文化財センター
発　行　大 和 建 設 株 式 会 社
財団法人　市原市文化財センター
〒290　千葉県市原市能満1489番地
Tel 0436（41）9000
印　刷　三 陽 工 業 株 式 会 社
〒290　千葉県市原市五井5510－1番地
Tel 0436（22）4348